國語科學講座

— VI —

國語法

日本文法史

小林好日

株式會社
明治書院

國語科學講座

— VI —

國語法

日本文法史

小林好日

株式會社

明治書院

目次

日本文法史

小林好日

序論

洋の東西を問はず、いづれの民族も、言語は一定不變のもので、はじめは多く神の授けたものと考へた。聖書(註一)には神が光を晝と稱け、暗を夜、穹蒼を天と稱け、乾いた土を地と稱け、水の集合を海と稱けたと云ふ。印度(註二)では刼初、語ることを得なかつた衆生が梵天の說いた四十七言を學んで始めて言語を得たと云つてゐる。わが國の國學者の考へたところもほゞ同樣であつた。

鹿持雅澄は「用言變格例三七」にいふ。

そもそもわが古への言語音聲の美く妙なることは、天地のはじめより神の御口づからいひそめ給ひしことにしあれば、さらにあだし國の鴃舌などとはかけてもひとしなみにいふべきものにあらず。さればそのもと、故(コトサラ)に轉(ウツ)し變(タガ)へていひなれたること、又より〳〵におのづから轉り訛りたる謂(ヨシ)など、今姑く準則を立てことわらむとするに、人ノ智(サトリ)もてしらるゝかぎりは、しらるゝことなれど、ひたふるにその準則のみにて推シきはめがたきことあるは、そのもと人のたくみに出たることならればなり

それ故にある國學者は語源を研究するのは、古代の正義を求めるのだといふ。丁度ストア派が自然に卽してゐる眞理（ἔτυμον）を知らうとしてたのと同じである。音義派が一々の音に內在してゐる意義を究めることに由て、語義を解釋しようとしたことも、同じ考が根柢を成してゐる。

語法の問題に於ても、宣長は係結の法則を古今變らぬものとなし、

上れる世は更にも言はず、中昔のほどまでも自らよく整ひて違へるふしはをさ〳〵なかりけるを、世下りては歌にもさらぬ詞にも、この整へを誤りて本來もてひがむるたぐひのみ多かる故に

と云ひ、上代語に中古語と反したものゝあるには、「たゞ上つ世の一つの格と見ゆ」と云ひ「てにをはのとゝのひにいたりては、もはら中昔の格とたがへる歌は百にひとつも見えず」と云つて片付けてゐる。ここに大きな矛盾を見逃せなかつた義門(註三)は、之を解決するに、上代の一格も中古にないとは決められない、目に觸れないのは、古今互にたゞ物に書かれなかつただけだと說明することに由て、言語不變の法則を信じようとしてゐる。

西洋の言語學も、わが國と違はず、長く謬見のうちに在つたが、十九世紀初頭に於けるサンスクリツトの發見は、この學問の方向に對して記念すべき急轉向を行はしめた。希臘ラテンの諸語がサンスクリツトと起源を同じうする一の共同祖語から變化したものであることを知るに及んで、希臘羅甸語を固定したものと考へたり、各國語に規範的の古典形式を求めむとする如き固陋な考を一擲して、凡ての言語が絕えず流動し、成長してゆくものと考へるやうになつて、學問の視野はひらけ、言語の秘密があばかれるに至つた。わが國語の歷史的研究法の起つたのは、實に明治以降、この西洋の言語研究法の影響によるものである。

かの春庭が「詞の通路」に、

詞のはたらきてにをはなど、神代よりおのづからさだまりありて若し之にたがふ時は、其ことわりわからず聞えぬ事となるなり。其定りの意はふかきゆゑよしさるべきことわりあるべきことなるべけれど、人のつたなき心もてはかり知るべきことならねば

と云つて、國語に一定の法則のあることを述べると同時に、

今の世のなべての人のものいひさとび言にも詞のつかひざまてにをはなどおのづから其定りありてひとつもたがふことなく

と云つたのは、口語にも規則のあることを認めたもので、もし中古語を雅言とし、口語をその墮落したものと考へる國學者通有の偏見が無かつたならば、西洋に於けるサンスクリット發見の如き驚異すべき事實が無くとも、聰明なる研究者には、歴史的研究に對する關鍵は既に與へられてゐたかも知れなかつたのである。

新時代の國語研究の一特色は、言語の時代をみとめ、歴史的に言語を研究せむとすることに在る。規範的の文法と歴史的の文法とはおのづからその説き方がちがふ。規範的の文法は、たとへば助詞の「と」や「とも」が動詞・助動詞等を受ける時に終止形をもつてするのを通則とし、連體形をもつてするのは誤であるが、許容せられるものと云ふ。然し連體形で受けるといふことも、歴史的に見れば例外ではなくて、一定の時代に於ける言語變化の通則の一顯現にすぎない。實用的の言語學習の場合には、忠實に文字のまゝを信じて記載せられてゐるものを言語そのものと思ふが、歴史的研究によれば、文字はその時代の記載の習慣を示すもので、文字よりもその背後の語られ且きかれる言語こそ眞の言語だと知る。この見方よりすれば、「たるなり」「ざるなり」を「たなり」「ざなり」としてゐるのは、むしろ音便

化した撥音の記載法の發達してゐなかつた爲に過ぎないことを知る。奈良朝の已然形の用法を知れば、「こそ」に呼應する已然形の係結の由來も分るであらう。「ちらふ」「かたらふ」を「散る」「語る」の伸びたものと説明しようとしたのは、平安朝の言語形式を國語の準據すべき形式と考へたからである。奈良朝の言語と平安朝の言語との歴史的變遷を知つてゐたならば、それが前の時代に活動して今は亡びた文法的範疇たることを認識するに困難はなかつたらう。

わが國語の語法的範疇の起源を知り、その今日までの變遷沿革を跡付けることが、わが文法史の目的である。然し一個の國語をそのもつとも古い形まで究めて、尙その由來の明かならぬものも屢〻ある。英語の breath と breathe と、一は無聲によまれ一は有聲によまれるわけは、古代英語まで遡れば分るが、doom といふ名詞とそれと同語源の動詞 deem との關係は、古代英語に於て既に一は dōm であり、一は dēman であるから、英語だけの歴史では、その差異の起る理由が分らない。そこで同系語との比較によつて、いはゆる母音變化（vowel-mutation）であることを知るのであるが、わが國語では同系語との比較研究はとざされてゐて、僅かにわが特殊の方言ともいはるべき琉球語の研究に多少の助を借り得るだけである。

國語の時代區分は口語資料に乏しいから、あまり明瞭に定めることが困難である。大體に於ては政治史の時代區分を假りに採つて、奈良朝時代(註三)、平安朝時代、院政鎌倉時代、室町時代及び江戸時代の五期を立て、また之を大きく分けて古代語と近代語とし、室町時代の末を以て境界とする。この時代區分の上に文法の變遷を見て行かうとするのであるが、各時代の言語は之を文獻の上に求めなければならない。然し文獻にある言語は、そのまゝ當時の口語ではない。言文の比較的一致してゐた平安朝以前はとにかく、院政鎌倉時代以後文語が固定してからの言語はもつとも捕捉

するに困難である。それ故に、今日の口語と古代語とを比較して、その變遷のあとを各時代の文獻の上に探つてゆくのである。その爲には各地の方言は、言語の古形を保存する點に於て參考になる。室町時代中期以後比較的豐富なる口語資料が得られる。同時にこの時代は口語の變遷期である。この時代の言語に古代語の亡びんとする迹をきはめ、近代語の發達を考へることは大いに便宜がある。

註 （一）舊約創世記第一章五

（二）嘉祥中觀論疏一（大正大藏經二卷一四）龍樹大智度論卷一〇（大正大藏經二五卷一、三五）

（三）義門、玉緒繰分波ノ卷卅二ゥ

（四）わが國語史上の最古の時代の總稱。奈良朝以前の言語は、唯紀記に在る遺物に由つて窺はれるだけである。それも所傳の如く、古いものとは信ぜられぬ。それ故に紀記萬葉の出來た奈良朝の名をとつて、こゝに奈良朝時代と云ふ。

引用資料の主なるものは左の如くである。（本文中引用の場合は書名は多少省略に從ふ）

奈良朝時代 記紀、萬葉、佛足石歌、續紀宣命、延喜式祝詞等。**平安朝時代** 物語草子歌集類、新撰字鏡、和名類聚抄、神樂歌、催馬樂歌等。**院政鎌倉時代** 今昔物語、大鏡、讃岐典侍日記、類聚名義抄、童蒙頌韻、伊呂波字類抄、梁塵秘抄、香要抄、和歌初學抄、寶物集、山家集、顯昭古今集註、千五百番歌合、後鳥羽院御百首、建暦御記、宇治拾遺物語、平家物語、保元、平治物語、字鏡集、古今著聞集、親鸞消息、吾妻鏡、閑目抄、中務内侍日記、沙石集、夫木和歌抄、假字論語、增鏡等。**室町時代** 平他字類抄、義經記、今川大双紙、謠曲、錦繡段抄、勅脩百丈清規抄、史記抄、古文眞寶之抄、蒙求抄、四河入海、萬藤集、湯山千句、三體詩法、三體詩絶句抄、中華若木詩抄、碧巖鈔、莊子鈔、閑吟集、狂言小唄、

上杉家文書、天草本平家物語、文祿舊譯伊曾保物語、狂言記等。江戸時代　おあん物語、醒睡笑、雜兵物語、武道達者、萬歳丸、日本月蓋長者、兵根元曾我、京ひながた、一心女雷師、成田山分身不動、傾城角田川、傾城曉の鐘、東海道中膝栗毛、浮世風呂、浮世床、花暦八笑人等。（附記　引用文の假字遣濁點等、表記法一切は原文のまゝである。）

第一章　名　詞

國語に於ける名詞の著しい特色は、語形變化を有たぬことである。印歐諸國語では、たとへば英語やドイツ語が男性・女性・中性を區別し、佛蘭語が男性・女性を區別するやうに、いづれも性の區別を文法上の範疇としてゐるが、わが國語では、男女父母といふやうに、特別の語彙を用ひるか、「をとこ親」「をんな親」のやうに、熟語の形をもつてしたり、「をいぬ」「めいぬ」「をんどり」「めんどり」のやうに、接頭語をつけて自然の性をあらはす方法はあるが、文法上の性の區別とはいはれない。數も「くに〴〵」「しな〴〵」など疊語を以てあらはしたり、「もろ人」「叔父たち」の如く、接頭語・接尾語を用ふる方法があるが、名詞そのものに形態上の變化はない。これらの場合、唯、熟語もしくは接頭語・接尾語等、語詞構成の問題にすぎない。又印歐語では格に應じて名詞語形の變化があるが、わが國語では、格を示すことは、名詞に從屬してあらはれる助詞の問題である。

それ故に國語に於ける名詞の歷史は、語形發達の歷史ではなく、單に語彙發達の歷史にすぎない。

第二章　代　名　詞

今日の國語のみを考へれば、わが人代名詞は、名詞から轉用したものか、指示代名詞から轉用したものだけであるが、奈良朝時代には、次の如きものがある。

自稱　あ　あれ　わ　われ。　對稱　な　なれ。

不定稱　た　たれ。

このうち、「あ」「わ」「な」「た」等は古い形で、(一)直接熟語を形作り、(二)種々の助詞と共に用ひられる。

(一)あご(吾兒)　あせ(吾兄)　あき(吾君)　あづま(吾妻)　なね(汝姉)　なおと(汝弟)

(二)あがせ　あがもふ妹　わが宿　わをしぬぶらし　わはそと思はじ

なが鳴く里　なを待つと　たが家　たが身とて　たにかも寄らむ

この形は、後には連體として、

わが國　なが命　たが袖

等に跡を留めて、接尾語の「れ」を附けた形、

われ　なれ　あれ　たれ

等に、その位地を讓つた。「あ」「な」「た」等の古形は、萬葉集東歌に、「ぬれてわきなは汝はこふばぞも」とあるを除いて、助詞を使はずに單獨に用ふることがなかつたのに、新しい形は單獨に用ひて、

われ醉ひにけり(記)　なれなりけめや(紀)

あめつちのかみを祈ひつゝあれ待たむ(萬一五)　み立たしせりし石をたれをみき(萬五)

等とも用ひてゐる。「れ」は「ら」と同じもので、恐らく何ら一定の意味を持つてゐなかつたものと思はれる。

　これらの代名詞は、前の時代から傳つて來て、紀記萬葉等わが最古の文獻に用ひられてゐた代名詞と思はれるが、中古以後今日に至るまでの代名詞の變遷の迹を眺めると、この種の代名詞は次第に用ひられなくなつて、種々の待遇の意味をもつ名詞や他の指示代名詞から轉用した代名詞が、そのかはりとなり、それが又出來たり亡びたり幾變遷を經て後世に及んでゐる。これはすべて尊敬・謙遜等、待遇の言ひあらはし方を要求した結果で、たとへば今日の「君」とか「僕」とかが、待遇の意味から用ひられたことは云ふまでもなく、「あなた」「そなた」等の如きも、直接、人をさすことを遠慮したもので、やはり待遇の意味を持つてゐるものである。

　奈良朝時代にすでに固有の人代名詞と並んで、この種の代名詞が現れてゐる。自稱の「まろ」、對稱の「まし」「みまし」「いまし」等が、それである。「まろ」は古事記に、

　白檮の生に横臼を作り、横臼に釀みし大御酒甘らにきこしもち飮せ麻呂が父

と云つて、「私の父」といふところに、「まろが父」と用ひてゐる。この形は平安朝に入つても、

　旅人の子の童なるひそかにいふ、まろ此の歌のかへしせん（土佐）
　夜べはまゐらで今朝まゐらん、げにまろが知りたる事と思さめ（落窪）
　まろはいとほしき事ぞあるや（源）

など見える。對稱の「まし」「いまし」「みまし」は、

　此の川に朝菜あらふ兒ましも吾も（萬十四）　　いましもわれもことなるべしや（同）

いましたたいみ母にたがひぬ（同）　　　みまし親王の齡の弱きに荷重きは堪へじかと念ほしまして（續記宣命）

など見える。「まし」「いまし」は、「居る」の尊敬動詞「ます」「います」から來たもの、「みまし」は「みいまし」で、「まし」のみは中古までも往々用ひられたやうである。

一所いり給ひてましはえ知らじ（宇津保）　　　ましがつれにみるらんうらやましさを（源少女）

平安朝に入りては、「あ」及び「あれ」は用ひられなくなり、「わ」が、「わが」といふ連體にのみ殘り、「われ」を普通の形とした。「われ」は今日、「われわれ」といふ複數の形にかへて普通に用ひられてゐる。同時に對稱「みまし」「いまし」等も用ひられなくなり、「きみ」又は「なむぢ」「きんぢ」を用ひるやうになつた。「なむぢ」は汝貴、「きむち」は君貴の約である。

汝がもちて侍るかぐや姫奉れ（竹取）　　　汝が父にとふいさめまほしうおぼしけんかし（源）

きむち此の手をつたへほどこすものならば（宇津保）

指示代名詞は古來變化なく、事物の指示代名詞は、

近稱　こ　これ。　　中稱　そ　それ。　　遠稱　か　かれ。

「こ」「そ」「か」「あ」は古く、「これ」「それ」「かれ」「あれ」が新しい。「こ」はもと單獨に、

こしよろし（紀）

とも用ひられたが、一般には「の」といふ助詞をつけて、「この」といふ形になり、

このみ酒（記）　　　この山のへに（萬五）

など用ひられ、又「ことし」「こよひ」など熟語としてつかふ。「これ」が今日も普通に近稱の指示代名詞として用ひられてゐるものである。

「そ」「それ」は、「こ」「これ」と同じ關係にあり、「そは」「その」「そが」といふ形を作る。「それ」が今日まで中稱の指示代名詞としてつかはれる。

「か」「かれ」はまた「そ」「それ」と同じ關係にあり、「あ」「あれ」は平安朝に出來たもので、「あれ」は今日も普通の遠稱の指示代名詞である。

場所方向の指示代名詞は、以上の事物の指示代名詞の名詞と熟語となつたもので、

ここ　そこ　かしこ　あすこ

こち　そち　あち　あなた　かなた

「こ」は「處」(こ)、ちは「道」(ち)であり、「なた」は「の方」の約つたものである。

不定稱の指示代名詞「いつ」は、「わ」「か」「そ」などと同じ過程で、「いづれ」を生じたものに違ひないが、しかし意義から云へば、「いつ」と「いづれ」とは違つた發達を成した。「いつ」は單獨にあらはれる時は常に時間にのみ關係して、

いつまゐりつるぞなどの給ふ(源)　旅ゆく人をいつとか待たむ(古)

など用ひるが、「いづれ」は代名詞である。但し「いづく」「いづこ」「いづち」「いづら」など熟語の形であらはれる場合には、他の場所の代名詞と同じく代名詞の性質をもつてゐる。

わが國では、この指示代名詞が、他稱の人代名詞として用ひられる。他稱の人代名詞はわが國では古くから發達さ

せてゐなかつた。今日に於ても、他稱に用ひるものは、本當に代名詞として感じてゐるかどうか疑問である。「この人」「あの人」「このかた」「あのかた」などを取つて見るに、この＝人、あの＝人であり、「人」に「この」「あの」などが附いてゐるのであつて、「この人」「あの人」などいふ單純な代名詞としてゐるとは云へない。代名詞といふ意識は甚だ弱いものである。これに尊敬の意味を寓する時にも、「この」「あの」の下に尊敬の接頭語を附けて「このお方」「あのお方」と云つて、「この」「あの」と「方」とを分けてゐる。外國語の影響を受けるやうになつてから、彼とか彼女とかを用ひるやうになつてゐるが、まだ雅馴なる國語として感ぜられてゐない。ちかごろ彼氏といふ新語の出來たのも、この足りないところを補ふものと云つてよからう。文章のうちにはやゝ地位を得んとしつゝあるかも知らぬが、少くとも日常の對話語に於ては勢力がない。昔に遡つても習慣は同じで、人のみを指す人代名詞は、不定稱の「たれ」だけで、そのほかは事物でも人でも、話題に上るものは、「これ」「それ」「かれ」「あれ」を以つて呼んだものである。それ故に往々文典に他稱の人代名詞として「かれ」「あれ」だけを擧げてゐるのは誤で、事物の指示代名詞と同じものを用ひ、事物の指示代名詞と同じく近稱があり、中稱があり、遠稱がある。

それはやう失せ侍りにしかば、これはその後あひ添ひてはべるわらはべなり（大鏡）

佛、これ生けらば來るやうにし給へ（落窪）　かれはたれぞ何人ぞといふ（源）

國語に於ては、事物・場所・方向等指示代名詞の單純なのに反して、人代名詞が各時代に異常なる發達をしてゐることは、待遇に支配せられた結果である。殊に使ひ慣れた語は次第に敬意が失せるから、それに代るものが出來てきて愈々その數を加へた。君は名詞として尊貴を意味し、中古には尊稱であつたが、今日ではむしろ同輩以下に用ひら

れる。「おまへ」も今は尊稱ではないが、江戸時代には尊稱である。「あなた」は江戸時代には、

是お姫様、あなたを知らしやりませぬか。御總領の萬左衛門様ぢや」(けいせい睦の鐘)

あなた方が待つてござらつしやる(東海道中膝栗毛)

の如く、他稱であつたものが「そなた」が尊稱でなくなると、それに代つて對稱の人代名詞になつてゐる。「貴様」も今は卑稱になつてゐるが、これももとは尊稱である。江戸時代にはたとへば、

貴様は一昨日お着きなされたげな云々……貴殿に賴みたい儀がござる(武道達者)

とあるのは、星合右衛門兵衛が同役八郎左衛門に云ふ言葉で、同じ人を貴殿といひ、同等の敬稱とわかる。宣長は遠鏡に、

貴様ノアダナ御心ヨリハ樸ガハルカニマシヂヤ、貴様ハ樸ハアダニハナイ業平ヲアダナト云ハシヤルガ

など用ひてゐる。文化頃にも、

きさまは何ともないやうぢや(膝栗毛)

といつてゐるのは、醫者が患者に對していつてゐるので、相當の敬意を含んでゐる。

かくして一の尊稱が用ひ慣れて尊敬の意味を弱くすると、之に代つて尊稱をあらはす語が必要になり、新に種々の代名詞を作り出してくる。殊に階級制度の甚だしかつた時代には待遇の厚薄によつて各種の代名詞ができる。それ故に各時代に夥しい人代名詞がある。室町時代の狂言記その他に一端を探れば、自稱に、

身　身ども　わが　わらは　こなた　こち　おれ　それがし　みづから　わが身　愚僧　愚老

など云ひ、對稱には、

おまへ　おぬし　そち　おのれめ　そこもと　こち　そなた　こなた　こなた衆　そこなひと　そこなもの　こゝなもの
わ御寮　なんぢ　おこと　われ　われめ　われさま　そなたさま　貴處　貴方　貴方たち　そちら　われたち　そなたども
おことがた　おのおの

など、他稱には、

あれ　これ　あれら　これら　それ　それら　あいつ　彼奴　あいつめ　あれめ　かいつめ　このひと　かのひと　このもの
あのひと　こなた　この方　そなた　その方　あなた　あの方

などいふ。かゝる代名詞を一々列擧することは無益である。それは極めて夥しいもので、且生滅常なきものと云へば足るであらう。それは或時代に生じたと思へば、すぐ次の時代には亡びてゐる。「そなた」から「あなた」に至る間の時の隔はそんなに長いものではない。

今日普通に用ひられてゐる人代名詞は、

一人稱　わたくし　手まへ　ぼく　吾人　わが輩
二人稱　あなた　きみ　おまへ　貴樣
三人稱　これ　それ　あれ　この人　この方　その人　その方　あの人　あの方
不定稱　だれ　どの人　どの方　どなた

等であらう。「わたくし」の中古文學に見えてゐるものは、公でない自分の上をいひ、常に「には」とか「にも」とかい

ひ、「私は」「私も」などとは使はない。

私にはいかでめでたしとおもひはべらざらん（枕）　私にも心のどかにまかで給へ（源）

これが代名詞として用ひられるやうになつたのは、室町時代以後のことであるが、この時といへども、文學上には用ひられず、唯古文書講義筆記等俗語を含んでゐるものにのみ限られてゐる。上杉家文書大館常興の書狀に、

爲上意御服織物被遣之候得其意可申下之由私迄被成御内書候間下進之候一段御面目至候（享祿二年二月五日長尾爲景宛）

とあり、抄物にも、次の如き例がある。

陳曰（中略）先ヅ私ヲ用ヒヲレヨソ（蒙求抄）　私カヲホヘタ、トチヘ行ク道ヂヤト云フ事マデヲボヘタゾ（同、五ノ十四オ）

長崎出版の葡人 Rodriguez の日本文典（Arte da lingoa de Japam, Nagasaqui, 1604）は慶長九年長崎で出版されたものであるが、「私」をあきらかに代名詞としてゐるから、恐らく室町末期には、もはや普通の自稱人代名詞として用ひてゐたものであらう。江戸時代には廣く「わたくし」を用ひ、それが轉化して「わたし」ともなり、「わし」ともなつてゐる。

青鬼立ちて先にとほる者をとらへんとすれば私は辨說なしおとほし候へ（醒睡笑）

とあり、宣長の「古今集遠鏡」には、次の如き例がある。

ワタシガ事ヲシンセツニ思召テ下サルヤラサウモナイヤラ　ワシガ下紐ガコノゴロ度々ヨウトケル

君・僕などが代名詞となつたのは、はじめは儒者などの間で、次第に武士の間に用ひられ、後に書生詞となつて今日青年間の普通の代名詞となつたのである。

指示代名詞が人代名詞に用ひられることは、國語の一の特徴である。對稱の「あなた」はその一例である。

ここ　こち　こなた……自稱
そこ　そち　そなた　あなた　そこもと……對稱
あそこ　そなた　あなた……他稱

これらは皆、場所・方向等の代名詞の轉用である。次は中古以後院政時代に至るこの種のものゝ用例で、「こち」「そち」「こなた」「そなた」等は室町以後できたものである。

こゝをばすてさせ給ひつるか、御供に參らむ(榮花)　そこにこそ多くつどへ給ふらめ、少しみばや(源、帚木)
そこをのみなむ、かゝるほどよりあけくれ見し(源、紅葉賀)　このこと、あそこと少將ともろ心に(宇津保)

「おまへ」は江戸時代には尊稱で、

はあお前は原田右近樣でござりますか(元祿歌舞伎、武道達者)

は家來が主人に向つて用ひ、

如來樣明日はお立ちなされまする。私もいよ〳〵お供を仕る筈でござりまする。それゆゑお前へ暇乞に參らうと存じましてござるに(元祿歌舞伎、日本月蓋長者)

は國主が先代の後室に對していつて居り、その他を見ても目下に對するものではなく、少くとも對等の關係に於て用ひてゐる。それが今日は次第に敬意を失つて同等以下に用ひるやうになつた。それ故今でも下流階級ではなほ親愛の意味を以て用ひてゐる。尊敬が親愛の意味になり、後に自分より目下のものに向つて用ひるやうになるのが、國語の

人代名詞の一般の變遷である。

第三章　數　詞

國語の固有の數詞は、「ひとつ」「ふたつ」「みつ」「よつ」「いつつ」「むつ」「なゝつ」「やつ」「こゝのつ」「とを、そ」「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「いそぢ」「むそぢ」「なゝそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」「もゝ、ほ」「ち」「よろづ」で、熟語としては「つ」を作はずに、「みそ」「いほ」「やほ」「ふたとせ」などとつかふ。

この數詞のうちに、倍加法によつて出來たものゝあることは、荻生徂徠が「南留別志」に、

ふたつは、ひとつの轉ぜるなり。むつはみつの轉ぜるなり。やつは、よつの轉ぜるなり云々

と云つたことに端を發して、早く注意を惹いたが、ガベレンツ(註一)は「いつ」と「とを」との間にも同じ關係のあることを說いてゐる。オストロネジア語族の言語に於て、サモア、マレイ等で lima マラガシーで dimi その他の方言で yima とも Sima ともなる五の意味の數詞が、「手」といふと同語であるやうに、數詞の構成が手と關係あることは往々例のあることであるから、わが數詞の倍加構成法を、兩手の指を同數づゝ並べることから來てゐると考へるのも、あながち牽强とは云はれまい。

「ひた」は「ひた」(直)で、「ふた」はその倍數、「はたち」は又これから出る。「ち」は「箇」で助數詞。「みつ」は充實の義で、「今一つ」といふことか。「よ」は「いよ」「いや」と同義、「や」は「よ」の倍數であるが、もとは澤山といふ意味・「よろづ」はまた之から出る。「づ」は「ち」と同じく助數詞、「ろ」は添加した成分である。それゆゑ孰れも多數といふ意

味に過ぎなかつたものが、一は八となり、一は萬といふ義となつたものである。「やそうぢ人」は八十氏人、「やほよろづの神」は八百萬をあてるが、たゞ多數の氏人、多數の神のことで、萬葉集の「鶴をやつかづけ」の如きもたゞ澤山の鶴のことである。それを八の意味につかふやうになつたのは、佛經に八もしくはその倍數を用ひる語の多かつたことから來たものであらう。「いつ」の「い」は接頭語で、「つ」は「手」と同語源、片手の指の總數。その母音變化が「とを」で、その間にも倍數關係があると見て誤なからう。「いほ」「いそ」「いか」などを見ると、「い」に五の意味があるやうであるが、これは熟語となつたとき、「いつ」の「つ」の省かれたものと見る方がよからう。itu-po, itu-so, itu-ka 等の連結を考へると、省略されたものと見て間違ひない。ほ(もとpo)と「も」とは音韻轉換、それを重ねて「もも」といふ。これも「ち」も、もとたゞ多數を漠然とあらはしたものである。

(註二)「なな」は白鳥博士の說によれば「並無」で兩手の同數の指を並ぶること能はざること、「ここの」は「屈無」で兩手の同數の指を屈折すること能はざるか、又は一手の五指を屈し終りて最早この上屈折すべき指なきかを意味すると云はれたが、屈無はよいとして「なな」の「な」に「並」の意味あるかどうか。「な」は「似る」と同語根の動詞に「なす」(「海月なす漂へる時」「眞玉なす吾が思ふ妹」など)のあることから考へると、「似無」ではなからうか。「なむ」「ならふ」はむしろ「似」から來たものであらう。

「はたち」「よそぢ」「よろづ」等の「ち」「ぢ」「づ」等は、「ひとつ」「ふたつ」等の「つ」と同じく助數詞で、凡てもとは一般の基數詞をあらはしたものである。

比叡の山をはたちばかりかさねたらんほどして(伊勢)

みそぢあまり二つのかたち(佛足石歌)

こものよそ枝なりびのものよそぢ(。。。)(源氏)　　な〻そぢ(。。。)のしほにも過ぎ(千載)

などその例であるが、後には「はたち」「みそぢ」「よそぢ」「やそぢ」「こゝのそぢ」等、みな意味が局限されて人の歳を數へる時にのみ用ひられるやうになり、今はその中の「はたち」だけが殘つてゐるばかりである。その外には「はつか」「みそか」といふやうなものが、日を數へる場合には殘つてゐる。

わが國固有の數詞は、十以上の數を數へる場合になると極めて煩しく、十一は「とをあまりひとつ」、または「とをまりひとつ」、二十一は「はたちあまりひとつ」又は「はたまりひとつ」といふやうに不便なものであつたから、漢語の數詞が移入されると共に、いつか淘汰されて後には使はれなくなつてしまつた。

「ひとつ」「ふたつ」の「つ」、「よろづ」の「づ」、「みそぢ」の「ぢ」等は皆助數詞であるから、これを除いた形が本來の數詞で古くはそのまゝ用ひて、

みたにふた(。。)わたらすあぢしきたかひこねの神ぞや(記)　　たかさしぬなな〻(。。)ゆくなとめども(記)

昔な〻(。。)の翁の寄りあひつ〻　　なな(。。)の寶なやらん方なくてこそおはしますめれ(宇津保)

など單獨につかふこと、「ふたとき」「みつき」「な〻とせ」など熟語のうちにつかふ場合と同じであつたのである。

奈良朝時代に助數詞として見えてゐるものは、物の箇數を示す「つ」と「ち」、人の數をあらはす「り」、日數を指す「か」のごときものであつた。

みそぢあまりふたつのかたち(佛足石歌)　　夫(セ)ななとふたりさ寢てくやしも(萬十四)

えみしな毗儺利(ヒクリ)もゝな人(紀)　　近くば今布都可(フツカ)だみ、遠くあらば奈奴可(ナヌカ)のうちは過ぎめやも(萬十七)

その後、助數詞が漢語でも固有の國語に由てでも、種々の種類を發達させてゐるのは、支那語の影響であると考へられぬでもない。

支那語では、助數詞は同音語の區別に役立つ意味から大いに發達してゐる。Hua は話でもあり、畫でもあるが、句を加へて一句話といへば話を意味し、張を加へて一張畫といへば畫を意味することが明瞭になる。國語では助數詞は缺くべからざるものでもないが、漢語が盛んに輸入された結果、支那語の習慣が自ら之に伴つて影響したものであらう。固有の數詞に比べると、漢語數詞は便利である。それ故に固有の數詞は忽ちに驅逐され、漢語數詞が之に代つて大小種々の數をあらはす爲に現にわれ〳〵の間に自由に使はれてゐる。

序數詞も固有のものが、「二つめ」「三つめ」など使はれることがあるが、漢語によるものが多數を占め、「番」とか、「號」とか「第」とかいふやうな助數詞によつて現される方が多い。

日本人の意識には、基數と序數とは嚴密に區別されず、基數を現す數詞を以て往々序數を示すに用ひることは、古今を通じて同じである。「ななの朝」といへば正月七日で序數詞であり、「なのたから」といへば、七種の寶のことで基數詞である。今日に於ても「昭和八年」といへば序數詞であり、「八年かゝる」といへば基數詞であるのと、趣をひとしうしてゐる。

註（一）Gabelentz, Ueber einen Eigentümlichkeit des Japanischen Zahlworts (Z. für Völkerpsychologie und Sprachwissenschaft 7 Bd)

（二）白鳥庫吉氏、日韓アイヌ三國語の數詞に就いて（史學雜誌明治四十一年）

第四章　動　詞

わが國の文法では、今日まで普通に動詞を活用から分けて、口語では四段・上一・下一・加變・左變の五種、文語では四段・上一・下一・上二・下二・加變・左變・奈變・良變の九種としてゐるが、活用といふことは、嚴密にいへば明瞭でない。

一　活用とその成立

そもそも悉曇の知識の上に出來た五十音圖は、いつかわが國の音韻を網羅した音韻排列圖と考へられ、その上に五音相通といふことを論ぜらるゝことが久しかつたが、賀茂眞淵が動詞を五十音圖にあてはめ、初體用令助の名の下にその變化と法の意味を考へるに至つて、用言に於ける活用研究の端緒を開いた。この示唆により、その後宣長が、五十音圖の各行に各種の動詞を檢討して、動詞の語形變化を正しく認識することを得て、そのいはゆる二十七會の分類を得たが、その子春庭に至つて、列により韻を同じくするものを一つにまとめることが出來た爲に、動詞を左の四種の活に分類し得るやうになつた。

（一）四段　（二）一段　（三）中二段　（四）下二段

この外に變格をあげた。この活用研究の由來するところは、五音相通即ち母音變化にあつたが爲に、この意味に於ける動詞の語形變化を觀察するには便利であつたが、四段を除いたほかの活用の動詞には、全く母音變化を持たないものがあるのみならず、この外に「る」「れ」といふ成分を持つてゐる。四段活用は純粹に語幹につく母音の變化である。二段活用變格は四段と同じく語幹につく母音の變化するものもあり、中には一音節語である爲に、語幹そのもの

の母音を變化して語基を作るものもあるが、要するに語基構成上母音變化を成し、且必要に應じて「る」「れ」を伴ふものである。然るに一段活用は何ら母音變化を持たず、唯語幹そのまゝ若しくは「る」「れ」を伴ふことにより語基を形作つてゐる。それ故に語形の變化を活用といふならば、一段活用に於ては「る」「れ」が活用で、「き」(着)「み」(見)「け」(蹴)等の語幹は與らない。之を一段活用と云ふのは、四段その他の母音變化と同一に見たからである。むしろわが活用組織は、

(一)語基構成用母音の變化

(二)接尾語「る」「れ」の添加

の二つの異なる原則の上に立つてゐるものと云ふべきである。純粹に第一の原則によるものは四段活用・良行變格活用、第二の原則によるものは上一・下一活用で、上二・下二・加變・左變・奈變はその混合である。

こゝに於て問題となるのは、この活用組織がいかにして發達したかと云ふことである。母音變化の方法と接尾語添加の方法とは、全く別種の原則であるが、どうしてこれが同一民族の間に出來たか、異なる民族の混和によつて二つの主義が併用せらるゝに至つたか、前者がまづ在つて後者がついで生じたか、後者がさきに在つて前者があとで生じたか、多くの學者は四段活用をわが國の動詞の原形と考へてゐる。すでに鹿持雅澄も(註一)「用言變格例」で、すべての用言は四段に活くのが常格で、その他の活用はみなこの四段活用の變格であるとし、それをすべて四段に活いたものゝ轉音として說明してゐる。ホフマンの日本文典も(註二)四段活用の動詞を動詞の基本とし、他の活用は四段活用に「有(アリ)」「得(エ)」「爲(シ)」などが複合したものと考へたらしい。金澤博士も(註三)「日本文法新論」に四段活用と奈行變格とを除き、その他は悉く

良行變格の「有(アリ)」及び之と同一語根で母音を變へた「得(ウ)」及び四段から轉じた「爲」の複合、良行變格は四段の一種、奈行變格は四段に「有」の複合して二段言に轉じようとする半途のもの、四段活用こそ動詞の原形であると云ふのである。

(註四)アストンは動詞を三種に分ち、第一種卽ち四段活用を原形とし、第三種卽ち一段活用は語根が單音節であるから之を第一種と同じく活用させると、連用形以外に語根の母音を失ふから〔r〕音を挾んで之を防いだもの、第二種卽ち二段活用に屬する「得」の如きも單音節の語根であるから、之と同じ方法で活用させたもので、第二類中〔e〕の語根のものは皆この「得」の複合である。〔i〕語根のものは、比較的少數で、往々第一類にも活用するから、明かに轉來のものであるが、然し語尾の uru が果して「得」か、單音節語根の何か他の動詞から來てゐるかは疑問であると論じてゐるが、根本たる四段活用は今日の四段の終止連體同形であるのとは違つて、奈變が「しぬ」「しぬる」「いぬ」「いぬる」となつてゐるやうに、-u, -uru の二つに分れてゐたらうと考へた。

(註五)チエムバレンはこの說をついで、琉球語の研究から四段の原形を奈變の如きものと考へた。四段活用と二段活用とは一は未然形が〔a〕に終り、他は然らざること、一は「る」を以て終る連體形をもち、他は然らざることに於て根本的に相違してゐるが、琉球語の動詞が唯一種で、すべてこの二條件を具備してゐることを見て、琉球語が日本語と分れざりし以前の共同祖語の俤を保存してゐると想像したから、日本語の原形は四段活用で、しかも終止形と連體形と形を異にしてゐる奈行變格の如きものであつたと考へたものであらう。琉球語の活用は唯一種で、日本語で四段活用である「とる」は、琉球語で終止形 tuyung、連體形 tuyuru の如き形を成してゐるのである。

母音變化の方法と接尾語添加の方法とは別種のものである。そこで一派の人は「る」「れ」の語尾をもつてゐる活用

を說明する爲に、「ある」とか「うる」とか既存の語が母音變化の活用に膠着して生じて來たとして、その發達を說明しようとし、一派の人はこの二種の方法を兼ね具へてゐるものを原形と考へて、兩者はこれから派生したと說明しようとするのである。語形の發達を今現にある語の膠着としてのみ考へることは、原始時代の言語の發達の說明には不自然なことがある。又國語の動詞の大部分を占めてゐる四段活用をさしおいて、これを僅かに殘つてゐる奈行變格の如きものから變化したと考へることも穩當ではないやうである。むしろ四段活用がまづ在つて、奈變はそれに何らか他の影響が加はつて生じた一種の變體の活用と見るべきではなからうか。こゝにまづ民族の混和といふことが考へられる。四段活用をもつて動詞の語形變化を形作る言語習慣を持つてゐる主要の日本民族に、他の接尾語の添加を以て活用としてゐた民族の言語が混化して、大體は前者に順應してしまつても、その言語習慣の何物かを與へて、前者に影響を及すことは有り得る事實である。もつとも早く生じたものは、四段活用に單に接尾語の添加を加味した奈變の如きものであつたが、それは普く存在してゐた四段活用の習慣の爲に、多くは出來てもそのまゝ消え去つてしまつた。しかし、その或ものは接尾語の添加を持つてゐたものゝ言語から類推その他の影響を蒙り、完全な四段の活用形式を破壞され、母音變化の方法を行ふとしても四段の如く四種の母音をそなへず、接尾語添加の活用としても純粹の「る、れ」活用でない今日の二段活用の如きものを生じて來たのである。それでは今日の一段活用そのものが、即ち四段活用を持つてゐた民族に影響を與へた民族のもつてゐた動詞の活用形式かと云ふにさうではない。同化された民族の言語は亡びて今日迹るすべはないが、何らか語幹に〔r〕音の語尾を持つてゐたものに違ひない。イギリス語がノーマン、コンクエストの厄に遭つて、尙アングロ・サクソン語を維持し、屈折等主なる文法形式はアングロ・サクソン系である

けれども、尙ノーマン、フレンチから受けた影響を殘してゐることも少くない。凡ての名詞の複數語形に〔s〕を用ふるやうになつたのはその例である。アングロ・サクソン本來のものとしては、むしろ mouse, mice, 等母音變化の形式がその固有のものである。琉球語に於ける活用形式は、琉球が古い時代に日本語から分れて遠く群島に孤立した言語團體であつた爲に、四段活用が最初の變化を受けたまゝの形式を傳へて、それをすべての動詞に擴張し、琉球語獨自の活用を發達させたものと見ることが出來る。

國語の動詞の原形は純粹に母音變化を原則とする四段活用と見る。助動詞はもと獨立の動詞であつたものが、形式語になつたものに違ひないが、たとへば未來の助動詞の「む」「む」「め」のほか、「行かまく」「行かまほし」等の如く、「ま」といふ形があり、否定の助動詞は、後には「ず」「ぬ」「ね」と活用するが、本來「ず」と「ぬ」「ね」とは別の系統のもので、古くはナ行にのみ活いたものが、ザ行に屬する否定の助動詞と別にあつたに違ひない。

にひたやまねにはこなな(萬十四)　　ぬすまくもしらに(紀、五)

然らば是は「な、に、ぬ、ね」と變化したのである。使役の助動詞も、後世下二段に活かせるが、平安朝の言語にも見える「吹かさぬ」「ならはす」等、四段に活いたのが古形で、奈良朝にも尊敬の助動詞として活動し、四段活用であつた。助動詞に殘つてゐる母音變化は必ずしも四段活用と變化の形式を同じくせず、その用法接續等もまた等しくはないが、四段活用はそれらの種々な母音變化に識能が聯想して次第に後に至つて、一定の規則を生じて來たものであらう。

四段活用からどうして二段活用の如きものが生じて來たか、その理由は明かには分らないが、接尾語添加の活用をもつてゐた言語の混和により別種の活用形式の使用を加へると共に、母音變化の形式に混亂を生じ、種々の變化が出

來たが、やがて類推によりその亂雜のうちに統一を生じ、上二・下二といふ種類にまとまつて行つたものであらう。その類推に洩れたものが左變・加變の如きものと思はれる。左變は「せ、し、す、する、すれ」と活き、もし「し」が「せ」となれば下二段となり、「せ」が「し」となれば上二段となる。加變は「こ、き、く、くる、くれ」と活き「こ」が「き」となれば直ちに上二段活用である。

二段活用が轉じて出來た一段活用を除いて、その他の活用に添加した「る」を取去つて見れば、四段活用と同じく〔u〕韻を持つて居り、たゞ已然形に於て「れ」を取除いた形が〔e〕韻でなくて〔u〕韻である點、四段活用と違ふが、恐らくこれももと〔e〕韻であつたもので、添加した「る」が「れ」となつてゐるのは、この形をこゝに殘してゐるものであらう。

上一段活用の或ものは、上二段活用から轉じたものである。日本紀卷七に、

熊襲梟帥有二女、兄日市乾鹿文乾此云賦

と見えて、乾を「ふ」と訓ませてあり、同書卷五に、

愛倭迹迹姬命仰見而悔之急居急居此云菟岐于

と見えて、「居」を「う」と訓ませて、いづれも上二段である。橋本進吉氏(註六)は上代に於ける特殊の假字遣から、乾にあてた假字を論じて、乾が上二段であつたことを論じ、我背兒爾吾戀居者吾屋戶之草左倍思浦乾來(萬十一)の浦乾來が、「うらぶれにけり」と訓むべきことを論じて居られる。靈寸春吾山之於爾立霞雖立雖居君之隨意(萬十)の如きは「たつとも、うとも」と訓んだものに違ひない。又、上一段の或ものは、四段から轉じた、「見る」「似る」の古語は「もる」「のる」である。

動　詞

人言のしげき間見ると會はずあらば終には子らが面忘れなむ（萬十一）

みもろは人の見る山、下邊には馬醉木花さき末邊には椿花さくうらぐはし山、泣く兒もる山（萬十三）

似 ノル ニタリ アエタリ（類聚名義抄）　此神形貌、自與二天稚彦一恰然相似（記下）　眼如八咫鏡、赫然似二赤酸醬一也（同）

「見る」「似る」は、この「もる」「のる」の轉じたもので、「もる」「のる」はいづれも四段活用に活いてゐたのである。

要するに、國語の動詞の原形は四段活用で、これが接尾語添加の方法を受入れ、「る」「れ」語尾を生じ、まづ出來たものが二段活用で、一段活用は二段活用もしくは四段活用の轉じたもの、奈變は四段活用が「るれ」語尾を生ずる最初の變格、左變・加變は二段活用の別格である。

註（一）おそらむ、かくらむといふべきをおそれむ、かくれむと云るは、第一位を第四位に轉じたる變格なるべきか」（用言變格例九）

「爲はさむ　しす　せと四段に活かすべき言なるに、將レ爲をさむと云ずしてせむとのみいへり。其はさむと云ては聞よからぬが故に第一位のさを第四位のせに轉じたる變格なるべし。（同、十七）

「居穂もとはすわむ　すゐ　すう　すゑ　うわむ　うゐ　うう　うゑと四段に活く言なるが、すわむ　うわむと云に聞よからぬが故に、わをゑに轉じてすゑむ　うゑむと云（同、十八）

（二）Hoffmann, Japanese Grammar. 217, 234, 240

（三）金澤庄三郎氏、日本文法新論　一四一—一五四

（四）Aston, Grammar of the Japanese Written Language, 2nd ed, (1877) D, 98—99.

（五）Chamberlain, Essay in aid of Grammar and Dictionary of the Luchuan Language, 1895, P 139－146.

（六）橋本進吉氏、上代に於ける波行上一段活用に就いて（「國語・國文」創刊號）

二　活用の變遷

春庭が動詞の語形を母音變化によつて分類したことに由つて、動詞の活用には四種の活のあることが分つた。同時に各語形が接續する助動詞・助詞も明かにされたが、四種の活がそれ〴〵母音變化の數を異にするに從つて、各語形の承ける助動詞・助詞も一定しない。それで各語形をそのあらはす法と接續する助動詞・助詞との關係から見て、同一職分のものは同一段に統一する時、六種の語形を區別することが出來る。春庭の活用研究を受ついだ義門は、かくして將然言・連用言・截斷言・連體言・已然言・希求言の六言を得た。今日の未然・連用・終止・連體・已然・命令の六段もしくは六形はたゞその名稱を多少變更しただけである。こゝに於て今日の活用研究の基礎は確定せられたのであつて、この語形の變化を目安として文獻にあらはれた種々の用言はそれ〴〵何活用に屬するものか判斷されてゐるのである。それ故に文獻にその例の乏しいものは、その何活用に屬するか分らぬものも少くない。たとへば、「たとふ」といふ動詞は、「たとへて」「たとへば」といふ例で、「たとふる」といふのは少いが、拾遺集に「みな人の命をつゆにたとふるはくさむらごとにおけばなりけり」、信明集に「ほどもなくやみぬるあめにたとふるはいかに悲しきなみだなるらん」とあるから、下二段であることは確かであるが、又「たとひ」と云ふ例も多數であるから、又四段にも活くものと思はれる。然し四段として活くその他の形が無いから、確かなことは分らない。義門も「何れの書にかありけん（そはいまわすれたれど）たとはばといへる事ありしやうにも覺ゆればなれど慥ならず」と云つてゐる。大日本國語辭典にも「たとふ」の條に、他動詞としてあげ、この語の活用に適當なる用例なけ

れど、たとひと名詞法にいへれば存し置くと斷つてゐる。

八衢が活用形を段によつて排列し　之に接續する助詞・助動詞を檢して、之によつて動詞の所屬を調べたときは、

さるは神代よりおのづからさだまりありて、今の世に至るまで、うつりかはることなく、いさゝかもたがひあやまるときは、其ことわからず、そのこゝろきこえがたきものにしあれば

と云つて、神代より不變のものとし、

かくて古への人はおのづからわきまへて用ひたがふることはなかりつるを、後の世となりてはやう〳〵みだれゆきつゝ誤ることいみおほくなりぬるを

と云つて、今の世の用法を訛つたものとしたが、義門が之を受けついで、あまねく用例を調査して見ると、必ずしも八衢の說の通りではないことが分つた。そこで「指出廼磯」に、「すべて古書を見るに、必八衢にのみ泥みてはあるべからずとは、我も既くよりおもひ居るは」といひ、「磯の洲崎」に「詞八ちまたに神代よりおのづから定ありて云々といへるなどは全くしかなりとは思はねど」と頻りに疑念に惱んだが、假字遣に定格あることと比較して、「詞の活用といふことも亦然也さはあらずや」と論じ、てにをはに於ける古今の相違を「玉緒繰分」に、「たゞこの例の多少の今古互に物に見えざるのみの事と思ふべきなり」と解釋したと同じ態度を以て臨み、遂に言語の變遷といふことには、おもひ至ることが出來なかつたのである。

今日に於ては、平安朝の文獻にある活用が、奈良朝の文獻に異なるものゝあることは、言語の歴史的變遷の結果であると分つて來た。奈良朝もわが國語史上の一時期であり、平安朝も一時期である。平安朝の言語は、奈良朝の言語

の變化として觀察して興味がある。平安朝の言語はまた鎌倉室町を經、江戸時代を前期として今日の言語を成してゐる。われ〳〵は奈良朝に於て動詞にはいかなる活用が存在し、それがいかに變遷して、今日に至つてゐるかを觀察しなければならない。

八衢にあげた動詞を統計すると、

四段　九八〇　　その他　五〇四

になつて、わが國語總體のうち四段が優勢であるが、この傾向は奈良朝でも同樣であつて、且後世、下二段・上二段であるものが當時四段であつたものが少くない。

加行では、「放(サ)く」「著(ハ)く」など、「はく」は、

弦はくるわざな知るといはなくに(萬二)　牛にこそ鼻繩はくれ(萬一五)　梓弓へら取はけ(萬二)

のやうに、「はけ」「はくる」「はくれ」とも活き、「さく」は、

紐とき佐氣弖(サケテ)(萬二一)　紐とき佐久流(サクル)ときちかづきぬ(萬二〇)　親は佐久禮(サクレ)ど(萬十四)

のやうに、「さけ」「さくる」「さくれ」とも活くが、

つら波可(ハカ)めかも(萬十四)　見も左可(サカ)ずきぬ(萬三)

のやうに四段にも活いたのである。左行では「馳す」「寄す」など。

さどれしに駒な波佐世氐(ハサセテ)(萬十四)　豫嗣彌豫嗣(コシニコシ)より來れ(紀)　あぜそも今宵與斯(ヨシ)ろ來まさぬ(萬十四)

「馳す」は分らぬが、「寄す」は下二段にも、

風のむた與世くる波に（萬十四）　　かむさぶるあらつかさきに與須流浪（同十五）

はまなみはいやしく〳〵に高與須禮と（同二〇）

の如く活く。多行では「隔つ」が四段活用と見えるのは、

白雲の千重に邊多天留つくしの國は（萬五）　　天の川敝太而禮ばかも（同八）

とある。これも、

やすの川なかに敝太豆て（萬十八）

とあるのは下二段にも活いてゐたことを示す。麻行では「とゞむ」。

行く略な振等騰尾かれ（萬五）　　ときのさかりな等々尾かれ（同）　　よのことなれば等登尾かれつも（同）

下二段活なのは。

沖つ洲に船は等杼米む（萬十四）　　こゝだくに君が見せむとわれは等登牟流（同十八）

羅行はもつとも多い。「隱る」「恐る」「忘る」「垂る」「觸る」「離る」など、いづれも後世は下二段であるが、

青山に日が迦久良婆（記）　　みやま我俱利底（紀）　　かしこみうけたまはり憚理いますす（續四宣命）

いもは和素邏珥よのこと〴〵も（紀）　　白髮の上ゆ涙多利（萬二〇）　　こふこそはやすく肌布禮（記）

これらも、

つくば山可久禮ぬほどに（萬十四）　　船は等杼米むさよふけにけり（同）

と用ひ、前例妹は忘らじの同じ句が、古事記に妹は和須禮士とあるやうに下二段にも用ひてゐる。

之と反對に、後に四段のものが、奈良朝で下二であつたものとしては、

うじ多加禮(タカレ)とろゝきて(記)

と云つてある如き例もあるが、一般には奈良朝に四段であつたものが、當時下二段に活く例も生じ、平安朝以後、下二段專用に加はつたものが多い。それ故に平安朝にも、この種の四段に活いた古格は殘つて、

かつは人の耳におそり(古今集序)　海賊のおそりあり(土佐)　ちりのおそりはあらじとを知れ(後拾遺)

など見えてゐる。

その他の上二・下二・上一・奈變・良變・左變・加變等は、奈良朝も平安朝も異なるものがない。たゞ「蹴る」は中古語には下一段活用になつてゐるが、奈良朝には下二段に活いてこの活用がない。從つて奈良朝の動詞活用の種類は八種である。

蹴散此云倶穢(クヱ)簸邏邏箇須(紀)

これはワ行下二段活用であつたものである。それ故に、當麻蹶速はクヱハヤと訓まれてゐる。平安朝の初には、この動詞はヤ行下二段として見えてゐる。

蹴鞠世間云末利古由(コユ)(和名抄)　蹢蹋利古由(コユ)(新撰字鏡)

の如きは、その例である。類聚名義抄に、

蹢　クヱル

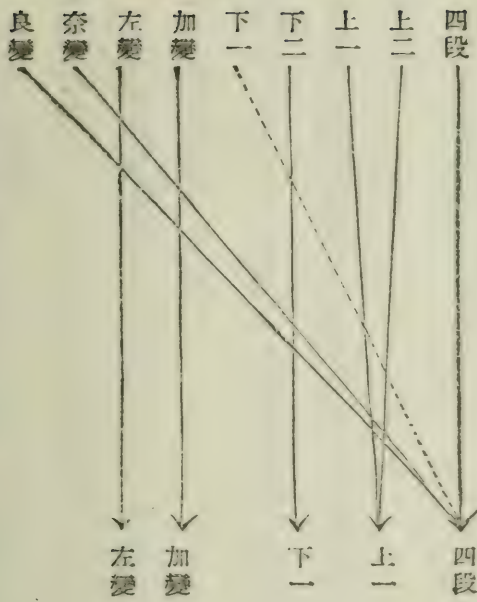
と見えてゐるのは、「ける」といふ下一段活用を生ずる前の形を示すもので、

かの典薬の助はけられけたりし病にてしにけり(落窪)　　　かうけたつるわがとのも中納言とおはしますなり(同)

只今の太政大臣の尻はけるとも(同)

などに於ては、「ける」といふ形を現して居り、動詞の活用は九種となつた。これが又今日の文語の動詞の九種の活用である。今日の口語の動詞の活用は、

四段　上一　下一　加變　左變

の五種であるから、中古の活用のこゝに至る變遷を表に示せば次の如くである。

この變化の根柢を成すものは、二段活用の一段活用に變つたことと、諸活用一般に連體・終止が同形になつたことである。

上二段活用が上一段活用にかはることは、特殊の動詞には古くからその例があつた。

八拳須至于心前啼伊佐知伎(イサチキ)也（記）　何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流(イサチル)（同）

唯大御神之命以問賜僕哭伊佐知(イサチ)流之事故白都良久（同）

とあるのは、「いさちる」といふ動詞で次の、

陸奥國荒備流(アラビル)蝦夷等乎（續紀宣命）

とて「荒びる」といふのがあり、また、

心惡子乃心荒比留(アラビル)波（祝詞）　井南加比流(ヰナカビル)（日本靈異記）

とも見える。その他「ひる」「ゐる」などが、同じく上二段から轉じて出來たことは前に述べた。

前節に述べたやうに、母音變化の活用原理と、「る、れ」添加の活用原理とは根柢に於て別種のものであるから、その相混ずるところに、二段活用の如き、加變・左變の如き、兩種混淆の活用形式を生じたもの丶、早晩兩極に引かれて、同種を統一して兩々相對立すべき運命のもとにあつた。即ち、四段活用類似のものは四段活用として統一され、「る、れ」活用を持つてゐるものは、母音變化をすて丶自己の原理に歸一すべきものであつた。それは畢竟複雜を避けて簡單を求め、亂雜を去つて統一につく類推の心理である。上一段活用が上二段活用から生じたことや、特殊の語彙には、上二段に活用すると共に、上一段活用化してゐるもの丶あることは、その變化の方向を早くから示してゐるものと云ふべきである。もと／＼二段活用の如きは早くあつた母音變化の原理に、「る、れ」活用の原理が加つた爲に、一時生じたもので、平安朝に於て既にあらはれてゐる上一段活用・下一段活用のあとを追うて、時を追うて一段化し

てゆく途上に在つたものである。後に下一段活用の「蹴る」が四段活用にかはつたことは、これは又別種の理由があるに違ひない。それ故に平安朝に於て既に二段活用・加變・左變の終止形は、しばしば連體形の如く、「る」といふ語尾を生じてゐる。卽ち一段活用の如く、終止「る」、連體「る」、已然「れ」といふ形式となつて、「る、れ」語尾を有するものは、大同團結せむとする傾向を示してゐるのである。

大方にさみだるゝとかおもふらむ　まくるとも見えぬものから（同）（和泉）
つゆ年ふるべくもあらず（同）　常よりも物あはれに覺ゆる（同）
つとめて（歌）などきこゆる（同）
まいておとがひほそく愛敬おくれたらむ人はあいなうかたきにして、御前にさへあしう啓する（枕）
火なけのにはたにあしださへもたげてもこのいふまゝにおしすりなどとするらめ（同）

これは一端を擧げたものだが、かゝる例が極めて多い。かゝるものを或ものは轉寫の誤として訂正してゐる本もあるが、それは言語を固定して動かぬものと考へることから來る偏見である。後世に至る變化は、徐々として起り、その起ることも遠いものであると考へるならば、これらのものゝ正僞も分つてくる。文部省の「現行普通文法改定案調査報告」に、助詞の「と」を承ける場合を擧げて、「搜ラバ其影シキハ推シテ知ルベシ」と云ひ、「ものなり、ことよナドノ省カレタルモノノミナリ」と解してあるが、むしろ一般に連體形と終止形との同形とならうとしてゐる現象の一方の顯現と見る方が正しい。

この現象は動詞・助動詞を通じて院政鎌倉時代以後一層著しくなる。今ロ語法別記にあげた例を借りると、

此狗ノ爲ニ被ニ咋殺一ナントスル（今昔）　　今ハ可レ殺ニ、此ク遂ニ將レ行ハ、何ト心モ不レ得思エル（今昔）

心ある人は、この世をば、さらに、うつゝともおもはざるとなん（寶物集）

さればちくしやうとは生をたくはふるとかく也（寶物集）　五百由旬のやまがらちは、ちいさきむしのためにくはるゝ（寶物集）

たとひわれをころさむとするとも（寶物集）　今日斬ル、、明日失ハル、ナト聞エンカトモ（平治）

たとひ都に出さるゝとも（平家）　掾頼光は其より歸りける（古今著聞集）

其氣ニテヤラン是ハイクチニヲツル（吾妻鏡）　馬ヲヒカヘテ物語スル（沙石集）

室町時代に於ては、終止と連體が完全に同一になつてしまつた。之と並んで母音變化の原理と、「る、れ」添加の原理とを對立に導くべき〔e〕〔u〕韻の〔e〕韻一個となり、〔i〕〔u〕韻の〔i〕韻一個となることも、平安朝から院政時代に亘つて次第に多くなつてゐたことは、各種の辭書の訓や歌學書によつて想像される。例をあげると、

和名類聚抄、毛群部獸體、蹄、字世流、以レ鼻動レ物也　　類聚名義抄　闥　トヂル　晴　クエル　添　カヘル　更　カヘル

童蒙頌韻　孰　ウセリ　　伊呂波字類抄　經　ヘル　添　カヘル　蹴　クエル　總　フサネル

和歌初學抄　糸　へる（綜）　　古今集序註　ヨミタカヘルコトモアルベシ

字鏡集　墮　オチル　老　ヲイル　添　カヘル　澀　ツエノタレル

など見え、かゝる語形の文學の上にあらはれないのは、口語に於ける變化であつたからであらう。鎌倉時代には、

など字書に同様の形の見えるほか、

いせ島や月のひかりのさびる浦は明石には似ぬ影ぞすみける（山家集）

老がよのふけるは月にながめせし人めもしらず涙落ちけり（萬代和歌）

歌は、秀句な思ひえたれど、本來いひかなへるがよきなり（無名抄）

ヒジリ還ラザリケルコソ。元輔ガ父ニハヲ・リテ覺ニレ（沙石集二）

など文學の上にも、口語の自ら影響したものが見えて來た。室町時代に至つてこの現象は、口語としてはよほど進んでゐたと想像される。狂言記には、次の例など見える。

湯をかける如く（粟田口）　　扇ぎ除ける如く（同）　　聲も枯れる（同）

締めるによつて（末ひろがり）　　数れるを以て（同）

出家を供につれる（惡坊）　　傘を呉れるぞ（同）　　衣を呉れるぞ（同）

よう切れる太刀で御ざる（武惡）　　涙をとめるぞ（同）　　斯うと云ふてくれるならば（同）

動詞だけについて見れば、二段に活く舊い形よりこの方が多い。江戸時代になつてからの書き改めもあるかと思はれるが必ずしもさうばかりも限らない。一方抄物を見ると、

実ハ龍ノ頸ヲマケル様也（錦繡段抄五ノ二五）　　ソノマヽ装ヲ衣ナガラ、日夜ニソトフセル也（中華若木抄下ノ三ウ）

一辟ナレトモ多クニ聞ニテ碎ケルヤウナソ（三體三ノ二十七ウ）

の如きは稀であつて、

腰間ニハ百備ヲヲビ背ニハ双刀ヲカクル也（中華若木抄上ノ五）　　マトロメバ夢ヲ見テ聊カヲボユルナレドモ（同）

敵ノカタヘ見ユルヤウニ旌旗ヲアゲテ（同上ノ四）　　百千ノ船ドモニ火ガツイテ燒クルホドニ（同）

春雨ノ中ニ綠ガノブルホドニミス〱柳モ枝葉ガノビテ(同上ノ一五)

のやうなものばかりであるのみならず、文祿年間飜譯の伊曾保物語や平家物語にも、一段化した形がほとんど見えないのは、まだ二段活用の形をもつてゐる方が品位あるものとなつてゐたからであらう。

天下ヲトラントノハカリコト運ラスル也(中華上ノ二)

のごとく、四段動詞の「めぐらす」を下二段活用の如く用ひたごときもの丶見えるのは、一段化せんとする動詞をつとめて二段活用の古い形で語らんとつとむる結果、四段動詞にまで應用した一種のフオールス、アナロジーであらう。

江戸時代にも、

藤左衞門は大勢めしつるゝ(元祿歌舞伎、兵根元曾我)　尋ぬる敵なければその屋敷も出る(同、京ひながた)

の如く、二段活用は相當にあるが、文政年間の「假字遣轉考」(井上信好)には、東言と京言とを對照し、

東言					京言				
東言	譌言	こえ(越)	用言	こえる(越)	京言	譌言	こえ(越)	用言	こゆる
同		もえ(萠)	同	もえる	同		もえ(萠)	同	もゆる
同		うゑ(飢植)	同	うゑる	同		うゑ(飢植)	同	こゆる
同		すゑ(居)	同	すゑる　(正	同		すゑ(居)	同	すゆる　(邪

とし、東言を正しい言ひ方とし、京言を正しくない言ひ方としてゐるのは、時代の變遷を示してゐるもので、同時にこれは一段化の東方で早かつたことが分るし、又關西方言では二段活用の形式がこの時代までも現に行はれてゐたことを示してゐるものである。

「室町時代の言語」の著者が抄物について調査された結果、上二段活用を上一段に用ひたのはキル一語、下二段を下一段に用ひたものは「無いではないが全體から見れば極めて少い」といつて擧げて居られるのは確かにさうに違ひないが、それは上に述べたやうな理由によるもので、俗語としては相當多くなつてゐたのでないかと疑はれる。抄物と比較して西洋人の語學書としてかゝれた文祿舊譯伊曾保や平家に少いのも、この間の消息を語るものではなからうか。又氏の報告では上二段の上一化が下二段の下一化よりも少いやうに聞えるが、之を今日の方言の分布と比較して見ると、實は反對のやうである。上二段の上一化した例のあまり見えてゐないのは、上二段の動詞の總數が少い爲に、用ひられた場合の少い結果ではなからうか。下二と上二の總語數はかりに八衢に擧げてある語數で比較すると、一は四〇二、他は六七の割合になつてゐる。用例の多い少いだけでは、下二の下一化が上二の上一化と比較して多かつたとはいはれないだらう。

東條操氏が、室町時代と江戸時代との言語變遷を、土地の上にそのまゝ移してゐるのが、本州の方言と九州の方言であると云つて居られるが、それは音韻・語法萬般の現象の上から見て、よく中つてゐるが、九州に於ては上二段活用を上一段として用ひてゐる地方は廣く、下二段を下一段として用ひてゐる地方は狹い。之は移して室町時代の兩者の關係を考ふるに參考となるだらうとおもふ。（國語調査委員會口語法分布圖參照）

内藤淸成（德川氏の臣）の「天正日記」は天正十八年の日記で、慶長の殘闕が少し添へられてゐるが、それには一段化したのが、

はれる　めしつれる　吳れる　たをれる　知れる　とめる　定める　やける　あげる　くづれる　ねける

の十一個で、晴れるの如きは六十八個あつて皆一段。尙二段の形を殘してゐるのは、

定む　付くる　いづる　なだむる　はじむる　わかる　よする

の七個、「出る」「上る」「付る」等かいたのは、何れだか分らぬもの。上二段活用の動詞の出てゐるものはただ一個で「おりる」といふ動詞だけ。これも上二段の動詞は數が少いから使はれることも少く、從つて上二の上一化と下二の下一化との先後は分らぬと感ぜしめる一つの例とも出來る。然し二段の一段化はこのごろは大分多くなつて居つたこと丈は明瞭らしく、狂言記が口語法別記に、

狂言記の事に就てわ、狂言わ、舞曲より古いもの（脇語をあどとふうなど）のようだけれども一旦中絶して豐臣氏の頃、再興したものらしいから、用語わ天正の頃のものであらう、因て其頃のものとした

と云つて、天正頃のものとすると狂言記の二段化の多いのと大體一致するものといへる。

「る、れ」添加の原理に對する母音變化の原理は、奈行變格を早く四段化しようとした。旣に鎌倉時代にも、

命ハ限アリ恩ニハ死ヌ習ナレハヤ（平家延慶本）

と見え、室町時代には、次のやうに見える。

始メト云フハ死ヌサキノコトゾ（蒙求抄六ノ一八ウ）

他のすべての活用に於ては連體形が終止形を同化してゐるのに、この活用のみその反對なのは、奈變が母音變化として極めて四段活用に類似してゐたから、四段活用に類推して母音變化の語類に統一されたものである。

今日に於ては、奈變を四段としてゐるのは、殆ど全國的で、たゞ中國・四國・九州等に聞く「ぬる」「ぬれ」の二つ

又は一つの形を殘してゐるのみである。

良行變格活用は終止形がイ列である點に於て四段活用とちがひ、中古以前には、

人さはに入り袁理(ヲリ)とも(記)　　女をば奥におし入れて、男やなぐひをおひて、と口にをり(伊勢)

かく戀すらば生けるしるしあり(萬一八)　　こゑのうちにも思ふ心あり(後撰)

のやうに用ひてゐたが、室町時代には四段に轉じて、

キツネノワキニ白毛カアル(蒙求抄、七、一六オ)

此僧兩人ノ云イヤウヲ學ニ似馬祖ニシタハ、些子ホトハ限カアル(碧巖抄八ノ七オ)

前代ノ者カ盜人テヲルナント云テ(百丈淸規兩序)　　上に猿奴があがつてをる(柿山伏)

この時代の博士家訓點を傳へてゐる六臣註文選に、

世居(シレリ)二東裔一　　諸賢處(レリ)レ之(ニ)

など、「居れり」とあるのは、「居る」が四段化してゐた爲に外ならない。

以上四段活用即ち母音變化の原理でゆくものと、一段即ち「る、れ」添加の原理によるものと、二つの大きな種類にわが動詞は統一されようとしてゐるのに外れて、尙一種の變格を殘してゐるのが、加變と左變とである。

加變は一般には、「こ、き、く、くる、くれ、こい」と活用してゐるが、方言によつては、

きよう(東京府、群馬、栃木、茨城、福島、山形、青森、山梨、長野、岐阜、香川、大分、宮崎諸縣の處々)

きろ(茨城の一部)　　きよ(奈良縣、宮崎縣)　　きい(大分縣、宮崎縣)

の如き形を用ふるところがあり、又「けえ」「けい」といふところもあり、動搖してゐることが分る。
左變に至つては殆ど四段化してゐるものもあり、上一段化してゐるものもあり、その左變に活くものも、中古時代のものとは大いに趣がちがふ。
四段もしくは上一段にかはつた左變動詞は一語の漢語に熟語となつたもの丶中に多數ある。

愛　譯　略　謝　議　辭　解　熱　服　復

などは殆ど全國一般に四段に用ひてゐる。又、

高　焙　通　封　案　感　談　判　煎　損

等は上一段に活用させるのが、關東方言では一般の慣習である。
固有の國語左變動詞、もしくは二字以上の漢語の左變動詞は、尙左變につかはれるが、これが關東方言では殆ど全く左行上二段活用に活かせてゐる。
これらの左變動詞の變化は、室町時代にはまだ少く、江戸時代以後生じたものである。

はあ開き分けました五百拔いて進じよ（狂言末廣がり）　ころもかへして棄せんじよ（守武千句）
さりとはじよさい〳〵、よく判じられた（鹿の卷筆）　永日の時を期さぬは存む禮者（寶暦、川柳）
ほとゝぎす二十六字は案じさせ（明和、川柳）　どこへでも通じる樣に（浮世床中）

かくの如くして、中古時代の動詞に見た九種の活用は、次第に變化して、今日は簡單なものになつた。

a　行く　Yuk -a -i -u -e　　死ぬ　shin -a -i -u -e

のやうな母音變化によるものと、

b　起きる　oki -ru -re　　明ける　ake -ru -re

のやうに、接辭「る」「れ」の添加によるものとの二つの大きな種類の外には、「來(ク)る」「爲(ス)る」の如き少數の不規則動詞のあることとなつた。かくして出來た活用の二大種類の間には、凡そ次の如き語法上の差異を生じた。

(一)一は未來の助動詞「む」が「う」になつたために、その未然形と結び付いてオ列長音の未來形と云ふべきものを生じ、四段活用が五段活用となつた。それ故に今日の口語では、四段活用は五段活用といふのが至當である。

例　書こう　讀もう　死のう

他は未然形に前記の「う」が結び付いた上に、特殊の語形變化を生じ、「よう」といふ未來形を作り出した。

例　起きよう　受けよう　見よう

(二)一は助動詞「まい」に附く時、終止連體形を用ひ、

例　書くまい　よむまい　死ぬまい

他は未然形をつかふ。

例　起きまい　受けまい　見まい

(三)一は連用形から「て」「た」に續くときに、左行のほかは不規則の形を生じてゐる。

例　かいて(た)　讀んで(た)　死んで(た)

他はかゝることがない。

例　起きて(た)　受けて(た)　見て(た)

(四)一は語尾と可能の「れる」とが約つて、下一段に活くが、他はかゝる習慣がない。

例　よめる　書ける

(五)一は受身の助動詞「れる」、使役の助動詞「せる」がつき、他は「られる」「させる」がつく。これは古代語に於て、「る」「す」と「らる」「さす」との對立に比べられるものである。

三　活用形の變遷

早く動詞の語形を五十音圖に配當して、谷川士清が未定・已定・告人・自言と稱け、眞淵が初體用令助と稱けた頃には活用形に於ける認識も猶不充分なものがあつたが、動詞の語尾變化に於ける法の意味の或程度まで認められたことは否むことが出來ない。

春庭の活用分類は、活用の種類を確定したものであつて、之によつて、各活用形や所屬の助詞助動詞も明かになつたが、各活用形の段による配列であつた爲、或ものは四段、或ものは三段、あるものは五段となり、從つてその各活用形の分擔する職能は活用の種類によつて區々として一定する所がなかつた。たとへば春庭は四段の活については、

第三の音くすつふむるは切る丶詞と體言へ續く詞とをかれたり。受くるてにをはも二つをもちひて、切る丶かたより受くるてにをはは、めりらんべきらしとともゝ、續く詞よりうくるてにをは、かなまじにをよりなどなり

といひ、中二段の活にては、

第三の音くつふむゆるうは四段の活の第三の音の切る丶詞のかたにて、受くるてにをはもその切る丶かたのめりらんべきらしとともなどを用ふるなり。又此音にるもじをそへたるは四段の活の第三の音の體言へつゞく詞のかたにて、うくるてにをは

もそのかたを用ひてかなまでにをよりなど也

と云つて、四段では一個の形で兼ぬるものを、二段では別々の二個の形で言ひあらはしてゐるのである。それ故、二段を標準とし「く」「つ」「ふ」「む」「ゆ」「る」「う」と、之に「る」をつける「くる」「つる」「ふる」「むる」「ゆる」「うる」とを、それぞれ切る〻詞と續くる詞とし、之に四段の活を並べるならば、四段の同一の形は二回繰返される。かくの如き手續を以て凡ての種類の活用に亘り、活用形にそのあらはす職能を結びつけて同一の職能を有するものは、之を横に統一する時は、もつとも多くの活用形を有する奈行變格活用の有する活用形の數だけ一切の動詞の活用形が出來る。これが今日數へられてゐる未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形の六種の活用形である。王朝以前の動詞の活用を、その語形變化をもととしてその職能を分類するならば、この六種を以て動詞活用形のあらはす職能を分類することが出來る。

今日の口語のみについて活用形を擧げるならば、前節のべた活用の變遷の結果、終止形と連體形と同形となつて左の五個の活用形となる。

否定形　　連用形　　終止連體形　　假定形　　命令形

この古今の活用形を比較する時、又その間に職能の變遷がある。之を述べることが本節の目的である。

一　未然形　この形は、「ば」をつけてまだ成立たない條件を假定する語形であるから、未然形と稱けられてゐるものであるが、今日の口語ではさる言ひ方はない。假定條件をあらはす能力は、全く他の活用形に移つてしまつてゐるから、口語ではこの形は「ない」を附けて否定を現す用法から否定形と稱けられてゐる。中古語の例。

なき名といはゞ罪もこそうれ(後撰)　　上にとりきばしるからむといふ(源、紅葉賀)

かゝる用法は、近代語になると漸くすたれて、「降らば」は「降るならば」、「行かば」は「行くならば」と云ひ、つひに「ば」を省いて「降るなら」「行くなら」と云ふ形になり、直接動詞そのものゝ未然形は使はなくなつた。室町時代に於て既にこの近代語の形が、やがて古代語に於ける未然形の代りとならうとする勢を示してゐる。

一ツキリホドクナラバ錦繡ニハナルマイゾ(蒙求抄四ノ四)

此昭君若シ傾國ノ姿アルナラバ盡ク胡沙ヲ卷テ漢家ニ入ヨ也(錦繡段抄二ノ三二)

此華ヲ佳人ノ頂ニサシハサムナラバ、翠雲鬟ヲ燒クガ如クナラン(同五ノ十六オ)

云ふならば殿上までも切り上りさうなものゝ面魂であつたによつて(天草本平家)

この事しおほせてあるならば、國をも庄をも所望にまかせうず(同)

さしまへがあるならば彼奴を爲留めたうござるが(狂言拔殼)

ロードリゲースも形容詞についてであるが、「なくば」を「ないならば」と並べ、「なかつたらば」を「なかつたならば」と並べて、同じ意味を示すものと敎へてゐる。「ならば」を省いた「なら」は、

女房にもつたら此方がをとなしやかだ(浮世床中)　　安くては嫌だ。高くやるなら乘りやせう(膝栗毛四ノ下)

のごときもので江戸時代になつて出來た形で、この形が今日に於ては未然形の本來の職能を傳へてゐる唯一のものになつてゐる。

二　連用形　用言に連つて熟語の用言を形作る形。

剝ぎとる　見にくし

この形はまた單獨でも熟語としても名詞として用ひられる。

襷(たすき)　扇(あふぎ)　袷(あはせ)　賄(まかなひ)　書置(かきおき)　勝負(かちまけ)　早起(はやおき)　炭取(すみとり)

これらの用法は古今を通じてかはらないが、中止法の用法は今日殆ど廢れた。

(一)あたらものに言ひおもふ(落窪)　　いと心なき様にこそ思ひいはめ(和泉式部日記)

(二)細櫃の蓋に入れ、紙などにけしきばかり包みて(枕)

の如き中古語の場合は、今日の口語では使はれなくなつてゐる。(二)の如き他の語を隔てる場合は、記錄體の口語には尙使はれるが、口頭語にはあまり使はれない。

これらの中止法のかはりには、助動詞「つ」の連用形の「て」の助詞のやうになつたのを用ひて、

頭陀袋をゲット首にかけて、如意とかいふ物を手にもつて出た所は能いが(浮世床、初ノ下)

といつたり、

ばく〳〵した婆もあればひい〳〵たもれの新造子もあらあな(浮世床、初ノ下)

といつて、已然形に「ば」を附けたものを用ひたり、

大雪は降るし鯉はさつぱり氷に閉ぢられて(浮世床、初ノ下)

と云つて、終止連體形に「し」をつけたり、或は室町時代既にその例があるものだが、「たり」といふ助動詞の時の意味を失つたものを用ひて、

此三體ノ增註ノ序書タリ又增註スル外ハ未聞名聞名著者也(三體絕句抄一ノ九オ)

の如くいふのが、近代語に於ける一般の習慣である。

三　終止形と連體形　終止形は文を終止する形であり、連體形は體言に接續する形であるが、前節に述べたやうに、近代語ではその形が同一になつたから、同じ形が終止と連體とを兼ねあらはすやうになつた。今日の口語では、もと連體形であつた「おつる」の變化である「おちる」が終止にも連體にも使はれてゐる。「死ぬ」「死ぬる」のかはりに、「死ぬ」を用ひるのは、連體形が近代語に於て亡びた唯一の場合である。

連體形は體言に接續するものであるが、又次の如き場合は體言に準じて用ひられたものである。

もろ〳〵の遊ぶを見れば(萬五)　　春雨のふるは淚か櫻花ちるを惜しまぬ人しなければ(古今春下)

この用法は、今日は用ひられなくなり、「の」といふ助詞を添へてあらはしてゐる。これは近代語の特徴で、室町時代の狂言には、

いやお山伏、起すのは別の事ではおぢやらぬ(狂言苞山伏)

のごときものも見えるが、一般には、

春ノ來ルハヨイガ、老ノ來ルハイヤヂヤッ(中華若木抄中ノ二二ウ)　　石弓ヲモッテイクヲ見テ(莊子抄一ノ八四オ)

の如く、古代語のまゝであるから、狂言の形式は新しいものであらう。

終止形はまた古代語では、「と」「とも」を添へて、まだ成立たない條件を假定するに用ひる。未然形に「ば」を添へた假定とは、順說と逆說とのちがひである。

院政鎌倉時代以後、連體形が終止形にかはるやうになると共に、「とも」は連體形につくやうになつた。連體形を終止に用ふるのは、既に中古時代にも屢々例のあることは前に述べた通りで、從つて「とも」が連體形につくことも當時から例がある。

びんなき事侍るとも、ちぎりきこえしことはすて給はで(枕)

石切り通し侍るとも、おとゞもあるまじき事と思ひ知りたれば(狹衣)

院政鎌倉時代以後はこの現象が極めて多く、文部省の「文法許容事項」に許容事項の一として擧げられたのも、その爲である。

骨肉の命は盡くるとも(日蓮御書諸願成就鈔)　勳功に申し替ふるとも、自ら退くとも(神皇正統紀)

懸命の合戰するとも、又籠て戰ふとも(鎌倉大草紙)

この形のかはりに鎌倉時代以後「も」を用ひるやうになり、室町時代には「ても」を用ふるやうになつたことは助詞の項に讓る。

四　已然形　この形は「ば」「ど」「ども」を附けて、

(一)已に成立つた條件(ば、ど、ども、のつくとき)

(二)條件の已に成立つたものと假定する(ば、がつくとき)

につかひ、又「こそ」に應じて文の終止を成すものとされてゐるが、上古に於ては既定の事實を現はすに、「ば」を附けないことが少くない。

さ百合ばなゆりも逢はむとおもへこそ(萬一八)　佛の(中略)さきはへたまふものにありとおもへおろがみ奉る(續紀宣命)

又「ば」がつかないで、他の助詞の附いてゐることがある。

飛鳥川七瀬の淀にすむ鳥も心あれこそ波立てざらめ(萬七)　天地の神はなかれやうつくしき吾が妻さかる(萬一九)

わぎもこがいかにおもへかぬば玉の一夜もおちずいめにし見ゆる(萬一五)

又「こそ」の係結に關係なく、已然形はあらはれてゐる。次の如き場合は、後のものならば皆終止形が普通あらはれなければならぬ。

言はれぬものにあれや(續紀宣命)　越の海の信濃の濱を行き暮し長き春日も忘れて思へや(萬一七)

海原の根やはら小菅數多あれば君は忘らす我忘るれや(萬一四)

又「こそ」以外の係に對する結びとしてもあらはれてゐる。

たまかづら花のみ咲きてならざるは誰が戀ならめあは戀ひ思ふを(萬二)

見えずとも誰戀ひざらめ山の端にいさよふ月をよそに見てしが(萬三)

かなし妹をいづち行かめと山菅のそがひに寢しく今し悔しも(萬一四)

君を見むとぞ左手の弓とる方の眉根かきつれ(萬一一)

視渡せば近き里廻をたもとほり今ぞ吾來れひれふりし野に(萬七)

助動詞の例が多いが、いづれも已然形を用ひてゐる事は同じである。抑々已然形が既定の事實を表すことと、「こそ」の結びに用ふるのとは、今日關係がないやうに見えるが、もとはその起源を一にしてゐると思はれるふしがある。

已然形は既定の事實をあらはし、單獨に、

さきはひ給ふものにありとおもへ

と云ふやうに云つたが、ついで强めの助詞又は疑問の助詞に由て助けられる場合を生じ、一方にこの種のものゝうち、「こそ」と共に用ひられるものゝみ殘り、又一方に於ては「ば」「ども」の附いた形のみが殘つたものであらう。從つて、中古時代にもその以後にも、逆說の條件を現すときには、

あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人もまちけり(古今春下)

かたちこそみ山かくれの朽木なれ心は花になさばなりなむ(古今雜上)

の如く、「こそ」のある時には、「ども」を省くことがあり又順說の條件をあらはす時に、

時しもあれ　秋やは人のわかるべき　あるを見るだに戀しきものを(古今雜上)

の如く、「こそ」がなくして已然形があらはれる習慣もまゝあるのである。故に已然形の本義は成立つた事實、確定した事實をあらはし、

四日風ふけば、えいでたゝず(土佐)　ふくからに秋の草木のしをるればうべ山風をあらしといふらん(古、秋下)

次に未然形がまだ成立たない條件を假定するのに代つて、同じことを成立つたものとして假定する云ひ方を生じた。

春立てば花とや見らむ白雪のかゝれる枝にうぐひすの鳴く(古今春上)

月見れば千々に物こそ悲しけれわが身一つの秋にはあらねど(秋上)

又或事柄が實現すると、他の事柄がついで起ることを示すことにも用ひるやうにもなつた。

これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける（土佐）

歸り入りて探り給へば、女君はさながら臥して右近はかたはらにうつふし臥したり（源）

已然形はこの意味に於て、最も多く比較的後までつかはれてゐる。

漁人ガ尋ネ來レバ、洞中ノ人避ケテ秦亂ィタト云ゾ今ハ晉也ト漁人ガ云ヘバ驚也（錦繍段抄五ノ二七）

諸鳥は却て嘲れば燕のいふは（文祿舊譯伊曾保）　季貞參つてかの由申せば（天草本平家）

ロードリゲーズの日本語典に、

あぐれば　あぐるに　あぐるところに

を並べ、

あぐれば　あげたれば　あげたに　あげたところに

を並べてゐるのも、室町末期から江戸初期に於ける用法を示してゐるのである。

已然形に「ば」をつけて、已に成立つた條件を云ひあらはすものは、室町時代に於ても、助詞「たり」を伴ふものには豐富にあらはれるが、そのほかは「なれば」「あれば」「ござれば」等を外にしてその他には殆どなくなつた。

一度ヌケタレバ叶フマジトテ死シタルハヲカシキ事ゾ（錦繍段抄二ノ一四ウ）

と云はれたれば、信俊涙を抑へて申すは、幼少より御憐みを蒙つて片時も離れ奉らなんだれば、お下りの時も何卒して御供な仕らうずることでござつたれども、平家より許されなんだれば（天草平家）

かういふ形に於てのみ著しく目につく。しかもこれもしばしば、

以ての外痛まされたによつて(天草平家)　硯も筆もござらないによつて(同)　六波羅の總門のうちにあつたによつて(同)

の如き形によつて、いひかへられてゐる場合が相當に多い。

軍は勝負のことなれば(文祿舊譯伊曾保)　心にまかせぬ海路なれば、浪風を凌いでいく程に(天草平家)

昔を忘れぬ花であれば、少將花のもとに立寄つて(同)　外には五常を亂らず禮儀を正しうする人であれば(同)

もはや思召し切つたと見えてござれば(同)　既にかゝる身に罷成つてござれば憚り存ずる(同)

かくの如くして今日は既定の條件を示す已然形の本義たりしものは失はれて、もつぱら假定の言ひ方になつてしまひ、全く未然形のもつてゐた意味を奪ひ、(一)まだ成立たない條件を假定する場合か、(二)條件の已に成立つたものと假定する場合につかふ。それ故に、この形は今日の口語からいへば假定形と稱けるべきものである。唯「こそ」に結び付く場合に限つて、在來の意味が殘つてゐる。

學校に行けばこそ、本もよめるのだ。

已に成立つた條件をいふ場合、

人のいへば我もしか思ふなり

といふ如き言ひ方には、

人がいふから自分もさう思ふのだ

など、別の言ひ方をして已然形はつかはない。

室町時代、「程に」とか、「間」とかいつてゐるのは、同じ傾向のあらはれてゐるものである。「されば」を「さあるは

どに」と云つてゐるのも、已然形を用ひる習慣の衰へた結果である。

舟ヲナラベテヲイテ、其上ヲ渡ルト云フガ、毛詩ニモアルホドニ、昔モアルホドニ、ナセニナラナイデハト云テ、一人ソ云破テ
官カラ擧狀ヲ付タリナントスルホドニ（百丈淸規抄、兩序章）

橋ヲカケタソ（蒙求抄四ノ一四）

總シテ橋ヲバ虹ニ比スルホドニ垂虹ト名ヅクル乎（中華若木抄下ノ四）

人々未明ヨリ起キテサワギマワルホドニ晏眠スル者ハ一人モナキソ（三體的詩法抄三ノ二ノ二一オ）

又子ヲ失フ間、イツモナクヨリ外ノ事ハナイソ（錦繡段抄四ノ四一ウ）

アマリノンドガカワク間、サラバ嚢ヲヌイデ（中華若木抄中ノ一二オ）

「間」は鎌倉時代に始り、「まゝ」に漢字をあてた結果出來たものといふ說がある。その例、

大將の引き給ふ間、防ぐ侍一人もなし（保元）

「から」を用ふることも室町時代に例がある。

わが身に應ぜぬ藥を工むから、一旦その藥をも遂ぐれども、その道から落ちて身を過つものぢや（文祿舊譯伊曾保）

江戸時代文化文政頃には今日の如く普通になつた。

いやと申してなど使つてあるから、矢張能い事と思つて（浮世床中）

こつちにも荒神樣があるから、さう旨くはいかれへのさ、浮世風呂三ノ下）

事實の接續に用ひたものも、江戸時代には已然形を用ふるよりは、むしろ、

脇道へ切れると、泥濘へ踏込むのさ（浮世床上）　廊下へ轉ぶとすぐに雜巾だ（同）

といふ言ひ方をしてゐる。これも今日普通の言ひ方である。「ども」に續く場合も、室町時代に已に終止連體形に「けれど」「けれども」をつける形を生じ、江戸時代には動詞の已然形を用ふる形は廢れようとしてゐる。

山里はものゝ寂しき事こそあるけれども、世の憂きよりは住みよからうずるものを(天草平家)

勿論、中には頼母しい者もあるけれど、居候にゐるほどの者だから(浮世床下)

まだしも色白だから七難も隱すけれど(同)

これは助動詞「けり」の已然形から來たものである。要するに、古代語の已然形は今日假定形といふ意味に於て殘つてゐる。

「こそ」に應ずる終止の用法は、室町時代には尙殘つてゐて、

帝王ニ成タ樂ハ今コソアレト云テ悅ハレタゾ(蒙求抄二ノ三一ウ)

サヤウノ者コソ、コヽニアレ羊裘ヲ衣テ澤中ニ釣ヲ垂テイタゾ(中華若木抄中三二オ)

過つて關白殿へ無禮の由を申さうずとこそ思へ(天草平家)

恩を知る者を人といふ。恩を知らぬは畜生とこそ云へ(同)

世にあればこそ望みもあれ、望みのかなはねばこそ怨みもあれ(同)

倂事なれど出かけうずるかと思ふばかりでこそあれ(同)

といふ形が多く保たれてゐるが、次のやうな形もあつて、已然形を以て結ぶ習慣の失はれてゆく兆が見えてゐる。

一度出テ文王ヲタスクルデコソ殷ハ周ノ手ニ入ル也(中華若木抄上ノ二)

サテコソ山谷詩ニモ……ト作ルゾ(錦繡段四ノ三二オ)

この係結の呼應の失はれてゆくのは、早く已然形を失つたもの、たとへば、

竹雲ノ本ハ無點ナホドニ、ゴテコソ候ラウソ(蒙求抄四十五ウ)

こゝで失へといふ儀にてこそあるらう(天草平家)　まことにさこそおぼすらう(同)

の如き場合から起つて、動詞にも及んで行つたものと思はれる。

五　命令形　中古語の一般の通則として、四段・奈變・良變には「よ」を添へず、その他の活用には「よ」を添へるが、四段奈良變で「よ」を添へたものもある。又その他の活用にして「よ」を添へないものもある。四段奈良變以外のものには、「よ」の添へたものが命令形であると云ふのも惡いし、四段に添つた「よ」は、その他の活用形に添つた「よ」とは、別物であるといふのもわるい。中古以前のものでこの通則に合はないものは、

せうとをみてのみはやまじと大納言に申せよ(源、紅梅)　さりともあこは我が子にてあれよ(源、帚木)

よそに見てかへらむ人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも(古今)

これらは、四段良變に、「よ」の添はつた例である。

上卿曰、乘輿騎ニ三廻、後上卿曰、下ヲ利、次引ニ立南殿ニ(建暦御記)

よき人のよしとよく見てよしといひし芳野よく見よよき人よく見(萬一ノ

は前者は上一段の例、後者は上一段の例で、いづれも「よ」を添へない。下二・左變には殊に多い。

ちはやぶる人をやはせとまつろはぬ國を治めと(萬二)　この濱に月夜飽きてむ馬しまし停め(同十九)

おくつきはしるく標たて人のしるべく(同十八)　つとめもろ〳〵進めもろ〳〵(佛足石歌)

此事伊佐世止伊射奈布須(續記)　したり柳の蘿せ吾妹(萬一〇)　事計りよく爲吾が兄子あへる時だに(萬一二)

加變には「よ」を添へない方が本體である。

雨ぞ降るちふ歸り來吾が兄(萬七)

陸奥の安達の眞弓わが引ゆかばすゑさへより來しのびしのびに(古、大歌所御歌)

これは白からむところひたものもてこ(枕)　其の子こちゐてこ(枕)

萬葉の東歌を見ると、關東方言には古く「よ」のかはりに「ろ」を用ひてゐたことが分る。

あどせろとかもあやにやなしき(萬一四)　白雲のたえにし妹をあぜせろと(同)　あが手とつけろこれのはるもし(萬二〇)

今日の關東方言に存する命令形の「ろ」は、その由來するところが古い事を知るであらう。關東方言で命令形に「ろ」を附けるのに對して、關西方言では「よ」を附けるところがあり、「い」「え」をつけるところがある。「い」や「え」は、「よ」の變化である。

方言分布の上で見れば、加變の全國ほとんど凡て「こい」といふのを除けば、その他は靜岡、山梨、長野、越後以東は「起きろ」「教へろ」「見ろ」「爲ろ」といふ形を用ひ、それより以西は、左變がほとんど「せい」であり、上一・下一は京都、和歌山、大阪、香川までは「起きよ」「起きい」「教へよ」「教へい」「見よ」「見い」のやうに、「よ」と「い」とを混ぜてつかひ、それから九州までは大抵、「い」を附けた形を用ひてゐる。室町時代に「よ」が既に「い」になつてゐたことは次の例で分る。

急いで見せい（末ひろがり）　　彼の内々云ふたる高札をあげい（かくすい）　　太郎冠者、案内者をせい（同）

四　音韻變化と活用形

動詞の活用は、母音變化と「る」「れ」の添加から成るものであるから、五十音圖の同行に於て行はれるもので、初は確にさうであつたことが、發音と假字との一致してゐた奈良朝の文獻に於て認められてゐるものである。しかし發音の變化は、このものゝ上にもあらはれて、平安朝になると必ずしも同行に活用しなくなつた。平安朝の初期に於て既に五十音圖の同行を守つてゐるとは云はれない。音便はもつとも早くあらはれた多樣の音韻變化の現象である（ア行ヤ行のエの混淆を別として）。その後も尙變化を重ねてゐるから、今日に於てはまして複雜な形式になつてゐる。その著しいものは、波行にはたらく動詞で、

買　わ　い　う　え　お（う）

となつた。和行と阿行との混淆である。假字遣の上でこれらをもとの通り、

は　ひ　ふ　へ　は（う）

と記してるのは奈良朝の文獻を標準とするからである。たゞ「買ひて」を「買うて」と記すことは許容されてゐた。すなはち平安朝以後に起つた音韻變化のうち假字遣の上でも變つた發音通り記すことがみられたものが音便である。それ故、假字遣と云ふのは、平安朝初期以前の文獻を標準とするものと云へよう。形容詞に於ても、同樣に音便があるが、いづれも今日の歷史的假字遣はみとめてゐるものである。

催馬樂　左介乎太宇倍天太倍惠宇天　　和名抄　糈　之路以毛野　　和名抄　大納言　於保伊毛乃萬宇須豆加佐

「言ふ」が「言う」となり、「言ひ」か「言い」となるのは、轉呼音といはれ、「書きて」が「書いて」となり、「言ひて」が

「言うて」となり、「白き」が「白い」となるのは、音便といはれてゐる。音韻變化としては、〔k〕とか〔h〕とかの子音の脫落から起る語形の變化で、全く同趣のものである。わが口語では語間或は語末に〔i〕〔u〕の母音のあるのは稀であるのに、漢語の移入の結果、わが發音に〔i〕〔u〕が多く出來たため、國語の發音の上にも又同樣の現象が起るやうになつた。それが音便であり、それに後れて出來たものが轉呼音と稱せられる者である。音韻變化の現象としては同じである。それ故に音便といふものは、特に假字遣の上に許容されてゐる一種の音韻變化と云ふべきである。

音便をわけて四種とする。イ音便・ウ音便・促音便及び撥音便である。

一　イ音便　カ行ガ行の四段活用の連用形が「い」となるもの。今日の口語では「書いて」「書いた」「漕いで」「漕いだ」など、「て」「た」に連る場合にのみ現れるものであるが、平安朝以來種々な形にあらはれてゐる。

こゝにもおいたらじ(落)　　そのほどしもあらう吹いたり(更級)

のやうに、「たり」に續くとき、

え堪うまじう泣いたまふ(源)　　いとひききりに花やいたまへる人々にて(同)　　ふともおどろい給はず(同)

のやうに「給ふ」につゞくとき、

つめつ開いつ戰ひしが(謠曲)　　いたうな歎い給ひそ(平家)

のやうに、「つ」に接し又禁止の「な」に接するときにも見える。又この音便は、左行の四段動詞にもあつて、

差いて　　差いた

といふ習慣が、愛知、岐阜、福井、石川、富山、岡山、鳥取、島根等の方言に見えてゐるが、古くは中央語に普く存

在した現象である。

いとかうしもおぼいたるはいかなるにか(落窪)　心なさわがい給ふな見侍るになむ(源)

夢のやうに見ないて思ふこゝち世の中に又たぐひある事ともおぼえず(更級)

例ならでおはしまいしなりなど(讃岐典侍)

これは平安朝乃至院政時代のものである。室町時代にも、その例がとぼしくない。

周瑜ハシスマイタレ(三體詩法抄四ノ一九オ)　堂ナントニ銀燭トホイテ置テ(錦繍段抄五ノ七二オ)

徳ガアレドモカクイテ云ヌホトニ(蒙求抄)　純ハマシリモノナイソ、水ヲスマイタ處ソ(莊子抄一ノ八四ウ)

大野に火を放いた心地をして(天草平家)

よな／＼近習の人にこの一門を滅ぼいて天下を亂らうずると企てらるゝによつて(同)

江戸時代には、次の如き例がある。

など帶にある名をば落いたるぞと申さる(醒睡笑)　あれその錢のなかから見出いて御座あるはといへと(同)

二　ウ音便　ハ行四段の連用形が「う」となるもの。今日の口語では、「洗うて」「洗うた」など、「て」「た」に連る時にのみ見るものであるが、これも古くは更に廣く連用形に起り、

とき／＼通ひ給うけるわかんどほり腹の君とて(落窪)　一人おはしまさんな思う給へて(同)

年のつもりの惱と思う給へつゝ(源氏)　年ごろさてものしたまうしをえうけたまはざりき(宇津保)

眉の間の白毫の一つの相をおもうつべし(梁塵秘抄)

など、各種の助動詞、又給ふなどへつゞくときにも見えてゐる。又バ行マ行の四段にもあらはれてゐるが、今日は山口、九州等の方言にのみ殘つてゐる。文獻の上では香薬抄(二條朝)に、

呼　ヨフデ

なりあそふ給へ大將軍(梁塵秘抄)　かいろの海にぞあそふ給ふ(同)　笋の冠者の君、何色の何摺かこのうだう(同)

とあるのが、もつとも古く物に見えてゐるものである。又、

これは「あそび」「このみ」の音便。鎌倉室町時代以後勢力を得たもので、新しい音便である。

風うへに火をかけやきあげ一もみ揉うでせめんには(平家)

六彌太なつかうで、につくい奴が味方ぞといはばいはせよかし(同)

サテ我ハ早ク製レ身ヲ五湖ヘヒツコウタソ(錦繡段抄二ノ六)

斂手ハツヽシウタナリゾ(蒙求抄三ノ二九)　太刀を被うで殿上の小庭にちやうど畏まつてゐた(天草平家)

たのうだ人が、此方の庭を聞き及うで見物にでござるほどに(狂言記)

江戸時代にも、初期には、

いきしなにつぼうだ花(醒睡笑)　いざ大なる歌ようで遊ばん(同)

など多少行はれてゐた。すべてウ音便は關西方言の特色である。

三　撥音便　マ行バ行四段と奈行變格の連用形が撥音便になるもの。今日の口語では「て」「た」に連るときの形である。このうちマ行のはもつとも古く、次の如き例がある。

手なきる〳〵つんだる菜(土佐)　木の根な堀り食むて(神樂歌)　御裳つむつ袈裟つむつ(催馬樂)

骨碎筋傷(ケイムテ)(白氏文集天永四年點)　自隱(ワレハタノムテ)(遊仙窟正安二年點)

バ行撥音便は、音韻變化の手續がマ行のものより間接であるだけ、やゝおくれてあらはれ、文獻に見えるものは、堀河鳥羽朝以後のものである。石山寺藏嘉保二年點阿吒薄倶元帥上佛陀羅尼經修行法儀軌に、

喚　ヨムデ

とあり、天仁二年の童蒙頌韻に、

哈　ヨロコンデ　飛　トンデ　呼　ヨンデ　遨　アソンデ　覃　アソンデ

とある。奈行變格に於けるものは最も新しくあらはれ、物に見えてゐるのは鎌倉時代以後である。

ほうゆうしんでよらんところなし(假名論語)　しんでのちにやむ又となからずや(同)

日本人が漢語の發音に慣れることが久しくして、その影響のまづ現れたものが音便であるが、さきに述べたイ・ウ音便と共に各種の語形の上にあらはれたものが撥音便である。この音便は平安朝時代以來、尙ラ行音にもあらはれてゐる。それは良行四段の連用形及び良行變格の連體形に於ける、次の如きものである。

知　シンヌ(童蒙頌韻)

わざとあんめるな早うものせよかし(源氏)　物よくいふものゝ世にあんべきかな(同)

去んぬる平治元年十二月(平家)　攝州一の谷にてすでに誅せられなはんぬ(同)

今ハハヤ老ノイタンナントスルコトヲ相感シテソ(三體詩法抄三ノ三ノ二)

尙ハ行四段の撥音便も、

おもんぱかる（平治三）　　追んまくる（太平記）

などあるが、これらは今日は廢れてしまつて、唯成語のうへにのみその名殘をとゞめてゐる。

四　促音便　ハ行・タ行・ラ行・カ行四段活用と良行變格活用動詞の連用形が促音になるもの。今日の口語では、「て」「た」に連るときに起るもので、カ行四段の動詞としては、「行く」が「いつて」「行つた」となる唯一の例があるばかりである。歷史的に見ると、もつと廣く連用形に起つて居り、「おつつく」「とつくむ」「ひつぱる」「ひつさげる」の如き、この種のもの〻成語として今日まで殘つてゐる場合である。

父はむなしくなりたる由を申しておつかへして候ほどに（謠曲刈萱）

かつつくばうて刀ばやにすはり〱、すは〱と作つて（狂言鱸庖丁）

の如く他の動詞に連る場合のほか、

しやつからめよ、罪作りに頸なきつそ（平家）　　昔陶淵明ト云ツシ者又顏魯公ト云ツシ者（中華若木抄中ノ二ウ）

明妃ハ昭陽殿ニイタショリモ瘦セテ胡國ノ烏孫ニ嫁ソ行ク也（錦繡段抄五ノ三六）

李端が岳州ニアソシ時ニ（三體詩法抄三ノ二ノ十四ウ）　　茲に又梶原が二度のかけといつぱ（狂言ひめ糊）

各弓ヲ取テ、箭ヲ放ッテ馳セ違フ（今昔）　　百千の劍をもつてさきわるが如し（寶物集）

など種々の助動詞・助詞に連る場合にも行はれてゐる。この音便は院政鎌倉時代以來文學の上に、

うむにしたがつてみなみづからくふなり（寶物集）

など、辭書に、

遵 シタガツテ　歌 ウタツテ　償 ツクノツテ　彌 ワタツテ　群 ムラガツテ　蹲 ウヅクマツテ

など、訓點には、

乃作(ツクテ)別詩曰悵然破(フテ)レ愁成レ咲(正安二年點、遊仙窟)　可下以贈(ヲクテ)二佳期一裁(タテ)爲(ツクテ)八幅被上(同)

など見え、京阪語にも既にこの變化は早くあらはれてゐたが、恐らく關東方言の影響によるものであらう。まへの撥音便と共に、關東方言には既に早くから起り、それが武人が中央に活動するやうになると共に、京阪語の勢力範圍を侵し、名詞などにも武家語が漸く現れたのと並んで次第に行はれるやうになつたものと思はれる。この音便がもつとも多く軍記物語にあらはれてゐるのは、この臆說を裏書するものと云つてよからう。然し一般の口語には、やはり優雅なウ音便の方が好まれ、たまたま促音便は出來ても、やがてまたハ行四段動詞のごときは再びまたもとのウ音便にかへしてしまつた。

今日に於ても、ハ行四段の音便は、富山、石川、福井、滋賀、三重より以西はウ音便とし、靜岡、山梨、長野から以東に於てのみ促音便として居り、その中間に於て愛知、岐阜、新潟あたりに於て兩者混淆して使つてゐる。

第五章　形容詞

一　活用の成立

形容詞は用言の一種で、叙述の品詞であることに於て類を同じくしてゐる。そのあらはす概念から云へば極めて近いものもあるが、一が事物の屬性を動的に說明し、他は靜的に說

明することに於て、その間に本質上差別を認めることが出來る。「澄む」は動詞であり、「淸し」は形容詞である。「富む」は動詞であり、「貧し」は形容詞である。これを形態の上から見れば、動詞は五十音圖の同行に活用するに對して、形容詞は加行と左行とに渉つて活用してゐる。富樫廣蔭が形容詞を稱けて音雜詞と云つたのも、この形態上の特徴から來てゐる。舊時代の學者が兩者を區別した最初の着眼點は、形態上の特徴に在つたことは爭はれない。現代の口語に於ては、形容詞は、

よ＝　く　い　けれ　　　よろし＝　く　い　けれ

と活用し、すべてに亘つて、活用が同一であるが、古代語に於ては、

よく　よし　よき　よけれ　　　よろしく　よろし　よろしき　よろしけれ

と活用し、久活用と志久活用の二種があり、語尾を「く、し、き、けれ」「しく、し、しけれ」と見る人は接尾語の「み」「さ」等を伴つて名詞となる場合、久活用では、語幹「よ」につき、志久活用では語尾を加へた「よろし」を語幹と見做すと說明し、語尾を兩者共に、「く、し、き、けれ」と見る人は、活用を說くに、志久活用に於ては、終止形は語幹をそのまゝ使ふものと說明してゐる。

こゝに於て問題となるのは、志久活用の「し」が語尾であるか、語幹であるかと云ふことである。權田直助は「形狀言八衢」に於ては、志久活の「し」を語幹に屬するものとし、形容詞活用の一に歸することを論じた。その大要は、

（一）「淺さ」「淺み」「淺げ」、「嬉しさ」「嬉しみ」「嬉しげ」の如く、「あさ」「うれし」は本言卽ち語幹であるから、「さ」「み」「げ」につくとき、志久活用では「し」と共に附く。

(二)名詞につく場合、久活用では淺瀬、深瀬の如く「し」を伴はぬのに、志久活用では細女(クハシメ)、空烟(ムナシケブリ)の如く「し」を伴ふから、

「くはし」「むなし」が語幹である。

(三)終止言を「嬉し」といひ、「嬉しし」といはないのは、同音が重なるのを嫌つて、一つの「し」を省いたもので、口語で「嬉しい」といふのは、「嬉しし」の音便である。「淺し」といふに對して「嬉しし」と云ふ事のあつたことが分る。

(四)凡て活用語のはたらきは何れも一音である。然るに形狀言のみが「しく」「しき」の如く二音のはたらきたるべき筈はない。

と云ふのである。然し氏のいふやうに、空烟といふのもあり、又、

いせのうみの渚によするうつせ貝むなしたのみに世をつくしつゝ(古今六帖)

のやうに「むなし」から熟語になることは確かにあるが、

おほろかに心おもひてむなごともおやの名立つな(萬二〇)

むな車にいをしほつみてもて來たり(宇津保)　月夜に空ぐるまありきたる(枕)

鷹飼のまだもこなくに繋犬のはなれていかむなくるまつほど(拾遺、物名むなぐるま)

など、「むな」から熟語になる例も少くない。「戀ひし」「厭はし」「急がし」など「戀ひ」「厭は」「急が」は動詞の未然形である。「未だし」「甚だし」の「未だ」「甚だ」は副詞である。「かなし」は感動助詞に「し」のついたのである。「大人し」「男々し」「女々し」等の「し」が語幹に屬しないことといふまでもない。これによつても、志久活用の「し」が久活用の「し」と同じく語尾であることを思はしめるものがある。然らば、志久活用の形容詞が、語尾の「し」と共に、「み」「さ」「げ」等の接尾語に接し、又は名詞と熟語になるのに、久活用の形容詞が「し」なくして、接尾語と接し名詞と熟語にな

るのは何故であるか。

これは形容詞にも發達の前後新古の差別があつたと考へなければならぬだらう。志久活用は久活用よりも新しいもので、久活用が既に「く、し、き」の語尾を具へて活動してゐた時、志久活用はたゞ、語幹に語尾の「し」がつき、唯この一個の形で、或は終止形にも用ひ、或は連體形にも用ひて、或時期を經過したことがあつたかも知れない。「遠々し越の國」など、「遠々しき」といふべきを終止形と同形なのは、この形のみで活動した名殘を示してゐるのである。助動詞はもと獨立の用言であつたに違ひないが、それには「じ」の如き「らし」の如き活用のないものがある。これも形容詞の形を想はしめる。この段階が進むと、「く」とか「き」とかいふ語尾も生じ、中には不完全な發達のまゝでとゞまつたものも少くない。「すこし」といふ語は、「小」「少」「微」等の古訓點に見えるところからも、「し、く、しき」と活用したことが察せられるし、新撰字鏡に倚小良須古志支奈留とあるにても活用してゐたことが分るが、古典にはたゞ「すこし」とのみ用ひて、「すこしき」「すこしく」といふ形は見えてゐない。普通、副詞形として用言を修飾するとき、

女みこすこしすぐし給へる(源氏桐壺)　すこし見はや(同帚木)　すこし物の心を思ひしる(同夕顔)

と用ひ、「は」「も」「つゝ」に接するときも、

すこしは見せん(源帚木)　すこしつゝ語り申せ(同帚木)　色はすこしもあせずぞありける(貫之集)

などみな一樣に、たゞ「すこし」といふ形であらはれてゐる。「けだし、けだしく」「但し」「もし、もしく」等の形は、この發達の初期の俤を傳へてゐるものであらう。さらば如何にして遲く發達して、しばらく終止形のみを持つてゐた形容詞が、「く」とか「き」とかの語尾を取つたかと云へば、それは或時期に於て、他の多くの「く、し、き」の語尾を整

備してゐた久活用の形容詞に同化され統一されたもので、語幹に「し」語尾のついた形が第二次の語幹となり、「よろしく」「よろしき」といふやうになる。ただ終止形の「よろし」だけは、まへから存在してゐたから、そのまゝ用ひられたものであらう。権田直助が口語に「嬉しい」と云ふのを、「嬉しし」の音便と説いたのは誤解である。連體形が終止形を同化したことは、動詞の條にのべたやうに、院政鎌倉時代以後の一般の現象で連體形の「き」が音便で「嬉しい」となつたことは爭ふことができない。小田清雄翁が皇典講究所講演で、

秋深み夜風烈ししうべしこそ四方の里人衣うつなれ（永長二年東谷歌合）

家苞にさのみな折りそ櫻花山の思はむこともやさしし（基俊集）

何ものも常に見るにはいとはししいつもあかぬは粥と大乘（無住雜談集）

等の歌を引いて、語學始まつて以來の大發見であると賞揚されたのは最負の引倒しで、かゝる形はむしろ「嬉しい」といふ口頭語の形が出來た後、その影響で鎌倉時代以後文語の上に「しし」があらはれるやうになつたものである。

見苦シシトク〳〵罷出ヨト云（平家延慶本）

祇王にも劣らず、歌の音のよさよ、美しし〳〵と嘆られたり（源平盛衰記）

笠の内、あやしし、見いれ立のけば（曾我物語）

云出セバハヅカシシ又浦山シサニ手向ヲスルニテ候（三體絶句三ノ二九オ）

泣くはわれ、なみだのぬしは、かなししぞ（閑吟集）

世の聞えも恐ろししとあつて、急ぎ高雄へ送り奉られた（天草本平家）

等かゝる形は、皆新しいものにばかり見える。要するに、歴史的にいふならば、久活用の「し」も志久活用の「し」も語尾たる點に於ては別のものでない。

そも／＼活用語尾を伴はない語幹そのものが、形容詞のもつとも原始的の形である。

あなおもしろ布當の原、いとたふと大宮どころ（萬六）　　あなたふとけふのたふとさよ（催馬樂）

あなうたてこの方のたをやかならましがはとみゆかし（源、帚木）

のやうに、語幹そのまゝで文の終止を成すことがある。これがその古形の一用法である。今日の口語でも、

あいた　　おゝあつ

といふ言ひ方は殘つてゐる。又副詞法に用ひて、

いたなかば　　高光る　　宮柱太知り

としたのもある。又熟語にも用ひて、

なが引く　　遠白し

と使つてゐる。又後にはこの語幹を重複して、

なが／＼　　ひさ／＼

など副詞を造り出すに至つた。古くは助動詞に接續して、

今うたばよらし（記）

など用ひた例もある。形容詞の「し」の語源は分らない。又その發達した上からいへば、形容詞の語尾は加行と左行と

に跨つてゐるが、その理由も定説はない。上田博士は(註一)〔ch〕といふやうな語尾が出來て、分化したものと論ぜられた。(註二)金澤博士は左變動詞の「爲」であるといはれる。

加行に活いた形容詞語尾は、萬葉集を見ると、

まさかしよかば(萬一四)　かくだにも國の遠かば(萬一四)

といふ「か」といふ形がある。又、

遠けむ人しわがもこに來む(記)　わかれなばうら悲しけむ(萬一五)

しましくもさぶしけめやも君まさずして(萬)

「けむ」「けめ」といふ形がある。又、

わが戀やまず本の繁けば(萬一〇)　玉桙の道の遠けば(萬一七)

梯立の倉梯山は嶮しけど(記)　玉きはるいのち惜しけど(萬一七)

「けば」「けど」といふ形がある。この種の語形はまだその上に職能の分担に關して一定のきまりを充分に發達させてゐない。

しが無けばたれか懸けむよあたら墨繩(紀)　戀しけば來ませわが夫子(萬一四)

の如きは「けば」を未然形に用ひてゐる例である。否定の助動詞がついた「けなく」といふ形もある。

妹にこひつゝすべ無けなくに(萬一五)　嘆く空やすけなくに(萬一七)

又未來の助動詞についた「けまく」といふ例もある。

見ずかなりなむ戀ひしけまくに（萬九）

といふのもある。これらの形をカリ活用の形容動詞の約されたもの又轉じたものといふ說もあるが、實際に於て古く「かば」はあるが「からば」はない。「からむ」は萬葉集に唯一箇の例があるだけである。又已然形の「かれ」も萬葉集に一つの例があるが、「ば」「ど」「ども」に接するには常に「けれ」もしくは「け」を用ひてゐる。これを以て見ると、カリ活用の形容動詞の方が新しいもので、前記の形は形容動詞に似た性質をもつ一種の形容詞といふべきである。

東歌には次の如きものもある。

心にのりてこゝばかなしけ　悲しけ兒らに　なやましけ人妻かもよ

今日、九州方言の形容詞には「無か」とか「よか」とか種々の職能に於て用ひられてゐる。新井白石も東雅の總論に、

太古の語には善をばヒといひけり。ヒといふ言葉轉じてフといひ亦轉じてヨといひけり。そのヨといふ言また詞の助たかりてヨシといひしに、其詞亦轉じて今の如きは、中土東西南北の方言によつてヨシといひヨキといひ、ヨカといひヨクといひ、またヨフなどともいふ。其音の輕重清濁、呼ぶ事の開合緩急また各相わかれたり

と云つてゐるが、東歌のは東國の古い方言的形式であらう。とにかく加行に活用する形容詞の語尾が「く」や「き」の外にもあつたことが分る。畢竟「く」や「き」は之と同じ種類に屬するものに違ひない。又後世の形容詞とちがつて、これらの形容詞活用は動詞に似た法を具へ、助動詞にも連るものがあるから、動詞活用との問題も起つてくる。學者の間にしば〳〵動詞と形容詞との關係が論ぜられてゐるが、余は半ばは動詞との關係を考へ、半ばは別方向に於ける形容詞語尾の發達を考へてゐる。言ひかへれば、加行語尾に於て動詞と同方向の發達を考へるが、左行語尾並に接尾語の

「さ」「み」等につく形に於て、形容詞獨自の發達を考へる。動詞と形容詞とは、そのあらはす觀念からいつて類似したものである。同じ事物の屬性觀念を時として動的に說明すれば、動詞になり、時として靜的に說明すれば形容詞となる。わが國語と同一系統の琉球語には動詞と形容詞とは形態上の區別がない。わが國語の形容詞にも古くは動詞の形態に近いものがあつたと考へる。しかし靜的に屬性を說明する形容詞と、動的に屬性を說明する動詞とが、言語の發達するに伴うて自ら別々の品詞として分化して行くことは考へることが出來る。そこに「し」といふ語尾が形容詞特有の語形として屬性の靜的說明にあたる品詞の語尾となり、同時に加行に活用した語尾の或ものをとり入れて一種の活用體系を成し、屬性の動的說明にあたる品詞の活用體系とは別々な方向を取つて發達して來たと考へることが出來る。或は「し」は係屬關係を確めるものとして、高山、赤土などの「高」「赤」等について來たもので、「天つ風」「向つ峯」等の「つ」と初はあまり遠いものでなかつたかも知れない。形容詞の語幹そのものは名詞と區別できない。「築く」「掘る」から、「つか」(塚)「ほら」(洞)が出ると同樣に、「明く」「暮る」から「あか」(赤)「くら」(暗)が出て、後には一は名詞として發達し、一は形容詞として發達してゐる。連體形の用法に形式素を加へて活動を圓滑にするを得た形容詞は漸く發達せんとしてゐた股長(ももなが)、根白(ねじろ)等の叙述形式の場合をも助けて下にも附くことになり、こゝにさきに發達してゐた動詞的の形容詞活用形式と結び付く端緒をひらいた。

別の活用體系が解體して、そのうちの或ものが組合されて職能を分擔し、他の活用體系を形作ることはその例が多い。「靜かな」「活潑な」と「靜かだ」「活潑だ」とは、明かに別の語類であつたものだが、今日の口語では一方は連體形を一方は終止形をつとめて、準形容詞の體系を形作つてゐるのと同樣である。要するに文獻以前に遡ると、形容詞に

は動詞に似たものもあり、奈良朝時代にその痕跡をとゞめてゐるが、いつか亡びてその活用形のあるものが新しく生じた「し」語尾と一緒になり、後の形容詞語尾の起源を成した。これが今日の久活用で、それについで志久活用を生じたものであらう。琉球語に「し」語尾を持つてゐないと云ふことは、「し」語尾の新しく發生したものであることを想像せしめるものがある。「遠い」といふ形容詞について琉球語と比較して見ると、わが國語では形容詞の語幹 tō 副詞形 tōku に對して琉球語 tū, tūku 又わが「遠さ」に對して tūsa 遠みに對して tūsan もほゞ似てゐるが、終止形連體形に至ると tūsang, tūsaru となつて、動詞と同じ形態を發達させ、わが「遠し」「遠き」の如き形は持つてゐないことに於て大に趣を異にしてゐる。それ故に、わが國語の形容詞は比較的新しい時代に一種特別な形態を發達させたわが國語特有の語法的範疇と見るべきであらう。

二　活用形の變遷

奈良朝時代には、彼の「く、し、き」の語尾とちがつて、「か」とか「け」とか活用するものがあることを述べた。これは一時代まへに活動したものゝ殘存にすぎないことは、それがこの時代の文獻にその例が限られて居り、殊に「け」を終止に用ひたり、連體に用ひたりしたものゝ多數が東歌にのみ限られてゐることからも想像せられる。このほかに、この時代の形容詞に特有の語法としては、

妹に逢はずあらばすべ無み岩根踏む生駒の山を越えてぞあが來る（萬一五）

そを見れば心を痛み、みどり兒の乳乞ふが如く（萬一八）

の如き形のあることである。このごろはこれをマ行四段の動詞の連用形と說く人が多いやうであるが、やはり普通の說のやうに、形容詞語幹に接尾語の「み」の添はつたものゝやうである。かゝる用法としてあらはれてゐるものゝうち

には、「逢ふを無み」「日を多み」の「無み」「多み」の如く四段に活いた實例のないものもある。
又奈良朝時代の普通の形容詞は、後世と同じく久活用・志久活用であるが、そのうちには尚發達の不完全であつた時代の俤をのこしてゐると思はしめる用法が少くない。

うるはしとさ寢しされてば（記）

のごときは名詞法に違ひない。

香具山は畝傍ををしと耳梨と相諍ひき（萬一）

これも「畝傍、をゝしきもの」といふ「をゝし」が、名詞法で畝傍と同格になつてゐるものとして、始めて、從來のこの歌に對する疑問がとける。風土記に三山相鬪とあり、香具山が畝傍及び耳梨と戰つたのであらう。「と」は並列の助詞である。
連體形として用ひたものは擧げるまでもなからう。枕詞となつてゐる次の如きものは、この種のもの丶遺形である。

あをによし奈良を過ぎ（記）　花ぐはし櫻のめで（紀）

形容詞が語幹のみで活動した時代のあとには、この種のわづかに「し」といふ語尾のみを持つてゐる形が、終止形としても連體形としても無差別に用ひられた時代があつたに違ひない。こゝに擧げた外、仔細に研究したならば、副詞形として用ひられたものもあるらしい。
「く」及び「き」の語尾が分化してからは、「き」は連體形に用ひられて、「こそ」の係に對しては、この形で結んだ。この點が特に平安朝の形容詞と比較して、奈良朝の形容詞のもつとも著しい特色であらう。

鮎こそは島邊も善き（紀）　己が妻こそ常めづらしき（萬一一）　野を廣み、草こそ繁き（萬一七）

この形が出來ないまへはやはり「こそ」の結びには「し」を以て結んでゐた例がある。

子ろが襲衣の有ろこそ良しも（萬一四）

久活用・志久活用に、已然形の「けれ」「しけれ」の發達不完全なのも、奈良朝時代の言語が、平安朝のものと違ふところである。奈良朝時代に於ける已然形は、たゞ「ば」といふ助詞に接する場合にのみあらはれてゐる。

おのが身しいたはしければ（萬五）　わかければ道行き知らじ（萬五）

かへしやる使なければ（萬一五）　あが片戀のしげければかも（萬一七）

などは見えるが、「こそ」の結びに用ひられたこともなく、又「ど」「ども」に接する場合には、

畝傍山木立薄けど（紀）　あをによし奈良の大路は行きよけど（萬一五）　梅の花香をかぐ望み遠けども（萬二〇）

のやうな「けど」はあつても「けれど」はない。

「けれ」はカリ活用形容動詞の「かれ」の轉じたといふ說がある。黑澤翁滿を始めとして草野清民氏に至るまで形容詞の活用中からこの活用を省いた理由はそこに在る。その正しくないことは前に述べた通り、「かれ」の發達が「けれ」より遲れてゐることから考へられる。動詞活用に類推して已然形の「け」が「けれ」となつたもので、「かれ」が「けれ」と轉じ、又約つて「け」となつたのではない。

平安朝時代になつて音韻變化の爲に形容詞の語形に著しい變化が起つた。それはイ音便もしくはウ音便である。イ音便は連體形にあらはれてゐる。

にくいことを引き出でむぞあやしき（紫式部日記）　　よしないことはきこえでといへば（落窪）
さすがに若い人にひかれて（更級）　　あはつけい様に世人はもどくなりしかど（源）
うちとけず苦しいことおぼいたり（源）　　額にはべにしろいものをつけたらんやうなり（榮花）

今日の口語の連體形は、皆この形の繼續であるが、文語には「かな」といふ助詞に續く場合にのみ限つて現れる。

噫悲しいかな

ウ音便は連用形にあらはれたものである。

いみじうみぞれ降る夜（源）　　雪たかう降る日（宇津保）

今日の關西方言はこの形を傳へてゐる。それ故に、この形は東西で慣習を異にしてゐる。

（東）　赤く　　美しく　　　（西）　赤う　　美しう

たゞ例外として東京語でも、「ございます」を附けるときには、この音便化してゐる連用形を用ひて、「おはやうございます」「堅うございます」など云ふ。しかもこれも「ございます」をともなつた一種の慣用語のごとき場合のことで、「ございました」とか「ございません」とかなつたり、又、殊にその間に助詞を挾む場合には、この音便形は使はないこともある。

背はあまり高くございません　　　おいしくもございません。

ウ音便はもと〳〵關東方言には無いのであつて、例外として「ございます」につゞく時にのみこの現象のあるのは、全く關西方言の混じたものである。丁寧な言葉づかひに古く關西方言を使つた名殘とおもはれる。「ございます」につ

づく時でも、連結する形の多少の變化によつてウ音便にならないのは、その故であらう。

イ音便は平安朝には連體形に限られたが、鎌倉時代には名詞法にもこの形を生じて、

　鬢鬚の黑いは如何にと宣へば(平家)

のごときもあらはれ、室町時代に一般に連體形が終止形を同化するに及んで、終止形としても現れるに至つた。

　只三千トセラレタハ文字ガツマリテ聯句ナンドノヤウデワルイ(中華若木詩抄上ノ六)

　日影ヲ見タト云フハ注ガナイ(蒙求抄三ノ二七)　少々仰下シタ此僧只者テハ無イ(碧巖鈔八ノ一六)

　馬大師推過ソ人ニ讓タモ好イ(同八ノ六)

これが今日も終止形として用ひられる形である。それ故に、上古からの形を今日に傳へてゐるものは、「く」と「けれ」だけで、それも「けれ」が「ば」に接する時の、

　よければ　　正しければ

はもとの形であるが、「ども」に接するときは、終止連體形に「けれど」「けれども」を附けて、

　よいけれど　　正しいけれども

とつかふ。この新しい形は、江戸時代には、

　これ／＼香を嗅ぐ花を挿すなどの詞は古いけれど(浮世床上)　耳できくなら香を聞くといふが能いけれど(同)

など普通にあるが、室町時代には殆どなかつたと云つてよい。

　夢覺テ坐スルコト久キケレトモサキニ久クイネタ程ニ其枕痕ガホウニツイテ不消ソ(四河入海二一ノ一、一四オ)

はたしかにその萌芽であるが、まだ普通は已然形をもとのまゝ用ひて、

ウツクシサハ、ウツシケレトモ、骨格輕キソ也（錦繡抄三ノ四〇オ）

本意テハナケレトモ、セメテ詩ヲ七千首ハカリ作ツテ（同四五オ）

詞スクナケレドモ、理カタヾシク、ヨウキコヘタゾ（蒙求抄四ノ六四オ）

のやうなものばかりである。

終止連體形に「けれど」「けれども」をつける形は動詞の已然形のかはりにも用ひられるやうになつた新しい習慣で、一見形容詞の已然形そのものゝ變化のやうであるが、室町時代には用言について現れるよりもむしろ、

終になきませなんだけれども（狂言鶏立の江）

の如き形に多くあらはれ、

三十棒打テクレフケレドモ許スゾ（碧巖鈔五ノ四四オ）

などとも用ひてゐる。恐らく「たけれども」から「けれども」が分離し、つひに動詞にも形容詞にもついて、已然形のかはりを勤めるやうになつたものであらう。

つぎに形容詞の各活用形の用法變遷を見よう。

一　未然形　この未然形は、

したばふる心しなくば今日もへめやも（萬一八）　ことしげくともたえむと思ふな（古今戀四）

かくおぞましくば、いみじき契深くとも、絶えてまた見じ（源、帚木）

など、「ば」「とも」を附けて、まだ成立たない條件を假定するに用ひる形は、今日も行はれてはゐるが、次第に用ひられなくなる傾を持つてゐる。又この形の「ば」に接續するものは、或時代には「は」がワとなつたことがある。ロードリゲーズの日本語典に「なくんば」「ないならば」と並べて、

なくわ　naqua

を擧げてゐるのは、明かにその發音を示してゐるが、天草本の平家物語又伊曾保物語等にも、

命惜しくば助けうぞ（天草本平家）　清盛入道御許しなくば、頼朝いかでか生きて（同）

志が淺くは、何故にこれまでは參らうぞ（文祿舊譯伊曾保）

などいづれも、「わ」と發音してゐる。同時にロードリゲーズが「よいならば」と擧げてゐるのは、既に今日の吾々がつかふやうな形が當時行はれてゐたことを示すものである。江戸時代には、「なら」となつた。

ハア、まアだ安いなら三百五十で（膝栗毛四下）

「とも」を用ひて假定をあらはす形も尙あるが、一般に文語に引かれて殘つてゐる形である。

二　連用形　この形は、

はまなみはいやしくくに高くよすれど（萬二〇）　かくながくおはしますたぐひもおはしけるものを（源、乙女）

のごとく、用言を修飾する場合につかふことは、今と全く同じであり、この形のうへに平安朝に起つた次の音便、

世にながうありておもふさまに見え奉らむと思ふぞ（源、紅葉賀）

のごとき形も、關西方言では今日も行はれてゐる普通の連用形である。江戸時代も同じ、その例。

いしこらしう江戸子ぢや何たら角たらいふても(浮世風呂)

つぎに、

一すぢはおもしろく、二すぢはかなしく、あはれなることは初よりはすぐれたり(宇津保)

のやうな中止形としての用法がある。これも、

等のやうにつめたくはなく、叉日にてらされてもとけません(國定讀本)

など、今日用ひられることがあるが、殆どすべて記錄體のもので、口頭語とは云はれない。

「つ」の中止形「て」が之を補うてゐることは、よほど久しいものである。

おれも年が老いたから記憶が悪くて、根が薄くなつたから(浮世床初上)

吸物ぢや無うて韓蒸ぢやさかい、鹽が辛うて、トトやくたいぢや(浮世風呂四中)

形容詞の連用形に「あり」の結びついたものが、形容動詞と稱せられるもの丶一種で、この形となつて、はじめて種種の助動詞に接續し、各種の叙述の目的を全うすることが出來る。それ故に、

これにつけても憎み給ふ人多かり(源氏、桐壺)　うれはしき御心ちには、ものうかる音にのみ聞し召しなさる(増鏡)

の如き終止形・連體形の如き、普通の形容詞で十分なものは、出來ても後には用ひられなくなつた。

三　終止形と連體形　連體形が終止形を同化すると共に、終止形は亡びて、「い」語尾となり、もとの終止形をそのまま今日に留めてゐるものは、名詞に轉用した

からし(芥子)　すし(鮨)　おもし(重鎭)　あかし(證明)　仲よし　骨なし

或は人名として用ひられる

やすし　たかし　あつし

等のもの、又は助詞の助をかりて副詞に準ずべきものとなつてゐる

相手なしにはなす　仕方なしに歸つた

の如きものに過ぎない。このほかには、

これはされば君の御誤でもなし、これは(天草平家)

さりながら少將は驕まらゝ事もなし、夜晝たゞ父母妻子のことのみを歎かれた(同)

の如き、今日まで引續いてゐる。事實を並列する場合に、

・暗さは暗し、しかく入道の孫とも知らず(天草平家)

といふのも、今日尙次の如く殘つてゐる。

暗さは暗し道はなし(中略)なだれをうつて落ちました(國定讀本)

連體形は、

白き袷に薄色のなよゝかなるを重ねて(源、夕顔)

のやうに體言を修飾する場合、

隨分によろしきも多かりと見給ふれど(源、帚木)

のやうに體言に準ずる場合、又は、

日の影にしたがひてかたぶくらむぞ、なべての草木の心とも覺えでをかしき(枕)

の如く、「ぞ」「なむ」「や」「か」等の係の助詞に應じて文を終止するに用ゐるのが、中古以前の主な用法であつたが、今日は體言を修飾する場合は、イ音便の形を用ひ、體言に準ずる場合は、それに助詞「の」を伴ふ。その變遷のあとを見ると、室町時代には、

さりとも少將は情深い人ぢやほどに(天草平家)　　古ルイ衣ヲバ捨フレイト云テ新シイヲトラスルゾ(蒙求抄七、一八ウ)

といひ、江戸時代にも、

私愛な女中は幼いを連れ何方へござる(元祿歌舞伎成田山分身不動)

のやうに單獨に用ひて、「の」を伴はないのは、もとの形の俤をとゞめてゐるのである。

「ぞ」「なむ」「や」「か」と連體形との呼應は、終止連體同形となると共に亡びて、係結の意識は失はれた。

四　已然形　この形は「ば」をつけて已に成立つた條件又は條件の成立つたものと假定する場合につかひ、「ど」「ども」を附けて已に成立つた條件をあらはすにつかふ形であつた。

日のあしければ、いざるほどにぞ、今日廿日あまりへぬる(土佐)　　いやしけれどもをかしけれ(枕)

現代の口語では、

面白ければ見よう　　嚴しければ怨まれる

の如く、まだ成立たない條件を假定し、もしくは條件の成立つたものと假定する場合、すべて假定に用ゐるから、今日では假定形と稱すべきことは動詞の場合と同樣である。「ば」「ども」を附けて成立つた條件をあらはす用ひ方は、僅

室町時代に、

筆ヲ手ニスルコトモナケレバ硯ニ塵ガ生ズルゾ（中華若木詩抄上ノ一三）

やゝあつてさてもあらうずることでなければ少將袖を顔におしあてゝなく〳〵罷出でられた（天草平家）

の如きものもあるが、動詞と同じく、

サレドモ用フルモノナイホドニツイシヨウガ無用也（中華若木詩抄上ノ一）

コヽチアシイホトニ、ナントテマリ今度ハ何ソシカトシタ事ヲ見出テ云ソウト思テ（百丈清規鈔序章）

サテ如此ガ多キ故ニ（三體詩法抄三ノ二ノ二一ウ）　月ノカゲガ低キホドニ城郭ノ影ガアルゾ（三體家法三ノ三ノ四オ）

功名ナキニヨツテ功名ヲナサヌゾ（中華若木詩抄上ノ一一）　紅水カシテ浪ガ高キ間（三體ノ三ノ二九オ）

梅ガヒキケレバ物ニカヘテ今思フ我所ニモナキカ梅ガ一段高キホトニ日ニカヽル者ガナイゾ（中、中ノ八）

サル上ハ船路モ危キホトニ専ハラ用心セヨトゾ（三體詩法抄三ノ二ノ六ウ）

のやうな形が見え、江戸時代には、

こちとは楽はせずといゝから（浮世風呂二ノ下）　それでも安いから楽だ（膝栗毛四ノ下）

のやうな形が多くなつて、今日の習慣の前驅を成してゐる。

「ぞ」「なむ」「や」「か」に對して連體形で結ぶ習慣は、室町時代に連體終止同形になつたから廢れてしまつたが、「こそ」に對して已然形で結ぶ形は尚殘つてゐる。

文章コソ面白ケレト思フタゾ（蒙求抄、四ノ一一オ）　今更物な思はせうずることこそ悲しけれ（天草平家）

それでも、

生テ用が、アッテコソ願イテハナイト也（蒙求抄七ノ二十オ）

おのれを伴にして急いで上れと書いた事こそ恨めしい（天草平家）

の如きものもあるのは、次の時代に全く失はれる前提で江戸時代にはもうない。

第六章　助動詞

助動詞は主に動詞に從屬することによつて、概念を得る品詞である。それ故にいかなる概念を持つてゐるか、言ひ換へれば助動詞の意義の上から分類することが出來る。又動詞に從屬するには、多く動詞の語形を變化しなければならない。されば動詞との接續から分類することができる。又助動詞はそれ自身活用をもつてゐる。隨つて活用の種類の上から分類することができる。

助動詞の變遷も、またこの三つの方面から觀察しなければならぬ。たとへば使役をあらはすものは、奈良朝に於ては「しむ」であるが、平安朝に於ては、「す」「さす」であり、左行四段に活く尊敬の助動詞、波行四段に活く繼續態の助動詞は奈良朝を以て終り、推量の助動詞「めり」は平安朝に新に出來てゐるといふ類、平安朝以前に於て終止形に從屬した「まじ」は院政鎌倉時代以後動詞活用形變化の結果、或ものは未然形につくやうになつた。又「る」「らる」が平安朝以前は下二段に活いてゐたのに、院政鎌倉時代以後下一段に變化しはじめ、江戸時代以後甚だしくなつたといふ如き類である。それ故に、余は以下意義によつて助動詞を分類し、その動詞との接續や活用形の變化はそれに併せて

観察して見たいと思ふ。

一　**受身可能及び自發の助動詞**　今日の受身の助動詞は、「れる」「られる」で、下一段に活用してゐるが、その古形「る」「らる」が平安朝の受身の助動詞である。「る」「らる」は下二段に活用してゐる。この助動詞は又可能にも自發にも使はれる。それは、

俊蔭が船ははし國にはなたれぬ(宇津保)　　今日は京のみぞおもひやらるゝ(土佐)

庭なども浮きぬばかりに雨ふりなどすれば、おそろしくていもねられず(更科)

など、それぞれ受身可能自發の例である。奈良朝時代には、「る」「らる」は、

もろこしの遠き境に遣はされいませ(萬五)　　おほかたかく言はるべき状にはあらず(續記宣命)

男のみ父の名負ひて女のこは伊婆禮奴(イハレヌ)物にあれや(同)

の如き例も稀にはあるが、この時代にもつとも普通の形は、「ゆ」「らゆ」で、下二段に活用してゐることは「る」「らる」と違はない。

我が宿に生ふるつちばり心ゆも思はぬ人の衣にすらゆな(萬七)

たちばなの本に道ふむやちまたに物をぞ思ふ人にしらえず(萬六)

妹を思ひいの寢らえぬに秋の野にさを鹿鳴きつ妻思ひかれて(萬一五)

「らゆ」の例は最後の可能に用ひられた「寢らゆ」が一つあるだけである。「いはゆる」「あらゆる」といふ語は、この形の成語として今日に殘つてゐるものである。「る」と「らる」とは接續する動詞の種類を異にし、「る」は四段・奈變・良

變に、「らる」はその他の動詞につく。從つて「ゆ」と「らゆ」も同じ關係にあると思はれるが「らゆ」は用例少く、而も、

伊(イ)喩(ヒ)之(シ)之(シ)乎(フ)(紀二六)

の如きものがある。恐らく受身可能等の意味は「らる」「らゆ」に於て「る」「ゆ」が持つてゐるもので、「ら」は「らる」「らゆ」が「る、れ」活用の動詞に附くのを見れば、「る、れ」語尾の影響であらはれたものに過ぎなからう。はじめは四段・奈變・良變以外の動詞にも、單獨の「ゆ」のみが附いたと疑はれることは、「見る」が「見ゆ」となつて可能を表し、遂に本動詞となつてゐることを、「きく」と「きこゆ」の關係、「思ふ」と「思ほゆ」の關係から想像することができる。

「らる」が動詞に連るときには、その膠着の度を進めることが多く、「捨つ」から「捨てらる」が出來て「すたる」、「かふ」から「かへらる」が出來て「かはる」となるやうに、本動詞になるものであるが、その習慣は今日も種々の新しい語彙を作り出し、「敎へる」から「敎はる」、「仰付けられる」から「仰せ付かる」、「かぶせられる」から「かぶさる」、「まけられる」から「まかる」、「やめられる」から「やまる」、「つとめられる」から「つとまる」、「持たれる」から優遇の意味の「もてる」などが出來てゐる。

左變に連る場合にも、「せらる」が「さる」となることが室町時代から始まつてゐる。

運タル四千餘家ヲ復サレタレバ(史記抄四、一〇ウ)　蒯通ニ云ワサレテカウシタゾ(同一二ノ二七オ)

上々根ノ人ニハ何トソサレンソト問ンホトニ(碧巖抄三ノ三四ウ)　是はいかな事、まだ義にされぬ(狂言記選)

「る」「らる」の一段化は、用言の一段化と前後してゐるもので、その尊敬に用ひられたもので、「れる」「られる」となつてゐるものが、既に鎌倉時代に例がある。

右にかきくもるといへる五文字ぞ、ことはなれてなかれるやうにみえ侍れど（千五百番歌合）

今度参れと仰られるぞ（古今著聞集）

それと同じく可能の「る」「らる」も「れる」「られる」となつたが、「れる」は文動詞の語尾と約つて、例へば「よめる」「行ける」の如きものが出来た。これは四段に活く動詞に限るもので、江戸時代から今日につゞいてゐる習慣である。

まぐろ：よめる（浮世床中）

二　使役の助動詞　今日の使役の助動詞は「せる」「させる」であるが、文語では「す」「さす」といふ。この「す」「さす」が時代を遡ると、平安朝の一般の使役の助動詞であつた。それではもつと古くはどうであつたかと云へば、奈良朝時代には、「しむ」を用ひた。それは、

夕されば汐を満らしめ、あけされば潮を干かしめ（萬三）　妹が手たわれにまかしめ（紀）

いかしやくはえの如く仕へ奉りさかへしめ給へと（祝詞）

の如きものである。

平安朝時代に入ると、この「しむ」は極めて稀になつて、土佐日記には「す」「さす」九個あるのに、「しむ」は、

御舟すみやかにこがしめ給へと申して

たゞ一個、竹取でも「す」「さす」三四十あるが、「しむ」は、

さてこそ取らしめ給はめ　男どもの中に混りて夜を晝になして取らしめ給ふ

のたゞ二個のみである。源氏物語にも、「す」「さす」は數へ切れないが、「しむ」は一二個あるだけである。皆「給ふ」

を伴ふものばかりで、多くは尊敬の意味に轉じてしまつてゐるものである。

「す」「さす」は下二段、「せる」「させる」は下一段に活き、前者から後者が變化して來たものであることは云ふまでもないが、今日の方言に見える形式は、その變化の中間過程を示して雜然たるものがある。

せ	せる	せれ	せ	せる	さすれ	せ	する	すれ
させ	させる	させれ	させ	させる	さすれ	させ	さする	さすれ

これらの方言形式と並んで、

さ　し　す　せ

の如き四段に活いてゐるものがあるのは、注意すべきものである。方言の分布を吟味すると、下一段に活くものと四段に活くものと混用してゐる地域は極めて廣く、四段のみの形式をもつてゐる地方も少くない。それ故に、それらの方言にあらはれる活用を併せ掲げると、

さ　し　す　すれ

の形式は京阪から中國四國方言に多く、愛媛縣の、

さ　し　す　しやあ

の如きは四段である。已然形の「しやあ」は「せば」の約つたものである。この四段に活く形の起源は、遠く中古に遡るもので、次の如くである。

木の葉をも嶺にふかさぬ秋風の（宇津保）　　さらすはおほんふみもならはし奉らじ（同）

心ざまさとくて琴などもならはす人あらば（落窪）　　笛こゝろに入れたりとて「これならはせ」と北の方のたまへば（同）

いさゝけわざせさす物もなし（土佐）

この四段に活らく形は、奈良朝時代に於ては、尊敬をあらはす助動詞であつたものである。當時の使役の「しむ」の「し」も、もと恐らく尊敬の助動詞で、使役の意味は「む」にあつたものであらう。形容詞から出た動詞「たかむ」「ひろむ」等と比較すると、この想像も不當ではあるまい。

「す」と「さす」は接續する動詞の種類を異にし、「す」は四段奈良變につき、その他には「さす」がつく習慣であるから左變につくときは「せさす」となる筈であるが、「せさす」が約つて單に「さす」となつてゐる例が往々見える。

いざさせ給へ。みむとのたまはすれば（和泉式部日記）　　よき男の車とゞめてあないさせたる（枕）

たゞ袖をとらへてとうざいをさせずこひとりてもてこずは（枕）

けしからず人にてんつかるべきふるまひはさせじとおもふものを（源）

佛をむかへ奉りて説法をさせまゐらすべきよし仰せありければ（寶物集）

「せさせ」の約ることは、「せ」が使役で、「させ給ふ」といふ尊敬に連る時にも同樣にあらはれる現象である。

その日の夕つがたたてまつらさせ給ふ（源）　　いよ〳〵みち〳〵のざえをならはさせ給ふ（源）

琴ひくときかせ給ひてひかさせ給ひければ（金葉）

それ故に近代語になると、「せさせ」といふよりも、この省略形の方が優勢になる。

餘所へ嫁入リヲサセイト云（蒙求抄四ノ二一ウ）　　人ヲ殺スニ犬ニサセゴトハ心得ヌゾ（同四ノ一九ウ）

德宗ノ時、宮方ヲサセラレタソ(古文後集抄)

殊に漢字を根柢とする左變に於ては、ほとんど皆この格である。

イクサヲシソコナツタレバ皆生害サセラル丶ソ(蒙求抄四ノ三四ウ)

母ノ子ヲ育テテ生長サスル如クニ自然ヲ待ツテ(古文後)　　天公カ此三人ヲ窮餓サセテ(同)

「しむ」は平安朝時代に於て使役として用ひられることが殆どなくなり、纔に尊敬の意味に殘つたが、院政時代、大鏡などには尊敬の意味につかはれる「しむ」が又大に優勢になり、鎌倉時代になつては再び使役として復活したのは漢文訓點の影響から來たものであり、恐らく記錄語の上に於ける現象であらう。

三　**待遇の助動詞**　もつとも古く動詞に添うて、尊敬をあらはす形式は、左行四段に活用してゐる助動詞である。これは從來左行延言と稱せられたものである。

ながのらされ　　よさしまつる　　かりほつくらす。

この形式は平安朝になつては成語として「御佩刀(ミハカシ)」「御執(ミトラシ)」など、わづかに名詞のうちに殘つてゐるばかりで、文法的範疇としては亡びてしまつたものであるから、平安朝の語法を本として說く者時代の文法に於ては延言と稱せらるゝに至つたもので、實は動詞の未然形につく助動詞である。「しる」「きく」「たもふ」「織る」から、「知ろす」「聞こす」「おもほす」「織ろす」となつてゐるのは轉音である。

やすくにと平けくしろしめせよ(祝詞)　　くはし女をありと聞こして(記)

ま人言思ほすなもろ(萬一四)　　女鳥のわが大君の織ろす機(記)

この助動詞は、主に四段活用の動詞に附くものであるけれど、稀にはその他の動詞にもつき、その場合には、多くは未然形が他の音に轉じてゐる。「ぬ」(寢)から出來た「なす」がある。

吾をまつと奈須らむ妹を(萬一七)

玉手さしまきもも長にいは那佐むを(記)　　我が門かむに入り來て奈左ね(萬一四)

これは下二段についたものである。

一段活用の動詞の「きる」「みる」について、未然形がエ韻に轉じて「けす」「めす」となつてゐるのもある。

汝が祁勢流おすひの裾に　　わがせこの蓋世流ころもの(萬四)

體言に轉じた「みけし」、

ぬばたまのくろき美祁斯を(記)

もこの格である。「めす」は、次の如し。

よしぬの宮をあり通ひ賣須(萬一八)　　大君の賣之し野べには(萬六)

平安朝になつては、受身と同じ形の「る」「らる」、使役と同じ「す」「さす」が尊敬の助動詞として用ひられるやうになつた。

御覽じだに送らぬ覺束なさをいふ方なく思さる(源、桐壺)　　としかげ十六になるとし唐土船出したてらる。(宇津保)

などは、「る」「らる」の例である。

「す」「さす」は單獨に用ひて、

泣く〳〵ちぎりのたまはすれど(源、桐壺)

の如きものもあるが、多くは、

明しかれさせ給ふ(源氏)　　召してこそ使せおはしませ(和泉式部日記)

のやうに、「給ふ」「おはします」等、助動詞化した尊敬の動詞と共に用ひてゐる。

尊敬の動詞が助動詞として用ひられてゐるものは、奈良朝時代に「めす」「ます」「たふ」「たまふ」等のものがあつたが、平安朝に至つては更に次の如きものが加つた。

おとどいとなかしとほのきゝおはす(源)　　生れたまひつる御子をうつくしみおはさふ(宇津保)

されど歸りいましにけり(源)　　なほみるにそでこそは見たうばむによく(宇津保)

召使はせおはしまさむと思し召さむ限は召してこそ使はせおはしませ(和泉式部日記)

などは、この種のものとして數へるべきものである。

謙讓をあらはすものとしては、奈良朝時代に、「まつる」があつたが、平安朝になつて、そのほかに「たてまつる」「まゐらす」「まうす」「きこゆ」「仕うまつる」の如きものができた。

女子も侍らねばむすめにし奉らむ(落窪)　　げにいかならむと思ひまゐらする氣色にはあらで(枕)

中納言に語り侍りしかば、いみじう感じ申されて(同)　　うつくしがりきこえ給ふ(同)

後々の御わざなど孝じ仕うまつり給ふさまも(源)

待遇語の一種で尊敬謙讓の意味ではなく、談話の對手に對する丁寧な言ひ方が國語には發達してゐるが、中古時代

には次の如きものがある。

参り侍りと申し侍りつれば(和泉式部日記)　　えゝさぶらはじと申せば(枕)

暫しのほど御心を惱まし奉るにやとなむ思ひ給ふるに(源)

「たまふ」は尊敬の「たまふ」とちがつて、下二段に活用し、もつぱら「見る」「きく」「思ふ」といふ動詞につき、熟語の動詞に添ふ時には多くその間にはさむ。

暫しの程御心を惱まし奉るにやとなむ思ひ給ふる(源)　　かの大納言の御女ものし給ふときゝ給へしは(同)

いとほしう思ひ給へつゝみてなむ、いたう思ひ侍りつる(源)　　さわがしくのみ侍ると見給へむづかりて(宇津保)

「侍り」「さふらふ」は、今日の「ます」と同じ價値に用ひられてゐるが、源氏物語など平安朝の文章には「侍り」が多く、「さふらふ」は榮華物語や今昔物語など、院政時代以後に多いのを見れば、「さふらふ」は新しい言葉でそれが鎌倉時代頃から大に勢力を得て、今日の書牘文の特色をなしてゐる「候」に發達するやうになつたものであらう。

今日「になる」といふ尊敬の言ひ方があり、標準語ではむしろ「なさる」「遊す」などより一般的のものであるが、その起源は相當に古い。

胸打騒テ居タル處ニ御ヒルニ成ケレバ例ノ先朝政ニモ及給ワス夜ノヲトヽヲ出テモアヘサセ給ハス(延慶本平家)

尙鎌倉時代には、名詞に「なる」をつけた形で、尊敬をあらはすものが出來た。

白河の院も仰せなりけるとかや(平家)　　例の嵯峨殿の御幸なりて還御なる(中務内侍日記)

春宮もおなじく行啓なる(増鏡)

又室町時代には、

コチヘ同心サシメト王子朝カ答ヘ云タソ(蒙求抄二ノ二三オ)

扁舟ハ只數尺ハカリニテ短トテナ笑ハシムナ(錦繡段抄四ノ四七オ)　上れ〳〵上らしめのう石神(狂言小唄)

の如き尊敬がある。一見さながら使役の助動詞から出たものゝやうに思はれるが、使役の助動詞の「しむ」とは少しも關係がないことは、次のやうな形から考へられる。

此程ハ貴方ノイラシムテ山ニモ共ニノホリテ遊ヒシヵ(三體絶句四ノ一六)

學問バシサシムタカト云ソ(蒙求抄三ノ二一)　貴方ノイラシム湖南ノ君山ニ上テ(三體絶句、四ノ一八)

これらは連用形連體形の場合。又「シモ」「シマ」といふ形がある。

明日常州ノ毘陵ノ邊ヘ行テアトヲ回顧シモハ(三體絶句、四ノ一六)　陽關ヲイテ、安西ヘモイラシマハ(同、四ノ四〇)

(註)これらは古くからある尊敬の「せます」「させます」から出たものであらう。「せ」「させ」は本來下二段に活いたものだが、室町時代には既に四段にも活いて次の「します」「さします」の如き形としても現れてゐるのを見るであらう。

高祖ニノカシマセト義ソ(蒙求抄八ノ三〇ウ)　疾といはしませ(萩大名)

のう〳〵最前の人何さしますか(文相撲)

室町時代以後、「まいする」「まらする」といふ助動詞がある。今日の「ます」は之から出たと云はれるが、江戸時代まで尚、さきの「坐す」から來てゐる同じ形が並び行はれてゐた形迹がある。「まいする」「まらする」の例。

天竺ニ未度之經ガアルホトニソレヲトリニヤリマイスルトテ流シマイセラレタソ(百丈清規抄兩序章)

佐命ハ天子ヲタスケマラスルゾ(蒙求抄三ノ二八ウ)

「まらす」は元祿頃にも用ひられた。

有難う存じまらす(萬歳丸)　　私めが作りまらした濁酒(同)

「まらす」は約つて「まつす」となつた。狂言記に、

おう知りやらずは、敎へてまつせう(鹿狩)　　はてさて好うこそおりやつたれ、おすへてまつせう(吟聟)

など見える。「まらす」は「まゐらす」の轉化したもので、室町時代の「まらす」は抄物に見える通り、

昭儀ガ帝ニ毒ハシマラセタト云程ニ自殺スルゾ(蒙求抄八ノ二二オ)

上計吏ハ國々カラ人ヲ年貢ノヤウニ京ヘマラスルコトゾ(同五ノ十九)

ヲレガ天下モチ事ハ、不足ナ程ニヲノシニ天下ヲマラセント也(莊子抄一ノ二五オ)

のやうに、謙讓の本動詞として用ひるのみならず、助動詞となつてゐるものも、

是ニ物ヲカシマラセタゾ(蒙求抄二ノ二三オ)　　讒言ソ、二貴人ヲ殺ロサセマラセタゾ(同門ノ二オ)

遊人カナンゾノヤウニト云テ上ヘ訴ヘマラセタ(同三ノ四ウ)

の如く皆「まゐらす」の原義を保存してゐるものばかりであつたが、室町後期になると、移つてこれらの謙讓の助動詞のうちから單なる丁寧の助動詞となつたものが見えて來た。天草本の平家物語や伊曾保物語などに見えるのが即ちそれである。

さらば夜がふけまらせうずれども(天草平家)　　由ない都近い所は久かく憂い事もや聞きまらせうずらう、暇申さう(同)

侍共皆打立つて只今法住寺殿へ寄せうと出立ちまらせうず（同）

「出立ちまらする」は平家原本の「出立候つれ」を口譯したもので、正に今の「ます」にあたり、活用もまた既に連用形が今日の「まし」の如く「まらし」となつてゐる。

「まらす」はまた「おまらす」と云ふこと、

なう〳〵この小袖は水に濡れも致されば、其方におまらするでもおりやらぬぞ（狂言入間川）

どれ〳〵そのこぶを買うておまらせうぞ（同、昆布賣）

の如きものがあるが、又、

其儀ならば、たとへ取りやるまいほどに何を附けておまつしよ（狂言八句連歌）

の如き、「おまつす」といふ形がある。これには、

けふは其方におまさうと思ふて、酒肴を調へおいた（狂言茶盃拜）

此太刀は持古したれど、我御料におますぞ（同、盗人連歌）　此は業よしなれ共此を其方へおまするぞ（大藏流、同）

のやうな「おます」といふ形が見えるから、「おまらす」が「おまつす」となり、「おます」となつたのと並んで、「まらす」も亦「まつす」となり、「ます」とかはつたと想像されてゐる。それ故、元祿頃にはまだ謙讓の助動詞にも、丁寧の助動詞にも相混じてつかつてゐる。

八郎左衛門、才助に膳を据ゑ「誠に麁相ながら心ばせを上つて下さりませい。扨々武士程情なきものはなし。主が下人となり、下人が主となる。是皆親の敵討たしません手段とはいひながら、此盆を持ち、しやぼんとなされました時は、扨々侍冥加も盡

き果てたるかと存じまして云々（武道達者）

「敵討たしません手段」の「ませ」は謙讓の助動詞、その他は丁寧の助動詞。「しませ」は狂言記にある尊敬と同じものにも見えるが、これは未然形で左變に活いてゐる（尊敬の「ます」は四段）。使役の連用形が「し」にかはつてゐることは同じ元祿の脚本に「家を繼がしてくれ」「そこな乳飮ましゐ給ふこそ葛の葉でござんす」「家を繼がさん爲よ」（以上いづれも女人結緣灌頂）と同じ。又次の如きは尙尊敬語で、これが「まゐらす」から出た「ます」と合流して、今日はもつぱら丁寧の助動詞となつてしまつたのだらう。「ます」の活用中に、四段の形式の混じてゐるのも、この關係から來てゐると考へられる。

あゝ殿は早まりました〳〵。必ず早まりますまいぞ（武道達者）

まへの例の「しやほんとなされました」も、尊敬であつたかも知れない。今日のやうに「ます」が純粹に丁寧語になつてしまつてからは、對手のことをいふには、「早まりなさいました」といふ。

註　拙稿「足利期言語の待遇法」（「國語と國文學」昭和三、十二）湯澤幸吉郎氏「足利期の待遇助動詞シモ、シムに就て」（「國語と國文學」昭和四、九）參照。

四　否定の助動詞　否定の助動詞「ず」は、

ず（未然）　ず（連用）　ず（終止）　ぬ（連體）　ね（已然）

と活用するが、連用形には「ず」の外に「に」がある。

せむすべのたどきを知らに（萬一五）　進むも知らに退くも知らに（續紀宣命）

見れどあかにけむ(萬一七)

など奈良朝にもあり、又、

中納言の君いへばえにかなしう思へるさまを人知れずあはれとおぼす(源)

いへばえにいはれば胸のさわがれて(伊勢)　　いへばえにふかく悲しき笛竹の(古今六帖)

とへばえにとはればうしとうらむなり(隆信朝臣集)

など、平安朝にも用ひられてゐる。又東國方言に屬するものでは、

新田山、峰にはつかなな(萬一四)　　漕ぐ舟の忘れはせなな(同)

わが手觸れなな(萬二〇)　　帶は解かなな(同)

など、「な」といふ未然形がある。

これらを考へると、「ず」とは別に「な、に、ぬ、ね」と四段に活いた古い否定の形があつて、後に之に左行變格動詞「す」が結びついて出來た「ず」が、未然連用終止にもつぱら用ひられるやうになつたものであらう。多くの國語に於て〔n〕音が否定にあらはれると同じく、わが國に於ても、否定の觀念は〔n〕音にあらはれてゐることは疑はれない。この否定の助動詞の發生が〔n〕音の融合から來てゐると考へるには、「まからんとす」がマカランヅとなり、「まからんず」「まからず」となつてゐることなども參考にならう。

今日の口語では、この助動詞の連體形「ぬ」もしくはその變化した「ん」が關西方言には用ひられてゐるが、關東方言では之と趣を異にして、形容詞から來てゐる「ない」がもつぱら用ひられてゐる。「ある」の否定には、「あらず」も「あ

らぬ」も用ひられず、「ない」といふ形容詞そのものが用ひられてゐることは、關東方言も關西方言も同じである。古代語でも「なく」「なけれ」等が否定に用ひられたものがあるが、それは連用形についてゐるから、それとこれとは語性を異にするものと云はなければならない。

　けふよりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は（萬二〇）

これは「顧み」が體言に準ぜられて形容詞があらはれたもので、

　それに少將を暫く預らうと申すに、御ゆるされなきは（平家）

　それに少將暫く預りまらせうと申すをお許されないことは（天草平家）

も同様のもの、又、

　お見やる通りわらはも異なる事もおりないよ（狂言伯母が酒）

　希代の朝恩ではござないか（天草平家）　意趣を殘さうずる儀でござなければ（同）

のごときも見えるが、いづれも今日の「ない」の如く動詞の未然形について、助動詞の働をしてゐるものとは、全く性質を異にしてゐるものと、いはなければならない。それ故に、これら兩者の關係を考へることは無論早計のやうであるが、又一方に、

　言はなくに　思はなくに

等、未然形にも廣くつく「なく」といふ否定の形が、古くより用ひられてゐたことを考へる必要がある。又それのみならず、東國語には、

なは　なへ　なふ

等、未然形につく特有の否定の助動詞が行はれてゐたから、之に似てゐる連體形につく「ない」がいつか是らに聯想して未然形につくやうな習慣を生ずることも考へられないではない。「ず」でも「ざり」でも皆未然形につくから、否定の助動詞は一般に未然形につくといふ意識が、この勢を助けたことは勿論大きいものがあらう。もしその上に、語間語尾につくハ行音が、ワ行音もしくはア行音にかはつた時代があることを考へるに於ては、關東特有の否定形「なふ」の連用形が「なえ」となつたと考へられる故、之と極めて發音の近い「ない」が之に聯想して、未然形に附くやうになるのは容易なことであらう。「ない」が關東方言に於てあらはれたことも、その由て來る所を思はしめるものがある。おあん物語に、

こはいものではあらない

といふ例がある。これは關東方言の「ない」とは別であるが、「ない」が未然形についてゐる。之で見ても、未然形が否定の助動詞を引きつける傾向のあつたことは分る。

「ない」の過去は「なかつた」で「なく」に「ある」の接續から生じたものである。「ぬ」の過去は「なんだ」でその由來は明かでない。新村博士(註)は「なふ」から來てゐると說かれた。關東方言の變遷を示す文獻に乏しいから、この形の見えてゐるのは、よほど新しい。否定の助動詞の文獻に見えてゐるのは、殆ど「ぬ」「なんだ」である。

囘ハ爭ハヌソ、道叶フタニ依ツテ物ヲモ云ハヌソ(古文眞寶之抄)

殘リノ者ノニハ頭ヲモアゲサセヌヤウニ思ツタソ(蒙求抄五ノ三四ウ)

歡樂デヤウ云テ出ナンダゾ(同一ノ八オ)　　三日三夜雜談シアツタカ、チトモクタビレナンダゾ(同五ノ三二ウ)

又「なんで」ともいつた。

唐ノ代ニハ鯉魚ヲ殺サナンテ候(蒙求抄一ノ四ウ)

その起源は分らないが、「なんだ」よりまへにナムシといつた形のあつたのは、同じ性質のもので、之より古いものである。

一日ニ二度參スル日ハ候シカドモ不參ノ日ハ候ハナムシ(平家延慶本)

これらに對して、「ない」が未然形についたもつとも古い例は、

敵にあはなひで、死なゝひ時は(雜兵物語)　　目釘に心をつけて、ぬけないやうにしめされい(同)

緒が短くて掛けられない所で(同)

などであらう。これは關東方言で書かれたものであるからである。

「ず」が「て」に接續するとき「で」となる。この形が變化して「いで」となり、今も關西方言に見えてゐる。院政鎌倉時代から引つゞいて今日に至つてゐるものである。

このみこはやうかるみこよ、かたびらにしりをただにかゝいでゆゝしうつきうたるこれをみたまへ(梁塵秘抄)

馬カス、マイデ、ヲドツテ足カキヲメ、ス、マヌソ(蒙求抄五ノ一七ウ)

音もせいで、およれ〳〵、鳥は月に鳴き候ぞ(閑吟集)　　汁も菜も見もせいで御奔走と申されけり(醒睡笑)

「じ」は語形變化がなく、終止連體に用ひる。これも「ず」と同じく起源は「らし」「まし」等にあらはれてゐる推量の

意味の「し」と奈行に活いた否定の助動詞との融合から來てゐる。近代語には姿を沒して、今日の口語では「まじ」から來た「まい」が、その代りをつとめてゐる。「まじ」は奈良朝には「ましゞ」といひ、

ましゞ（終止形）　　ましゞき（連體形）

と活用し、「ましゞみ」ともつかふ。

敢ふ未之（マシジ）時として（續紀宣命）　己が得麻之字伎（ウマシジキ）みかどの寶位を（同一本）

暫くの間も忘得未之自美奈毛（ワスレウマシジミナモ）悲しび賜ひ（續紀宣命）

平安朝時代に「まじ」となり、形容詞と同じ活用をするやうになつた。音便を生ずるに至つて「まじく」が「まじう」、「まじき」が「まじい」となつたことも、形容詞と同じである。但し「まじう」は平安朝に普通であるが、「まじい」は鎌倉時代以後に出來た。

名乘ることはあるまじいぞ（平家）　和田が居うずる座敷に新成が居まじいかと（幸若）

尋常ノ事デハ、アルマシイトソ（三體詩法抄二ノ三ウ）

室町時代に「まい」を生じ、「まじい」と共に用ひてゐたが、今日は唯「まい」を殘してゐるばかりである。

南泉ノ弟子ト聞及タバカリデモ、一見セスンバ知レマイ（碧巖抄三ノ六一ウ）

韓盧カ無ンハ何ノ役ニモ立ツマシイ（同三ノ四三ウ）　先ツ今ハ出マシイト云ヘドモ（古文眞寶之抄）

「まじ」は平安朝以前は皆動詞の終止形についたが、今日の「まい」は接續が複雜で殊に加變・左變動詞に於て甚だしい。ほゞ四段には終止連體形に、その他には未然形につくとだけは云ひ得る。かゝる混亂は早く始まり、まだ「まじ」

の時代に、鎌倉時代に、

みまじきと思へども、さすがにまた見らるゝ也(後鳥羽院御百首)

ものうらやみはせまじきことなりとか(宇治拾遺)

の如き、未然形につける習慣が見え、室町時代には四段活用の動詞にも未然形に附けた例がある。

フットキカマイニキワマツタホドニ(史記抄一四ノ七〇オ)　　印綬カナウテ人ガツカマイソ(同五ノ三ウ)

しかし、これは稀な例である。

註　新村出博士「天平時代の國語」(東亞語源志)

五　時の助動詞　時の助動詞は之を分ければ、過去・現在・未來の主觀的時間段階を現す時階の助動詞と、動作の時間的態様を現す動作態の助動詞とにすることが出來る。わが國語では、「き」「けり」が過去を現して時階の助動詞に屬するだけで、その他の時の助動詞に數へられるものは、概ね動作態をあらはすものであり、尙未來と云はれる「む」は本來は推量をあらはす助動詞に屬する。いづれの國語でも動作態をあらはすことは、古代語に於て榮えたもので、わが國語の形式を研究するにも、この方面から觀察することが必要である。

わが國語にあらはれてゐる動作態は、繼續・存在・完了の三態である。繼續態は動作の進行繼續、完了態は動作の完了、完了した動作の結果の存在をあらはすのが存在態である。時階が話者對事實の關係の上にあらはれる主觀的の時間的差別であるのに對して、動作態は動作それ自身の上にある時間的性質である。それ故にかゝる動作態は過去・現在・未來のなかにあらはれる具體的の動作にも、はたまたいつといふ一定の時の上にあらはれない概念的動作に於

てもあらはれるものである。

奈良朝の言語に於て、「散らふ」「翔らふ」「まもらふ」などの形が豐富に見えて居り、之を昔は波行延言と稱けたが單に音調の爲に延びたものとすることは出來ない。これはとりもなほさず、繼續態をあらはした形式である。平安朝以後に於ては、この形式は特殊な語彙に限られ、「かたる」「かたらふ」、「すむ」「すまふ」、「とる」「とらふ」、「うつる」「うつろふ」の如く、同義語もしくは同源類語として殘り、もとの繼續態の意味を失ひ、又往々「たまふ」に對する「たぶ」、「ねがふ」に對する「ねぐ」の如く、もとの形を殆ど忘られたものもあるが、奈良朝以前に於ては自由に活動した構成で、「おそふらふ」「もみたふ」「忍ぶらふ」「照らさふ」「咲かふ」「まどはふ」「ぬすまふ」などこの動作態をあらはす豐富な語彙が見えてゐる。

「つ」「ぬ」は完了態をあらはす助動詞である。往々過去とせられ、又完了と稱せられても時間段階的に考へられてゐたが、決して時間段階的の性質のものではなく、純然たる動作態をあらはす形式なのである。動作態としての性質をもつとも明かに示してゐるのは、その概念的に考へられた動作を云ひあらはすに用ひられた場合であらう。續紀宣命に、

（上略）却りて身を滅し災を蒙りて、終に罪を己も他も致都（イタシツ）。これによりて天地を恨み君をも怨奴（ウラミヌ）。（中略）然るものを口にあは淨しと云ひて、心にきたなきをば、天は覆はず地の載せぬものと成奴（ナリヌ）。此を持つ伊は稱を致し、捨つる伊は謗を招都（マネキツ）。

これは皇位を求むる人の心について述べ給へるもので、「罪を己も他も同じく致すものである」「天を恨み君を怨むに至るものである」といふ一般的事實を述べてゐるのであつて、「つ」も「ぬ」も具體的事實が過去に屬したのでも、完

了したといふのでもない。

「ぬ」と「つ」とは共に完了態と云つたが、その間にまた自ら差別があり、前者は單なる完了、後者は完了とともに動作の惹起す結果の觀念を伴ふもの。その區別を示す爲には余はかりに一を完了態とし一を已然態といふ名で呼んでゐるが、相通ずる意味をもつて總括して廣義の完了態としておく。くはしくは拙稿「つ、ぬの本質」(「國學院雜誌」第廿二卷八號乃至第廿三卷六號)を參考されたい。

「り」と「たり」とは、繼續・存在・完了の三態をあらはし、「り」の方が古い。又「り」は後世は主として完了につかはれるが、古代語では繼續・存在をあらはす方が多い。「り」の原義(「あり」の膠着)を保存してゐるのである。紀記に於ける用例の統計をとると、

繼續態　五　　存在態　二九　　完了態　一

唯一個の完了態の例は、

よくすに醸める大御酒

といふので、古事記には「かみし」とある。紀の「かめる」は新しいものであらう。後世に多く發達した完了態の用法はこの時代には却て殆ど存在しなかつたことが分る。

「たり」は動作態をあらはす形式として、最も新しくあらはれてゐる。中古以後盛になつたもので、後に至るほど、「り」よりも勢力を得たことは、次に掲げる統計が示してゐる。「たり」は紀記には存在しない。もしありとすれば遠飛鳥宮の歌に、「汝が佐陀賣流(ナ サダメル)」とあるのを、守部が「稜威言別」に佐陀賣多流と補つたものがあるが、これは守部が濫に

加へたもので、紀記にはほかに「たり」が一つもないのを見れば、古い頃にこの形の存在は疑はしく、萬葉の中でも上國の言語より古い形と思はれる十四・二十の卷には唯一個づゝあるだけである。然るに十七の卷には九個、十八の卷には七個、十九の卷には七個、之を「り」と比較する時は、その率、次の如く後に至るほど増加してゐる。

	紀記	萬一四	(萬一七	同一八	同一九)	計	(土佐	源氏末摘	同明石)	計	十六夜
り	三六	十五	二六	一九	二四	六九	九六	五三	六二	一一五	一六
たり	〇	一	九	七	七	二三	三七	九四	八二	一七六	四五
	0.0%	6.2%				25.0%				60.4%	73.7%

この統計にも見える如く、「たり」は奈良朝時代に漸く現れはじめ、次第に勢力を増して、遂に後世「た」となると共にもつぱら過去をあらはす助動詞となつた。

時の助動詞のうち、「き」はもつとも早く影をひそめた。鎌倉時代に於て、既に「き」のかはりに連體形の「し」が多く用ひられるやうになつてゐる。

父子共に朝恩にあづかりし(平家)　一所に死なんとて契深かりし(同)

之について「ぬ」が亡びた。「つ」「ぬ」は並ぶものと普通云はれるが、室町時代には「ぬ」は亡びてゐるが、「つ」は用ひられてゐる。

サル程ニ范蠡ハ呉ヲハ我カ功テ破ツ(錦繡段抄二ノ六ウ)　今日マテ士民ナレトモ、シツル事カ候ソ(蒙求抄五ノ一九ウ)

後ニ學問シタ時ニ、ネツタウ、ステツラウト云レタゾ(同一ノ三五ウ)

人ノ地ヲ借テ田ヲ作ッ畠ヲ作ツナトシテ母ヲ養タヿガアルゾ(同一ノ七ウ)

果然サミツル事ヨ、打レタハ又マッサウアラフスト思タ(碧巖抄五ノ八オ)

橋はひいつ、敵にはあひたし、鎧を傾けて立つた所に(天草本平家)　　姑ら馴れつらう返すぐ(閑吟集)

などつかひ、いまも「行つつらう」「遣つつらう」「死んづらう」などの形が、方言(山口縣など)にある。「つら」といふ形は、山梨、靜岡・岐阜等に存してゐる。「けり」は「ける」といふ形に於てのみ殘り、感動の意味に於て用ひてゐる方が多い。

マウサテハ我ガ運ハ盡タケルトテ、ムクト起テナコリヲシミノ酒ヲ飲ゾ(史記抄五ノ三一ウ)

今日用ひる「たつけ」はこの形から來てゐる。靜岡方言には「見つけ」「降るけ」の如きものが殘つてゐる。

時の助動詞の多くが次第に亡び去つて、最後に殘つたものが「たり」の變化「た」である。およそ院政時代に、「たり」から「た」が出來てゐたことは、保延頃の歌人藤原爲忠の家集に、歸雁を題に、

昨きぬとふる里さしてかへる雁こぞきた道へまた向ふなり

と云つて、「來た」を北に言掛けてゐることで分る。又、

誰ゾト問ヘハ鳥羽ヨリ女房ヲ只今夜打入テ敦シ奉リタトハ何事ゾト云(平家延慶本)

根井又立出テ使ノ雜色ニ猫殿ノ參リタトハ何事ゾト云(同)

と見えるから、院政から鎌倉時代にかけて口頭語の上に、おひ／＼出來てゐたものに違ひない。

室町以後はそれ故に「た」が過去の意味にも使はれ、又種々の動作態にもつかはれてゐる。過去の意味のほか種々の

動作態につかふことは次の例に見られる。

晦菴ハ十六七テサトリエタゾ（莊子抄一ノ七）

或人肉觜を銜んで河を渡るに、その河の眞中で銜んだ肉むらの影が水の底に映つたを見れば已がふくんだよりも一倍大きなれば影とは知らいで銜んだを棄ゝて（文祿舊譯伊曾保）

其功ハ具足トモキタル武者百萬人ニハマシタゾ（錦繡段抄二ノ三〇ウ）

學文ズキデスグレタオガアルゾ（蒙求抄五ノ一二ウ）　面テノ詞トハ絶妙ノ詞ヂヤトホメタ心ゾ（同一三ウ）

家語ニ少々アレドモチガウタゾ（蒙求抄五ノ二七ウ）

の如きは、決して過去ではない。文語の「たり」は形容動詞につかないのに、室町時代に、

一義ニ官次ガ、イヤシカリタゾ（蒙求抄七ノ二〇オ）　是ガスゝメタ者ニ、アダナ者ハナカツタゾ（同二二オ）

命にもかへて惜しかつた馬を（天草本平家）

等、かく用ひてゐるのは、「た」が唯一の過去の助動詞になつた結果である。

連體には「たる」を用ふることがある。その例、

煬帝ノ宮殿ノアトハ百姓ノスミカトナツタルニタトヘタゾ（三體詩法抄二ノ一ウ）

人ノ死ンダルシヤレ頭ヲトツテアツメ置テ（同二ノ三ウ）

未然形「たらば」が「たら」となつてゐることは、次の如く室町時代既に今日の口語と同じ。

いとほしいと云ふたら叶はうずことか（閑吟集）

又次の如く單に物を並列するのも、今日の用法が當時に發してゐることを知る。

薪ヲ取ッタリ庭ヲハイタリスル形ゾ（古文眞寶之抄）

已然形に「たれ」を殘してゐるのは、今日の口語よりも原形を保存するに近い。

天子ノ明ナ德ガアレバコソ、臣ガソットシタ功モナッタレトカウ云タゾ（蒙求抄四ノ一五オ）

未來の助動詞と云はれる「む」は「む、め」と活くが、その起源に遡れば、「まく」「まし」の「ま」もまた同じ性質のものと云はなければならない。東國方言では、なほ「も」といふ形もある。已然形の「め」は、平安朝を以てその生命を終り、「む」は母音を失ふと共に、〔m〕が〔n〕とかはり、同時に〔u〕とかはり兩者並び行はれたが、否定の助動詞に「ん」を生ずると共にもつぱら〔u〕をのみ用ふるやうになつた。

(註) 鎌倉時代すでに「う」となつてゐたことは、古事談四に山林房覺遊といふ奈良法師が合戰の日いち早く逃げ失せたので、先陣房カクレウといふ綽名のついたと云ふのは、隱れんが「かくれう」と云つてゐた爲であらうし、法然上人行狀畫圖原本に「往生せうせしは、わとのゝ心そ」とあるなどでも推して知られる。

室町時代の文獻の上では、「ん」「う」ともにあるが、恐らく當時すでに口頭語としては、多く「う」を用ひたものであらう。

カヲモタンナラバ、任爵ホトニナリタイゾ（蒙求抄五ノ一七オ）　尺蠖ノ蟲ノカヽウテ居タハノビウ用ゾ（同一ノ五ウ）

身雲霄ニ致サウト思タレハ（三體絕句一ノ四四）　中書舍人ニナッタリスルヲハシ云ワウ歟（同、五ノ二）

「う」は又一部は「よう」となつた。「む」が「う」になつたとき、はじめは、

（一）行かう　來う　（二）受けう　爲う　（三）起きう　見う

になつたが、ついで四段奈良變以外に於て、

（四）受けよう　起きよう　見よう　來よう　爲よう

といふ形が出來た。閑吟集に、四段奈良變格以外の動詞の未來形のあらはれてゐるもの合計十三箇あるが、そのうちに既に後に「よう」といふ助動詞を生ずるに至る端緒が見えてゐる。

忘れう　來う　爲う　暮れう　何爲う　爲よう　寢う　爲ようずらう

見う　入らせう　入れう　何と爲うぞ

いづれも單純に「ん」が「う」となつただけであるが、そのうちに「爲う」はまた「しよう」といふ假字を以て書きあらはされてゐる。「う」は動詞の語尾と融合して長母音となつてゐたことを示すもので、「せう」はオ列拗長音となつてゐた爲に、「しよう」とも記してゐるのである。今日のごとく、「し＋よう」ではない。

これが進むと、多くの動詞の未來形がオ列長音もしくはその拗音であることから、上一段・上二段の動詞にも之に類推して、次の如きものが出來た。

見よう　亡びよう

これもまだ後世の如く、「よう」といふ獨立した動詞を分出してゐないことは、天草本の平家や伊曾保などに歐字綴であらはしたものが、

meōto　forobeō

となつてゐるので分るが、之が繰返されると、そのうちに「よう」といふ音を獨立のものとして分析して來る。この分

析にハ行ヤ行ワ行の二段動詞の未來形が、語尾と融合して「仕(ツカ)よう」「見よう(見えんノ意)」「植(ウ)よう」の如く「よう」そのものとなつてゐたことが、大いに關係のあることは、まづ考へて見なければならない。その結果「よう」が取離されると、動詞はもとの動詞の形を傷けられ、その概念を現すに足りないから、あらためて動詞の未然形に附けるやうになつて、今日の如き、「おぼえよう」「起きよう」「見えよう」の如き未來形を生じたのである。これはおもに江戸時代に關東方言の上に出來た。左變が「しよう」で、未來形を「し」として受けてゐることも、その一つの證據としてよからう。それ故に、江戸時代にも關西方言に屬するものには、依然として、次の如く見える。

主從の盃をせう(元祿歌舞伎萬歳丸)　何と其方は下人か何と其方も抱ようか(同)
やがて歸參するやうに御水をあげう(同、一心女雷師)　見るもの毎に惚れうならば(同)

然るに浮世風呂、浮世床等には、

内の用心を見やうと思つて手燭を持つて(浮世風呂)　小裁(コギレ)を見つけたら拵へよう〳〵と思つた所(同)
鐵さんや是をお前に上げやう(同)　甘茶をなめさせやうと(同)　ムヽ仕(シ)やうヨ(同)　雲とつけやうか(浮世床)

の如きものが、多數を占めるやうになつた。

室町時代以後の未來の助動詞を云ふならば、「う」「よう」のほかに、「うず」を擧げなければならぬ。これは「んとす」の約つた「んず」が、平安朝時代に既に口頭語として存在したのが轉じたのである。鎌倉時代に既に「んとす」の意味ではなく、單に未來をあらはし、やゝ「ん」よりは語勢の強いものとなつてゐたのである。

これをこそ草葉の蔭にて嬉しとは思はんずれ。(平家)

慶喜（キヤウ）トマフシサフラフコトハ佗力ノ信心ヲエテ往生ヲ一定シテムズトヨロコフコヽロヲマフスナリ（親鸞消息）

これが室町時代には、「らず」と變り、

コノ寒天ニ、イマチットモイネタカラウズガ宰相ノコトナレバ出仕申サイデモカナハヌソ（中華若木五ノ一三ウ）

善コトヲモ惡ヲモ手本ニセウスルト云コトソ（蒙求抄一ノ二ウ）

東坡ヲ以テ正トセウズ程ニ（三體詩法一ノ三八）　百丈云ハフズ事カ生フテサヤウニ云ハルヽカ（碧巖鈔七ノ四九）

などいふやうになつた。この形が關西地方一般に行はれたと思はれ、文祿舊譯伊曾保物語にも、

是非に本望を遂せうずる　せめん農人の所作なりとも苑がはうず

とあり、同じ天草本平家物語にも、

定めて北面の者どもが中にあらうず　御幸をなし奉らうずると思ふはいかに

など極めて普通で、その後も元祿頃まで用ひられて近松の淨瑠璃などにも散見して居り、その上、方言として今日も三河・尾張・遠江・美濃・信濃の諸方に、「書かず」もしくは「書かあず」の如き形として殘つてゐる。即ち關東方言に於ける「べい」といふ特殊の未來形に對して、關西方言の系統に屬する方言的形式となつてゐるものである。

關東方言の「べい」は、推量の「べい」から來てゐる。人の名にまねて昔から「關東べい」と云はれた。「書くべい」「起きべい」などいふ。又「かくべ」「起きんべい」など變化した形もある。東京にはないが、關東の諸地方、東北の諸縣に用ひられてゐる。

安くば乗るべい（東海道中膝栗毛）　見付たら面の皮ア引めくつて呉れべい（浮世床初ノ上）

註　山田孝雄氏「平家物語につきての研究」

六　**希望の助動詞**　希望の助動詞の「たし」は院政鎌倉時代に現れたもので、自然、歌には當時嫌はれてゐた形迹がある。千五百番歌合の、

いざいかにみ山の奥にしなれても心しりたき秋の夜の月

を、判者定家は、「これを俗人の語にきくといへどもいまだ和歌によまぬ詞也」と批難してゐる。形容詞と同じ活用をしてゐるが、近代語に於て「たき」が「たい」となり、「たく」が「たう」となり、室町時代には次の如く用ひてゐる。

シタイママニスル心ゾ、河山ヲモ分裂シテトラセタイ儘ニ取ラセタゾ（古文眞寶抄）

實接ノ體ヲモシリタウヲホシメサハ（三體絶句一ノ二九）

「たう」の否定で、「たう」に助詞「も」を挾んで「ない」を附けたものは、當時「たうもない」から「たむない」となつて居り、

高祖ノ人ニミヘタムナガラレタゾ（同、二ノ三五ウ）

など見え、更に轉じて、

今日程參りとむない事はない（狂言、清水）　法華にはなりともなうおぢやる（同、宗論）

となつた。從つて「見たうもない」は「見たむない」となり、「見とむない」となつて、今日の「見ともない」即ち不體裁の意味の形容詞を作り出したと想像される。

ミタムナイカホガ猶ミタムナカツタ（蒙求抄四ノ一七ウ）　斯ウルタニミタムナイニト云ヘバナヲ歌ソ（同、五ノ一九オ）

狩の門出に見とむない奴めが行居る事ぢや（狂言鹿狩）

七　推量の助動詞　推量の助動詞の「べし」は形容詞と同じ活用をなし、形容詞に非常に似た性質を持つてゐる。語幹が單獨に用ひらるゝ如きは、その著しいものである。

いはむすべせむすべ知らに

この「すべ」は動詞の「す」と語幹「べ」の複合して出來てゐる熟語である。形容詞の語幹が熟語を作るのと同じ趣がある。語幹に接尾語の「み」「ら」が複合して「べみ」「べら」となることも、形容詞の語幹に似てゐる。

人知りぬべみ

これは形容詞の「里遠み」「春淺み」の如きものと比すべきものである。

「べら」は「べらに」と用ひ、又之に「あり」が複合して「べらなり」と用ひるのは、形容詞の「清らに」「清らなり」「さかしらに」「さかしらなり」などと比すべきものである。「べらに」は稀に見えるものであるが、今昔物語に、

不レ知ヌ並ト思スベラニ獨リ迷ヒ給フ也ケリ

とある。又その連用形「べく」が「あり」と複合して、「行くべからず」の如き形に用ひられることも、形容詞の「多からず」「少からず」の如き例と比較すべきものである。

「べみ」は奈良朝時代に活動した語法で、平安朝には詩語のうちにのみ殘り、「べら」は平安朝にのみ特有な語法で、延喜前後殊に貫之の歌に多い。

散りぬべみ袖にこきれつ藤浪の花（萬）　　さほ山の柞のもみぢちりぬべみ（古今）

見渡せば松のうれごとにすむ鶴は千代のどちとぞ思ふべらなる（土佐）

平安朝時代に音便で、「べく」は「べう」となり、「べき」は「べい」となつた。

車より落ちぬべうまどひ給へば（源）　　　いまゆくすゑはあべいやうもなし（更級）

いとほしうもあべいかな（源）

この助動詞は「べい」「べう」といふ形で、後世までも行はれた。

是シカルベイ者デアツタゲナ（蒙求抄三ノ三九）　　壁立モ及ベウモナイソ（同二ノ四四オ）

然るべい使があらば（天草平家）　　定めて今は八島の大臣殿の見参にも入りつべいと存ずる（同）

今日關東方言に特殊の未來をあらはす「べい」と云ふのは、この助動詞の活用中、今日に殘つた唯一の形である。室町時代に、

其ノ下ニ牛ヲモツナギツベシイソ（莊子鈔二ノ三一ウ）　　眞ノ山ノ居所ト云ツベシイ體ソ（三體詩法四三四オ）

雨原憲が樞に濕ほすともいつつべしい（天草平家）

とあるのは、「べし」の變化の上にあらはれた一種の異例であるが、「つべし」が慣用語として用ひられた爲に、この時代に偶然生じた特殊の形であらう。「つ」と共に用ひられて「つべしい」といふ場合にのみ現れるものである。「べし」は用言の終止形が亡びると共に、その所屬に迷つて未然形につく例が多く出て來た。足利義滿の頃の「今川大双紙」には、

馬の右を御めにかけべし　　馬の左のむなかひを取ておしつめてかけべし

しゐてのらせべからず　　手をそへてさげべし

の如くすべてこの形で使つてゐる。又抄物には、次の如く見える。

見ラレベキトコロノ實景ゾ（三體家法三ノ三オ）　呉山ノ景氣ヲ、ナカメラレベキゾ（同ノ二六オ）

「まし」は現實に反する想像をあらはすに用ひ、平安朝時代には、多く上に假定の條件をおいて、

この風暫し止まざらましかば、潮のぼりて殘る所なからまし（源）

見し人の松の千とせに見ましかば遠くかなしき別せましや（土佐）

のやうに用ひ、その活用形は、

まし（終止）　まし（連體）　ましか（已然）

としてあらはれてゐる。奈良朝時代には已然形がない。それ故に宣長は、活かぬてにをはとしてゐる。奈良朝にもある「ませ」といふ形をもつて、未然形のあつたものとする說がある。大槻博士をはじめとしてこの說を持する人があるが、どうであらうか。宣長は玉緒に之を「まくせば」の約といひ、義門は玉緒繰分及び活語雜話に「行かまほし」などの「ま」に左變の未然形「せ」が添うて出來たものと云ふ說を唱へてゐる。

近代語には亡びて用ひられなくなつた。

「めり」は、萬葉集十四に、

小草男と小草助丁と潮舟の並べて見れば乎具佐可利馬利

とある可利馬利を元曆本・類聚古集等に可知馬利とあるによつて、「勝ちめり」と訓み、奈良朝時代に「めり」のあつた一つの例とする人もあるが、ほかにその用例もないし、連用形を受けてゐるのも異樣であるから、この助動詞の奈良

朝時代に於ける存在は疑問と云はなければならぬ。この助動詞は平安朝時代に生じ、多くは記錄語として榮えて、後の時代にはやがて用ひられなくなつたものである。

この道もかしこからざめり(枕)

のごとく推量を原義とするであらうが、もと「目」「見る」などと語根を同じくし目擊する意味を現すところから、客觀的にさうと斷定してよいことを、「自分はさう見る」とやゝ斷定を控へる心持を持ち、斷定を婉曲に言ひ表す助動詞として用ひられるやうになり、院政時代以後は多くこの意味で用ひられてゐる。

例の人よりはこよなく年老いうたてげなる翁二人嫗といきあひて同じところにゐぬめり云々　さてぬしの御名はいかにぞやと云ふめれば云々　ぬしはいくつといふこと覺えずといふめり云々　それにていとやすく數へてむといふめれば(大鏡)

「らし」は奈良朝時代には、

らし(終止)　らしき(連體)

と活用し、連體形として、

古も然なれこそ空蟬も妻を爭ふらしき(萬一)

の如き形を示してゐるが、平安朝にはたゞ「らし」だけになり、それも左の如き用法となつた。

らし(終止)　らし(連體)　らし(已然)

ふる雪はかつぞ消ぬらし足引の山のたきつ瀨音まさるなり(古今)

松のねに風のしらべをまかせては立田ひめこそ秋はひくらし(後撰)

今日の口語の「らしい」は又別に接尾語から轉じて出來たもので、

らしく(連用形)　　らしい(終止連體形)

とはたらいてゐる。

「む」「らむ」「けむ」は奈良朝から平安朝にかけてひろく用ひられ、平安朝には「ん」「らん」「けん」と發音がかはつた。「む」は未來の推量又は時に關係のない推量につかふ。未來の助動詞は之から出たものである。「らむ」は現在の推量につかひ、隱れたる事實を推量し又眼前の事實から隱れた事情を推量する意味もある。

あごの浦に船のりすらむをとめ子が珠裳の裾に潮みつらむか(萬一)

立田姫たむくる神のあればこそ秋の木の葉のぬさと散るらむ(古今秋下)

前者は行幸の御供にある女房を京に在りて人麿が想ひやつて詠んだもの、後者は秋の木の葉のちるを見て立田姫のぬさを手向けられるのだらうと想像してゐるのである。もしさる事情の分らぬ時は、疑問の語を加へるが、平安朝の和歌ではそれを省くことがある。宣長が玉緒に「かな」に通ふ「らん」といつたのは、この種のものである。

知るといへば枕だにせでねしものを塵ならぬ名の空にたつらむ(古今戀三)

春の色のいたりいたらぬ里はあらじ咲ける咲かざる花の見ゆらむ(同春下)

院政鎌倉時代以後「らう」となり、室町時代まで用ひられてゐる。

得サレバコソ得タレ、得タラハ得サラマジ賢得サリシケフニ得サルラウト説給ハマシ(沙石集)

千年ニモ二千年ニモナルラウト思フ古木ノ(湯山千句五三)

傳書樣ナ事モアリヤセフズラフトテ（三體詩法抄四ノ四三オ）　其心ハナントアラウズラフ不レ知（同四ノ二六ウ）

平安朝以前には、動詞の終止形についたものが、連體・終止同形となつてからは、連體形についてゐる。助動詞につく場合も同じ。

嗚呼我兄弟共ガ高キニノボッテ頭ヲアツメテ會合スル處、皆通ク某リヲサシハサミソスルラフ我一人其席ニ陪セヌコトソ、アナタニモ思ヒタスラフナリ（三體絶句五ノ五）　麻姑ナトノ音信ヲセラルヽラウソ（同五ノ七）

その以後は全く衰へて、方言に「ゆくらう」「行つつらう」など殘つてゐるばかりである。「けむ」は過去の推量の助動詞である。奈良朝時代には「き」の未然形「け」が「けまく」「けまし」など推量の助動詞に接續するのと一般、「む」と連結したもの、平安朝には「けん」となり、古代語として亡びた。

八　指定の助動詞　指定の助動詞の「あり」は存在を意味する用言であるが、之が「に」と結び付くとき、「なり」となつて命題を作る繫辭の役目をする。この「なり」を指定の助動詞と云つてゐる。「と」「あり」の結びついた「たり」も指定の助動詞といはれるが、「なり」の如く古い起源のものではなく、漢文訓讀のため起つたもので、形容動詞といはれる「昭々たり」などの「たり」と起源を同じくしてゐる。それ故に中古文學には、

あくれば五日の曉せうとたる人外より來て（蜻蛉）　すみとげむ庵たるべくも見えなくに（古今六帖）

の如き例もあるが、多くつかはれるに至つたのは後に和漢混淆文の行はれるやうになつてからである。

室町時代には、「なり」の連體形「なる」が「な」となり、終止形も同じ形を用ひて、

唐ニハ度牒ヲ取カ大事ナソ（勅修百丈淸規、兩序章）　誰モ無力ヲスル者ナ程ニ（蒙求抄四ノ六五オ）

形ヲ土木ニスレドモ天然人爲ナホドニ（蒙求抄二ノ二四オ）　竹雲ノ本ハ無點ナホトニゴテコソ候フウソ（同四ノ一五ウ）

見ニ谷詩ニ眼モ明ニ成ル樣ナソ（錦繡段抄三ノ三九ウ）　純和―マシリ物モナウ和ナト云フ心ソ（蒙求抄六ノ一七オ）

などなつたこともあつたが、「にて」の約つた「で」と「ある」とを連ねて、「である」といふのを用ひるやうになり、それを省いて「であ」といひ、又約めて「ぢや」「だ」となつたものが、その後一般の指定を現すものとして使はれてゐる。

李善ガ自ラスル註デアル程ニ（三體絶句一ノ八ウ）　さてはこれこそ宮の御音であると定められた（天草平家）

凡八よりも重罪に附することであ（文祿舊譯伊曾保）　常人ニハナイ物ヂヤソ（湯山千句一七）

路ハ相作ヂヤ程ニ、腹立スマイ事ヂヤニ（蒙求抄四ノ六四ウ）

室町時代には、これらの形は相通じて用ひたのである。

身ハ威儀デアルホドニ律ソ、口ハ經チヤホドニ敎ソ（勅修百丈清規兩序章）

「だ」の例は多くはないが、次の如く見える。

楚項羽ニ書ヲ學セタレハ書ハ只姓名ヲシルス程ダニ書ハ無用ト云フ（湯山千句七三）

是不是共ニ打チ落シケヅリ落ス末下ニアル活處ダゾ（葛藤集九一ウ）

無所得ニシテ理知ノナイガ獅子吼ダゾ、理致は野干鳴ダゾ（同七六オ）

身命ヲカエリミヌ所存カ猛虎ダ（同八二オ）

これらは「ぢや」と混じて用ひてゐる。後には「ぢや」は終止にのみ限られるやうになつたが、初は連體にも用ひて、

罪人ヂヤ程ニ（三體詩法四ノ四）　爰ハ玄孫デハナイ、彥ヂヤヲ錯テ玄孫ト云ソ（蒙求抄一ノ一九ウ）

「母ぢや人」「兄ぢや人」「親ぢやもの」なども、この用法の遺物である。稀に「ぢやる」といふ形も見えてゐる。

たゞ人には馴れまじものぢや、馴れて後に離るゝるるゝが大事ぢやるもの(閑吟集)

「だ」と「ぢや」とは關東と關西とで相對立する二種の形である。室町時代のものに見えるのは、おほむね「ぢや」であるが、抄物のうちに「ぢや」に稀に混じて「だ」が用ひられてゐるのは、關西でも「だ」を用ひたと考へるよりも、抄物は講義筆記であるから、筆記した人が關東出身のものであつたりする場合、その方言を混じたものと想像して然るべきものであらう。國語調査委員會の「口語法別記」に、

だは東國の口語であるが、古くつかつてゐたか分らぬ。書物に見えるわ、江戸時代からで、それも初わ誠に少ない

と云つて、

西翁十百韻西國にて、くれないか是非是非花を所望だぞ

雑兵物語、上、足輕小唄　なまくらものでは切ぬものだ。同、上、槍擔小唄、各の腹中にあるべい事だとおもひ申せ

などあげてあるが、室町時代の文獻に「ぢや」と見えることが少いのは事實であるが、それは皆關西方言で書かれてゐる爲で、事實は「ぢや」と並んで關東方言では「だ」を用ひ、それが稀にはこの時代の文獻にも現れてさきに示した抄物の數例の如きものがあるのである。

指定の對話語は、「あり」の丁寧な言ひ方が「侍り」「さふらふ」であるから、古代語に於ては、「に侍べり」「にさふらふ」又は「にて侍り」「にて候ふ」で、

めづらかなる事に候ふとかたる(更級)　しかそれさる事に侍り(大鏡)

此らはもとより覺悟の前にて侍れば(保元)　是は東國より出でたる僧にて候(謠曲)

など云つたが、近代語では、「でございます(でござります)」「です」を用ひるやうになつた。
「ござる」は「御座ある」の約つたもので、室町時代後期に出來た。はじめは「あり」の尊敬動詞であつたが、ついで、「ある」を丁寧にいふ語となり、遂に指定助動詞の丁寧な言ひ方となつた。

この宰相と申すは清盛の弟でござるが(天草本平家)　いかなる御事にてござるぞ(同)

はじめは單獨に用ひたが、後には「ます」と連結して「ござります」といふ形であらはれるやうになつた。狂言記などはその初である。

叶はぬ事でござりまするに(烏帽子折)　是は御芽出度事でござりまする(ひめ糊)

「です」は「ございます」より新しいもので、

遠國に隱れもない大名です(狂言萩大名)　羽黒山より出でたる駈出しの山伏です(同柿山伏)
京内參りをすれば主に暇を乞はぬ法ですか(同、二千石)

など見えるから、室町時代にも既にあつたものだが、今日の如く「です」と云つたものでなく長音で、江戸時代の、

みかげの里に、かくれもない、びやくがうの彌陀六といふ男でえす(一谷嫩軍記)
ひまでえすか(洒落本眞女意題)　傍あたりの鼻があぶれへでえすは(浮世風呂前篇下)

と同じものである。又、

河内屋の與兵衛でやすとつつと入る(女殺油地獄)　アヽりよぐはいながら太夫でえんす(加增曾我)

などとも關係がある。國語調査委員會の口語法調査報告によると、

であす青森縣南部　だッす山形縣北村山郡　であす青森縣南部　だッす山形縣北村山郡　ぢやす富山縣下新川郡舟見區域

であんす茨城縣、山形縣西村山郡、島根縣　川郡　でえんす島根縣簸川郡　だす大阪府　どす京都府

など、種々の方言の形があるが、これら皆源を同じくしてゐるらしく、恐らく「おはす」の變化した「わす」が、「で」と融合した結果、出來て來たものであらう。「おはす」は鎌倉時代「わす」と變じ、次の如くなる。

ア、猫殿ハ天性小食ニテワシケルヤ（平家延慶本）大名達ノワセウ時ニハタナドヲサシテワセウホドニト云テ（蒙求抄五ノ八オ）

今日は最上吉日、聟のわするげな（狂言吟聟）

又「おす」ともなつた。

何か大笑でおす（狂言三人酩酊）

「でわす」が約れば、「だす」、「でおす」が約れば「どす」となる。これから轉じて「です」が出たものに違ひない。

九　比況の助動詞　比況の助動詞と云はれる「ごとし」は體言もしくは體言に準ずべき語と共に用ひられ、普通助詞「の」「が」等によつて接續し、一般の助動詞と云はれるものとは大いに性質を異にしてゐる。もと名詞の「こと」から出たもので、助詞とともに用ひられることに於て、その體言的の性質を多分に維持してゐるが、その職能用言と同じく文の敍述を成す力を持ち、活用も「く、し、き」と云ふ形を具へてゐることに於て、形容詞に似てゐる品詞である。それ故に之を形式形容詞といふ名を以て呼んでゐる人もある。はじめは「ごと」といふ形だけで用ひられ、紀記の歌にも「ごとく」「ごとし」「ごとき」の如き形は一つも見えず、常に用言を修飾するものとしてこの形だけで用ひられてゐるが、次第に形容詞のやうな活用を發達させた後も、未然形のごときは奈良朝から平安朝にかけて用例を見出し得な

い。恐らく用ひられなかつたものであらう。院政鎌倉時代に、次の如きものを見るのは珍しいものである。

傳說ガ如ク八生タリシ時佛法ヲ不信ズ(今昔物語)

室町時代を過ぎると又次第に用ひられなくなり、見えるものは殆ど皆孤立した「ごとく」のみで、「ごとき」の如きは稀に用ひられただけである。これも助詞「な」「に」等の助を借りて、

小利根デ、コソラコトヲ云マツル如クナホドニ(蒙求抄五ノ六ウ)

大道ハ白雲ノ如ッナ物ゾ(三體絶句抄三ノ四三オ)　昔ノ漢武ノ如クニ驕ヲ極テ(同一ノ四〇ウ)

のごとく云ひ、「如き」は「の」の助を借りて、

談義ヲ能スル人ヲ評スルト云如キノコト(蒙求抄二ノ四四ウ)

のやうに云つてゐる。この助動詞は次第に衰へて、

此書ニ對スレバ、サナガラ月明ニ三峡ノ中ニアリテ、聞ク猿ノヤウナゾ(中華若木詩抄中中ノ二五)

小柴扉ノ邊ニ殘花ガアルガ、雨中ニ見レバ泣クヤウナゾ(同、中ノ二四オ)

鷹ノヤウナ人ヂヤ(蒙求抄一ノ一六ウ)　我等ヲ草木ノ中デハ芝蘭玉樹ノヤウニナシタイゾ(同、一ノ二二ウ)

の如く、「様な」「様に」といふ形のものに由つて代用されて行つた。「ごとき」「ごとく」が形容詞類似の活用を持ちながら、形容詞や形容詞類似の助動詞等とちがつて、イ音便・ウ音便を起してゐないのも、この形だけで孤立してしまひ、用法が局限された結果である。

十　禁止の助動詞　禁止の助動詞の「な」は、王朝時代に於ては、一般の動詞には終止形、良變動詞には連體形につい

たが、院政鎌倉時代以後、終止形が連體形に同化されてからは、すべての動詞に連體形に附くやうになり、今日も同樣である。「なーそ」はその間に一般の動詞の連用形、カ變サ變動詞だけは未然形をおく。「そ」は感動詞で、係の助詞「そ」「ぞ」と同じものである。禁止の意味は「な」にあつて、初は

はなはだも夜更けてな行き(萬一〇)

の如く、「そ」を伴はないものがあつた。「そ」の濁音であらはれてゐるものがある。

言痛(こちた)けば小泊瀨山の石城にも率(ゐ)て籠りなむな戀ひぞ我妹(常陸風土記)

然るに、後に「そ」のみで禁止をあらはす形が出來て來た。平安朝にすでに、

我兄子が振さけ見つゝ嘆くらむ淸き月夜に雲たなびきそ(古今六帖)

のごときものがあるが、多くは院政鎌倉時代以後に見えるものである。

さら〳〵おぼしめしそ(大鏡)　　よべもようべもよがれしき。悔過(け)はきたりとん〳〵目にみせそ(梁塵秘抄)

ちりぬとも外へはやりそ色々の木の葉めぐらす谷の辻風(夫木和歌抄)

牛の子にふまゝな庭のかたつぶり角あればとて身なばたのみそ(同)

父ノ御故ニ命ヲ失ワム事歎カセ給ソト母上ヲナクサメ給ヘハ(平家延慶本)

室町時代にも、「なーそ」は行はれ、稀には「そ」のみの場合もある。

皇后ナラデハ、ナ入ッソト云フ心ゾ(蒙求抄五ノ一ウ)　　サノミ我ヲナ笑ヒソヨト云ヒテ(古文眞寶抄)

サウナ云ソト云程ニ(三體詩抄四ノ二六ウ)　　いとな泣いそ(天草平家)

平家の方人なするとな思はせられそ（同）

「そ」のみを用ひたのは、

カマイテ人ニ見セソ、チト我トバカリ見フス（蒙求抄六ノ一四ウ）

の如きものである。

第七章　助詞

助詞をその職分から見ると、（一）文の成分の關係を規定するもの、（二）文全體の意味に關係するもの、の二大種類があることが分る。

聞けばけふから稀荅が始まるといふ

に於て、「ば」「から」「が」「と」は、皆文の成分の關係を規定するもので、之を除けば、文の論理的關係は分らなくなる。卽ち體言の格を示すものと用言の法を示すものである。思想上に於て、一の觀念が他の觀念と如何なる關係に在るかを示すものである。

空には一片の雲だにもなし

の「は」「だに」「も」等は文の成分の存立に缺くべからざるものではない。文の意味を修飾するもので、之を除けば文の意味がかはるだけである。一を關係助詞と云ひ、他を修飾助詞と稱ける。是らのほかに感動助詞がある。「や」「よ」「かな」「かし」等である。余は大きくこの三類を分けて、わが國語の助詞の發生沿革を述べて見よう。

一　關係助詞　これは體言の格を示すものと、用言の法を示すものである。「の」「が」は體言に附屬して他語への係屬を示す助詞であるが、古代語には體言相互の結合をなすものとして、このほかに「つ」「な」がある。共に古いもので、奈良朝時代に既に用法が限られて居り、なかには之に連ねられてゐる體言が一個の單語のやうな觀を呈してゐるものもある。

とつ國　家つ子　まなこ　たなごゝろ

「の」「が」は又主格について現れるが、古代語に於けるものには、主語に附く場合も、むしろ主語の述語への係屬を明瞭にするのみのもので、國語では、主格でも目的格でも何らの助詞を附けず、語序が之を示すだけであつた。それ故に、

うはなりが肴こはさば（記）　さゝなみの國つ御神のうら荒びて（萬一）

といふ「が」「の」は、「梅の花」「梅が香」が體言の係屬を示す如く、用言への係屬を示すだけである。然し「の」「が」の間には、自ら差別が出來た。近い例が、「この人」「その人」「かの人」の如き用法を見ても、「こ」「そ」「か」と「人」とが單に結合されてゐるだけであるが、「が」は「わが國」「汝が名」「誰が袖」などの如く、多く人を現す體言につき、やゝ所有格に近い意味を發達させた。後世に至る程この差別は深化して、平家物語では二個の體言を結びつけてある場合、第一の者が物の名であることは唯一個の例があるばかりであると、山田博士の「平家物語につきての研究」に示されてゐる。この關係は「正宗の刀」と「正宗が刀」の二つを比較して見ればよい。この結果「の」に由て連絡される二つの體言は後のものが主となり、「が」によつて連結されるものは前のものが主になる。これが「が」が後に主格を示す助

詞として發達して行つた所以で、「が」の場合はその標出されることが重く、自然「が」が「の」を凌いで、多く主格をあらはすものとして用ひられることになつたものであらう。近代語では「の」が多く係屬を示し、「が」が多く主格をあらはすものとなつた。

鎌倉時代に口頭語では、已に主語に「が」をつける習慣が多くなつた樣だ。

このきかひがゆゝしき大事にて侍る(定家卿消息)

井底の蛙が大海を見ず、山がつが洛中を知らざるが如し(日蓮開目抄)

などはその例である。然し始はかゝる語法は雅馴なものとは認められず、主語を示すに至つた新らしい用法を忌む保守的の感情は、體言への係屬をあらはす用法をも合せて、「が」の附く形一切を擯斥し去らうとしたのも面白い。顯昭の古今集注卷四に、

ハギガハナハ萩ノ花也、ノトイフ言葉ヲカトヨメルコトアリ、ムメノエヲムメガエトヨメリ、ムメノカヲムメガカトヨメリ、カリノネヲカリガネトヨミ。アシノチルヲアシガチルトヨミ云々　キヨミガセキヲモウルハシツイハバ、キヨミノセキトコソイフベケレ、コレラ大旨ハケタムコトバナリ、シヅガナドハサグルコトバトオボエタリ、オホヤケヲキミガヨトヨムコトハナメシトイフベケレド、サヤマフコトバニヨミナラハシタリ

と云つてゐる。又宇治拾遺物語に、ある女房が侍家の侍佐多に「われが身は竹の林にあらねども、さたが衣をぬぎかくるかな」とふみにかいたのに、「さたのといふべきに、かけまくも畏き守殿だに、まだこそこゝらの年月ごろまたしか召さね、など女がさだといふべきことか」と罵つた話がある。

室町時代以後は「が」が主格、「の」が體言への係屬に用ひられる習慣が漸く確定した。

されぱこそ鶉が此所に一つ逼うたぞ(室町時代小唄集)

鳩どもが群り居る處に、鷲が來て摑み殺さうとい風情ぢやに由て(文祿舊譯伊曾保)

異國にさるためしがある(天草平家)

「を」「に」「へ」「から」は古今を通じて大體同樣で、「を」は感動助詞であつたものが、次第に論理的關係を示す役目をつとめるやうになつたもの。「へ」は邊といふ名詞から出たもの。「と」は「それ」「されば」などの指示の意味のある「そ」「さ」と語根を同じくするもので(s－tの變化)、「とかく」「とまれかくまれ」「とある家」などの「と」とも關係があり、名稱・狀態・目標等を示す語に添へて「それ」と指示する爲に用ひるのが本義、引用の語句に「云々と云つた」と云ふのは、上の句をさして「さう云つた」と云ふこと。副詞を作る「さら〳〵と」「ぽんぽんと」の「と」も擬聲語を承けて「そのやうに」といふ意味で、漢語の鏗然、莞爾などの然・爾と同じわけである。それ故に同じ趣の語句を並べる時、その下に附く「と」は、いづれもその上の語句を「それ」と指すのであるから、指示されるものに附屬して、一つづゝ添うたものである。

夏と秋と行きかふ空の通路は

然るに物を列擧する場合、「筆と紙と墨」などいふやうになつたのは、「と」が接續の意味にかはり、最後の「と」を省くに至つたからで、江戸時代から今日に至つて通例のこととなつた。「から」は紀記等に見える「かれ」とも通じて、「本來」「理由」などの意味を持つ名詞から來てゐる。

「より」は「から」と相通じ、動作の基點を示し、中古には相通じて用ひたが、今は「から」の方を多く用ひるやうになつた。「より」は中古にはまた、中間の起點を示して、動作が或地點に來り更に進むことに用ひたことがあつた。

この門のまへよりしも渡るものか（蜻蛉）　あたりよりだにな歩きそ（竹取）

みなそこの月の上よりこぐ舟のさをにさはるは桂なるべし（土佐）

「より」の古形に「よ」「ゆ」「ゆり」がある。奈良朝以前に用ひたものである。吉澤博士は同時代の文獻からその統計を取り、（一）「ゆ」「よ」の歌以外には用ひられず、（二）「より」の形が最も多く用ひられてゐる、（三）「ゆり」がもつとも少いといふ事實から、「ゆ」「よ」は「ゆり」「より」の略體で語彙の豐富なことを要する韻文にのみ用ひられたもの、「ゆり」は衰滅に近づき、わづかに餘喘を保てるもの、「より」は當時全盛をきはめ、今日まで殘ることを豫言してゐると論ぜられた。

「ば」「と」「とも」「ど」「ども」は用言の法を示すものである。「ば」は順說條件を示し、平安朝に於ては之に「や」をつけて「行かばや」の如き願望をあらはす形があつた。室町時代までも用ひてゐる。

ネガハクハ、知ッバヤト、思ヘドモ、更ニ、エシラヌゾ（三體家法三ノ三ノ一六オ）

しかるに當時しば／＼否定に用ひたのは珍しい。

友アリテ共ニ酒ヲモ飲デ遊ブニコソアレ獨リハ酒モノマレハヤ（三體詩句四ノ五四オ）

「と」「とも」、「ど」「ども」は逆說條件を示す助詞。前者は動詞もしくは之に助動詞のついたもの、終止形、もしくは形容詞の未然形につき、まだ成立たない條件を假定するに用ひ、後者は動詞・形容詞、もしくは之に助動詞のつい

たものは已然形について、成立した條件をあらはすに使つた。

「とも」「ども」のかはりに、「も」といふ形を用ふることが鎌倉時代にあらはれ、室町時代以後多くなつた。

人はいみじくたけくも、お及ばぬことなり(愚管抄)

同じ親王をこそ立てられしも、また捨てゝ自ら位に卽き給ふ(神皇正統記)

室町時代に入りては、又「でも」といふ形が出來た。

嘲ケトモ更ニ歸リ得ルコトナケレバ嘲テモ無用也(中華若木詩抄上ノ一)

「が」「に」「を」は接續を意味し、又反對の結果を伴ふ條件を示すものに發達してゐるが、「を」は萬葉集にも見えるが、「に」は平安朝にはじまり、「が」は鎌倉時代に生じた。そのうち「を」は鎌倉時代より無くなり、「に」は江戸時代より「のに」となり、「が」は今日まで用ひられてゐる。いづれも格を示すものから轉じたもので、たとへば「に」は「月に叢雲」といへば、「月あるに叢雲あり」といふことが出てくる。それ故に、

いつしかと心もとながらせ給ひて、いそぎ參らせて御覽ずるに、めづらかなる兒の御かたちなり(源氏桐壺)

などは、全く接續を示すのみである。しかし一般に兩節語が並ぶ時は、對照の意味を伴ふから、逆說的の意味はそれから出てくる。

風のおと蟲の音につけても、物のみ悲しう思さるゝに、弘徽殿には久しう上の御局にも參り給はず、月のおもしろきに、夜更くるまで遊をぞし給ふなる(源氏桐壺)

の如きは、逆說的の意味は、前後の文意から來るものであるが、

朝夕の言ぐさには、羽をならべ、枝をかはさむと契らせ給ひしに、かなはざりける命のほどぞ盡きせずうらめしき(源氏桐壺)

の如きものになると、明かに逆說的の意味を表すものとして發達して來たことが分る。いづれも連體形を受けてゐることは、もとの格助詞の性質を傳へてゐるものである。江戸時代も後になつて出來た「のに」になると、全く逆說的の意味を明かにあらはす助詞で、

夜なべに縫つておけばさぼ〳〵布子も着られますのに(浮世風呂)

中を見てゐたつて始られへ事だのに(花暦八笑人)

「が」ももとは體言の格を示す助詞から轉じたもので、

いとやんごとなき際にはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり(源氏、桐壺)

の如きものを、法を示す助詞と解するならば、無論誤であるが、

いたうそびやぎたまへりしが、少しなりあふ程になり給ひにけり(源氏、松風)

の如きものを見れば、法を示す助詞への轉義の經過は想像される。はじめは單に二つの命題を並べるものに過ぎないが、近代語になると、多く前後背反の意味を以てあらはれてくる。

「を」も同樣に、本義は單に接續である。

頼盛暫く支へたるを門より外に追ひ出さる(平治)

くはしく御有樣も奏し侍らまほしきを、待ちおはしますらむを、夜更け侍りぬべし(源桐壺)

しかるに第二次的に逆說的の用法を生じ、近代語では「ものを」の形に於てはつきり現れてゐる。

さうでなくば、その贋物いたし方がござるものを、さて〳〵困つたものだ(膝栗毛)

古今を通じて殆ど變らない。

二　修飾助詞　修飾助詞の「は」は、事物を取出して之を標示し、「も」は物を擧示して他のものに同列におく意味、「だに」「すら」「さへ」は相通ずるところある助詞。「すら」はもつとも古いもので、一端を擧げて他端を推せしめる意味を表す。平安朝時代には既に衰滅に近づいて、「だに」が之にかはることが多く、

そのあたりの垣にも家の外にも居る人だに容易く見まじきものを(竹取)

[illegible]、光やあると見るに螢ばかりの光だになし(同)　はかなき事だにかくこそ侍れ(源氏帚木)

の如く用ひてゐる。「すら」は平安朝には殆ど訓にばかり見えて用例も少く、殆ど用ひられなくなつた證據である。院政鎌倉時代には「そら」といふ形にかはつた。

儀テ仰セ有ラムニテソラ躬恒貫之ガ讀タラム様ニハ何デカ有ラム(今昔)

又心ナキ野邊ノ雉ソラ子ヲ思故ニ野火ノ煙ニ身ヲホロボストカヤ(平家延慶本)

「すら」といふ形は山田博士の統計によるに、延慶本平家に唯二つの例があるばかりで、口頭語では恐らく當時みな「そら」と云つたものだらう。しかも「そら」も用法が局限し、主格に附屬するものばかりであることは、後に亡びる前兆を示してゐるものであらう。「だに」は本來、

家の人ども物をだに言はむとて(竹取)　一文字をだに知らぬ者しが足は十文字にふみてぞ遊ぶ(土佐)

それを見てだに歸りなむ(竹取)　こゝにも心にもあらでかくまかるに昇らむをだに見送りたまへ(同)

命だに心にかなふものならば何かわかれの悲しからまし（古今）

の如く、最小限を示す助詞である。この用法は室町時代にも、

我ハ昭陽宮ヘ近キダニ、エヰヌホドニゾ（三體詩法二ノ四ウ）

功成テダニアラバ、五湖ヘ向テ隠居セナルゾ（錦繡段抄五ノ五〇オ）

向ハ何トケガレトマヽヨ、我ダニ道ヲ守ラハト云ハヨイゾ（蒙求抄五ノ二七ウ）

娶つてだにござるならば、よこしませうず（狂言ひめ鍋）

などあつて、引續きなほ生きてはゐるが、又これを「さへ」で代用してゐること今日の用法の如きものが多くなつた。「だに」は「すら」に比べれば、生命が長かつたけれど、その後間もなく用ひられなくなつた。「だに」は「すら」を兼ねて意義の擴張を行ふと共に、「だに」に「も」が附いて約つた「だも」を生じた。

夢にだもあふと見るこそうれしけれ、殘りのたのみ少なけれども（和泉式部集）

これは室町時代にも次の如く見える。

周公ヲ夢ニダモ見ザルトアルホドニ（蒙求抄五ノ一七ウ）　名ヲ求ムルダモ、生死ヲ忘ルヽゾ（莊子抄二ノ四二オ）

「さへ」は一の物事の上に更に他の物事を添へる意味を持つてゐるもので、この用法は、

世になく清らなる男御子さへ生れ給ひぬ（源氏、桐壺）

いとあはれにかなしく心ふかきことかなと涙をさへおとし侍りし（同帚木）

などに見るやうに、古今に通じてゐるが、室町時代には「すら」や「だに」の用法を代つてするやうになつた。

花盛ナルトキサエ見ル人モナクシテサビシキニ(中華若木下ノ一七ウ)

徒の鷄さへないならばこれこそ揚曉には起されまじいものと思うて(文祿舊譯伊曾保)

「ぞ」は語源から云へば、指示の意味があつて、代名詞の「そ」「それ」等と語根を同じうするものである。それと強く指し示す働をもつてゐて、紀記の時代には「そ」とも云つた。古事記も日本書紀も、「そ」「ぞ」相半ばしてゐる。平安朝以後は、「誰そ」「な！そ」などの形に名殘をとゞめた。

「ぞ」がある時は、文の結びは連體形とすることが、奈良朝から平安朝までの一般の慣習であつたが、院政鎌倉時代以後、終止形連體形が同形となつた結果、次第にこの係結の呼應の失はれた事は前に述べたが、室町時代の抄物に、

今度七國ノ亂イカヾアルベシ(中華若木抄上ノ一八ウ)　イカホド面白カルベシ(錦繡段鈔四ノ六オ)

サレハコソ梅花樹下ニハ有レ来フンナリ(同五ノ三オ)　サコソ面白クヲモハレントゾ、(三體家詩三ノ三ノ七オ)

など記してゐるのは、全體に係結の意識が衰へてゐたことを示してゐるものを云つてよい。後には、

破レタソ程ニ(錦繡段抄二ノ七)　ともかくもなつたぞならば(天草本平家)

何事なかきゝわきまへられうぞなれども(同)

の如く、單に意味をつよめる用を成すものになつた。

「なむ」「なも」は「ぞ」に似てやゝ婉曲な指示の助詞、散文に多く、歌につかふことは稀である。「なも」が古く、奈良朝時代に榮えたもので、平安朝初期に「なむ」となつた。これが係となる時は、文の結びを連體形をもつてすることは、「ぞ」と同じである。鎌倉時代には衰へて、近代語には使はれなくなつた。

「こそ」は「ぞ」よりも一層强く物を指示する助詞で、「こ」も「そ」も語源は指示語。「それ」「これ」と同じ語源から來てゐる。多くの部類の中から、そのもの一つを拔き出して區別する意味を持つてゐる。「こそ」の係を已然形で結ぶ習慣は、他の係結に比べて最も後まで殘り、室町時代にも大體は守られてゐるが亂れてゐるものも少くない。動詞形容詞の例はそれ〲その條に擧げたから、こゝにはその他の品詞の現れてゐる例をあげて見る。

文官ニコソ生ナリタケレト思フタゾ（蒙求抄四ノ一〇オ）　　詮ずる所は便宜に競うでこそあらうずれ（天草本平家）

の如きは守られてゐるもの、又、

アノ下ニコソ吾親ハ居ルラント（中華若木中蒙二三オ）

折節ハタヲコソヲラレツラウ、ハラリトキツタゾ（蒙求抄四ノ四ウ）

竹雲ノ木ハ無黠ナホドニ、ゴテコソ候ラウゾ（同四ノ一五ウ）

の如きは失はれてゐる者だが、かゝる已然形を失つてゐる者の上から、一般に「こそ」の係結も亡びて行つたのだらう。鎌倉時代から室町時代にかけて、「こさんなれ」「ござんなれ」といふ特殊の連語がある。「こさんなれ」は「こそあるなれ」、「ござんなれ」は「にこそあるなれ」の約つたものである。「ござんめれ」といふ同趣の連語もある。

さては一家郎等ござんなれ（保元）　　敵の惡源太にては非ずして、よき身方ござんなれ打てや者ども（同）

は、「ござんなれ」。又、

見るべき程の事は見る今はかうこさんなれ（平家）

は、「こさんなれ」。これを一個の感動詞と見ることの誤を說かれた松尾捨次郎氏（註）の說は動かないところである。又、

内カラノ御使ニハアラジ、平家ノ知リテ人遣ハシタルゴザンメレ（平家延慶本）

言ワウトテ作タゴザンメレ（三體詩法抄四ノ二三ウ）　　アワ京人ゴザンメレト（同四ノ四〇ウ）

は「ごさんめれ」の例である。

「し」は「ぞ」「そ」と語源を同じくして、やはりそれと指示する意味の助詞であつたが、既に中古時代から「ぞ」や「こそ」と違つて用法が局限せられてゐる、當時衰滅に近づいてゐたものらしく、王朝時代に出來た係結の約束も、この上には發達しなかつた。

はたゝぎも此しよろし（記）　　わぎも子がおもへりしくし面影に見ゆ（萬葉）　　醉泣するしまさりたるらし（同）

の如き奈良朝時代の用法を見れば、古くは「ぞ」と同じに用ひられてゐたことを察することができる。平安朝時代には條件の假定もしくは確定の條件に用ひられて、

名にしおはゞいざ言問はむ（伊勢）　　もみぢのいろをしそへてながるればあさくも見えず山川の水（拾遺秋）

うとき人にしあらざれば家とうじに盃さゝせて女のさうぞくかづく（伊勢）

の如き場合のほかは、「しぞ」「しも」「しか」「しこそ」などと他の助詞と結合して、

はるばるきぬる旅をしぞおもふ（古今羈旅）　　あまた見しとよの御禊のもろ人の君しも物を思はするかな（拾遺戀一）

かくしこそ千年をかねてたのしきをつめ（古今大歌所）　　たれしかもとめて折りつる（古今春上）

けふよりは今こん年のきのふをぞいつしかとのみ待ちわたるべき（古今秋上）

などと用ひ、いよいよ用法は局限して、途に「折しも」「必ずしも」「いつしか」等、一定の熟語の上にのみ殘つて行つ

た。院政鎌倉時代以後榮えた「ばし」も、この「し」の他の助詞と結合したもので、その源は平安朝に在る。

心も知らぬ人を宿したてまつりしてかまばしも引きぬかれなば、いかにすべきぞと思ひてえ寝でまはりありくぞかし（更級）

「ばし」は「をばしも」が省かれたもので、初めは目的格にのみ用ひたものだが、後には必ずしもそれに限らない。

むくろに手ばし負ひけるか（古今著聞集）　　人ニ頭バシ切ラレヰトナ不覺ノ人哉（平家延慶本）

など目的格であるが、

よく／＼宮仕ひ奉れ、相構へて御心にばし違ふな（平家）　　知らざる者の聊々しく斯様に申すとばし思ひ給ふな（曾我）

晉ノ稽康劉伶ト杜ヲ一様ニバシミルナ（錦繡段抄三ノ七）　　我ハ李廣ガ孫デソウナント、ハシ云ナ（同三ノ三〇ウ）

心タテハシ、一ツアルカ、用レ心ト、シヤケヲ用タカ、面白カゾ（莊子抄二ノ一八ウ）

金牛ノ振舞ハ顚狂テハシアランカ又提唱建立テハシアランカト也（碧巖抄八ノ一三ウ）

など、その他の場合にもついて、之をつよめる役目をしてゐるのである。然し室町時代の「ばし」は大體疑問か禁止にのみ用ひ對話に限られてゐる。江戸時代にも、

少將の子とある證據はしあるか（傾城[illegible]田川）　　必ず人ばし恨むな（松風村雨束帶鑑）

必ず疑ふてばし下さるなや（三十石艠始）

など、同じ用法に於て用ひられてゐるが、次第にすたれて、今日は佐賀方言・鹿兒島方言などに、わづかに疑問の場合に殘つてゐるばかりである。

「や」「か」は奈良朝時代より平安朝時代に通じて、文の中間と終止とに用ひられ、中間に在る場合には之を用言助

動詞の連體形にて結び、終にある場合には「や」は終止、「か」は連體形を受ける習慣であつた。又上に疑問の語のある時には、「か」を用ひ、「や」を用ひないと云ふことも堅く守られた。しかるに鎌倉中期以後には、

(註二)わづかにまみゆる心地するを、あけにけるやと思ひて(調度歌合)

寂光院の北坊にて見侍る、みさせ給ひしや、いまだし(賴阿高野日記)

佛果の障は、位の智を具て斷ずるやととふ(藤原基衡くらかるの日一)

など、「や」も連體形を受けるやうになり、又疑問の詞の下にも用ひるやうになつた。

姫君も何事にやつと思ひ給へり(住吉物語)　此土可レ爲何樣哉由(東鑑三)

人難モアリ災モキタラン時、神佛ノサウシムル事アルベカラズ、イカナル方便ニヤアラン(沙石集元和活字)

コハ如何ニシテカヽル佛ニ有ルヤト思惟ナスル程ニ(沙石集天文本慶長本)

「や」は鎌倉時代を以て終を告げ、唯「やら」の形にのみ殘り、「か」は文の終止にばかり用ひられて今日に至つてゐる。

「やら」は「にやあらん」から來たもので、院政鎌倉時代に「やらん」となつてゐるが、

女にはいかにすることやらんとおもえれど、今昔二九ノ　佛性すなはち如來なりとおほせられて候やらん(親鸞末燈抄)

其氣ニテヤラン、是ハイタチニヲヅル(吾妻鏡、元暦二年四月十五日)

室町時代に「やらう」となり、又「やら」となり、相通じて用ひてゐる。

鼓ヲ打ヲハキイタレトモ、今打ハイク番ヤラウナト、云ヤウナ事ガアル程ニ(勅修百丈清規抄、兩序章)

肩吾モ連叔モナンタル者ヤラソ（莊子抄一ノ四六オ）　尉ハゥツノ音ヤラウ、イノ音ヤラウシラヌソ（蒙求抄二ノ二二ウ）

後、單に疑問の「か」と同じ意味にもつかつた。

トコヤラフデ、トロ〳〵ト震フタル雷ソ（碧巖抄五ノ五五ウ）

龍ノ去ツタト云フハ、何ノ書ニアルヤラウ知ラステ候ゾ（蒙求抄五ノ一五ウ）

また、「やらう」と「やら」とを並べても用ひてゐる。

ナニサマ節去ヲ知ルヤラフ不知ヤライツレニ折殘ス枝カハヤカハル也（湯山千句三三）

これが單に並列をあらはすものとして今日に至つてゐる。

紅ナ物ハ桃ヤラ杏ヤラニ白ハ梨ヤラ李ヤラフ[illegible]雨中看紅白（湯山千句五三）

註（一）松尾捨次郎氏、國文法論纂。

註（二）現行普通文法改定案調査報告。

三　感動助詞　感動助詞は今日に比べて、古代語に豐富に使はれてゐることが、われ〳〵の注意を惹く。今日は命令形につく「ろ」「よ」「い」感動をあらはす「よ」「な」「ね」「は」「ぞ」「さ」等があるのみである。

奈良朝の文獻に見えるものは、「や」「よ」「を」「な」「ね」「に」「ゑ」「が」「ろ」「ら」「か」「は」などである。

「や」は呼格について、「八千矛の神の命や」などと云ふ。これは今日にも殘つてゐる。「石見の高角山の」の如きものは、單なる感動である。疑問の「や」はこれから出た。「よ」は今日も廣くつかふが、奈良朝に於ては少く、「も」と連結してゐる。「もがもよ」といふやうな連結もある。

吾はもよ(記)　籠もよみこもち(萬一)　水にちがもよ(萬一四)

「よ」は感動の場合は、「や」と同様であるが、「よ」は命令形を助ける助詞として發達したことが特徴である。命令形と離るべからざる感を與へてゐる。しかし、既に述べたやうに本來は命令と「よ」とは關係がなかつた。四段活用には「よ」を附けず、その他には「よ」を附けると云ふのは中古以後固致した一種の習慣に過ぎない。下二段の如き、加變・左變の如き皆「よ」を附けない方が本體である。之に反して四段でも「よ」を附けることがある。四段につく「よ」は感動助詞で、その他につくのは、活用形のうちであると云ふのは、勿論誤である。上二・上一が早くから殆ど凡て「よ」を附けるやうになつたのは、これらの活用は未然・連用・命令の三つまで同形であるからであらう。

「を」はもつとも古い感動助詞である。

かゝなべて夜には九夜日には十日を(記)　八重垣つくるその八重垣を(同)

などその例である。「春を淺み」「風をいたみ」などの「を」もその一種である。目的格につく「を」はこの感動助詞から出たものである。

「な」は名詞のあと、動詞のあとに附き、文の終にもつく。動詞の未然形につく時、願望の意味を生じてゐる。「ね」は「な」と通ずるものである。「に」はその變化であらう。

申しまさに。　なかりそに。

「ゑ」は多く形容詞の終止形に附き、「やし」と連結して、

よしゑやし浦はなくとも(萬二)

となることがある。「が」は願望をあらはし、「もが」「がも」といふ連結をつくる。

なでしこのその花にもが（萬三）　常にもがもな常少女にて（萬一）

平安朝以後には「がな」といふ連結も出來て、

知りたる人もがな（枕）

など云つたが、これは室町時代にもなほ、

湊の川の鹽が引けがな（閑吟集）

など、その例があるが、既にこの時代に語性を變じて修飾助詞として表れてゐる。

ナニヲカナマイラセウトスレトモ、何モナイホトニ（勅修百丈清規、住持章）

「ろ」は奈良朝時代上國の言語では、「大君ろかも」「ともしきろかも」等、單純な感動にのみ用ひるが、東歌には、

あどせろとかも（萬一四）　白雲の絶えにし妹をあぜせろと心に乘りてこゝばかなしけ（同一四）

とあつて、關東方言に於ける命令形附屬の「ろ」の起源を示してゐる。「ら」は、

兒をら妻をらおきて（萬二〇）　麻苧らを桶にふささに績まずとも（同一四）

などあるが、これが後の複數の接尾語の起源をなしてゐるであらう。「は」は一方に修飾助詞の起源を成し、感動助詞としては、「はや」「はも」などの連結としても表れてゐる。「か」は「かも」「かな」と連結し、「かも」は奈良朝時代に榮えたが、平安朝時代に「かな」を生ずると共に衰へ、古今集以後の勅撰集には跡を絶つた。藤原公任は、

かも、らしなどのふるきことばなどはつれに讀まじ（新撰髓腦）

と云つてゐる。殊更に用ひたものは、古歌の模倣である。このほかに、奈良朝には「よし」「やし」の如きものもある。

平安朝に於て、「ゑ」「に」「ね」「ろ」「ら」「よし」「やし」等皆亡び、「か」は「かも」「かな」などの連結に於て残り、「か」から「かな」が出來、又新しく「かし」を生じた。「かし」「かな」は室町時代迄用ひられたが、その後は亡びた。

吾心助けられいかし(文祿舊譯伊曾保)　　一曲きかせられいかし(同)

憎い奴が異性情させい、まづは罷うことがあるぞ(同)

近代語では、係の助詞の變化した「ぞ」が出來、それが變化して、「ぜ」といふこともある。「よ」からは「い」ができ、「な」からは、「なう」「のう」「の」「ねえ」「ね」が出來た。「な」「よ」「や」「ろ」は古代語から引ついでゐる。「は」も同じ性質のものだが、「わ」とかく習慣となり、それから出來たものに「わい」がある。

昭和八年十二月二十五日印刷
昭和八年十二月三十日發行

國語科學講座
（第六回配本）

東京市神田區錦町一丁目十番地
編輯兼發行者 株式會社 明治書院
代表者 三樹退三

東京市神田區三崎町三丁目八十九番地
印刷者 細谷祐三

發行所 東京市神田錦町一丁目 株式會社 明治書院